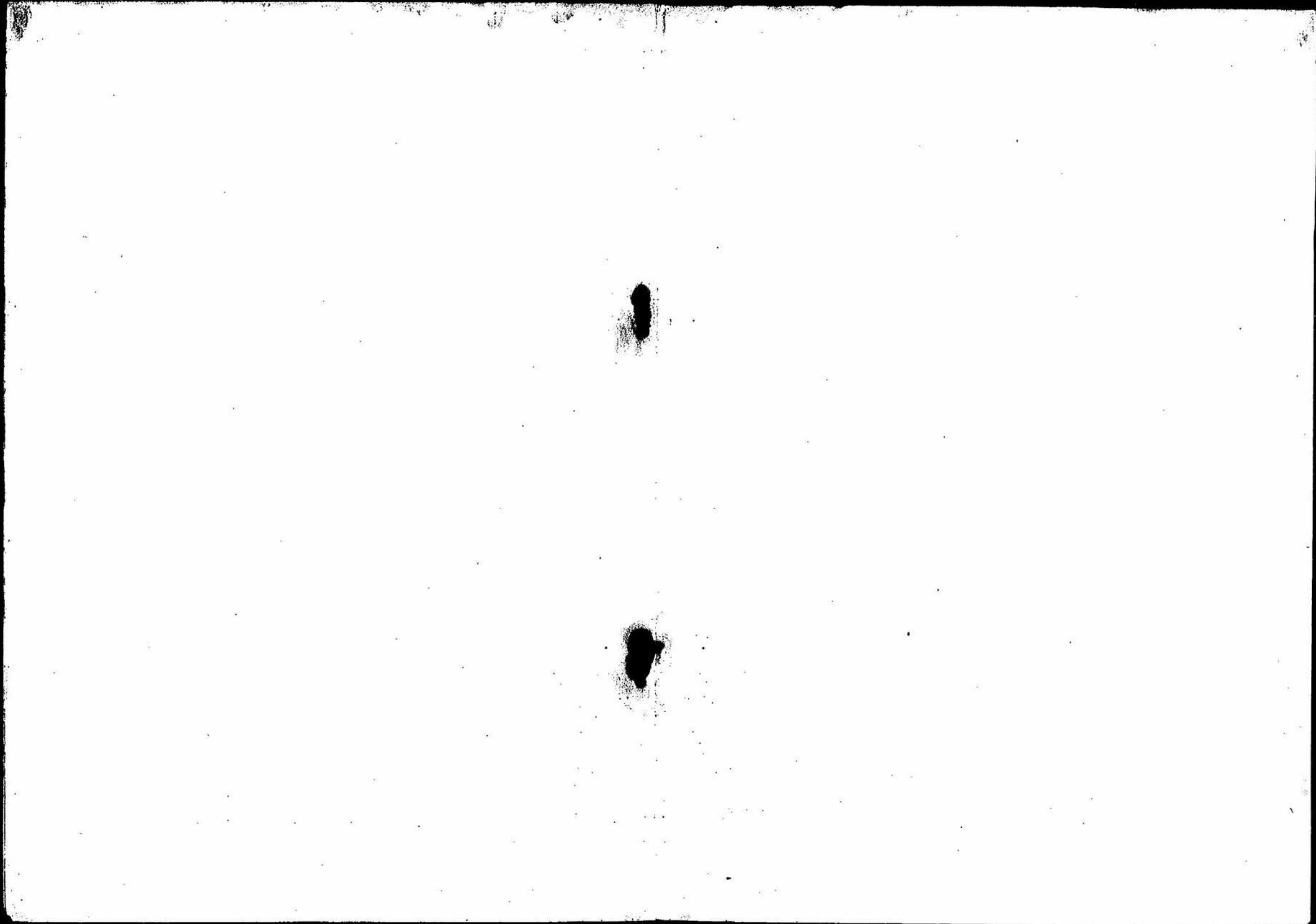


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 12

大正九年度古蹟調査報告 第一冊

金海貝塚發掘調査報告

朝鮮總督府



292  
39172  
8

金海貝塚發掘調查報告

大正九年度  
古蹟調查報告 第一册

大正九年十月朝鮮總督府博物館囑托林漢韶ト共ニ慶尙南  
道平安南道等各地ノ古蹟調査ニ從事候内、慶尙南道金海郡  
金海貝塚ノ調査報告書別冊ノ通リ提出候也

大正十一年十月三十日

朝鮮總督府古蹟調査事務囑托 梅 原 末 治

朝鮮總督府古蹟調査委員 濱 田 耕 作

朝鮮總督府古蹟調査委員長 有 吉 忠 一 殿



目次

第一章 遺跡	二
第一節 貝塚の位置及現狀	二
第二節 發掘の經過	四
第三節 貝塚の狀態	七
第二章 遺物	一一
第一節 石器	一一
第二節 骨角器(一)	一三
第三節 骨角器(二)	一七
第四節 土器	二三
第五節 土製品	二九
第六節 鐵器	三一
第七節 裝飾品	三三
第八節 古錢	三七
第九節 自餘諸品	三八
第十節 獸骨及貝殼	四一

目次

一

第三章 考 說

第一節 貝塚の示現する文化……………四五

第二節 貝塚構成の年代と人種……………四八

附表 朝鮮石器時代及金石併用期遺物發見要覽……………五二

附錄 金海貝塚出土獸骨調査報告(理學博士松本彦七郎)……………五五

圖 版 目 次

第一圖 金海附近地形略圖……………一

第二圖 同 上地質圖(小野三正君製圖)……………二

第三圖 金海貝塚地形實測圖(林漢昭實測)……………三

第四圖 金海貝塚全景(北方より望む)(谷井委員撮影)……………四

第五圖 同 上(南より望む)(同上)……………四

第六圖 金海貝塚西端掘削部貝層露出状態(梅原君實)……………五

第七圖 同 上南方岸部の貝層露出状態(同上)……………五

第八圖 貝塚上より金海邑を望む(同上)……………六

第九圖 北方より望める金海貝塚(同上)……………六

第十圖 金海貝塚西方部(同上)……………六

第十一圖 金海貝塚發掘地域圖(梅原實測製圖)……………七

第十二圖 金海貝塚第三層發掘後の光景(谷井委員撮影)……………八

第十三圖 同 上發掘作業(同上)……………八

第十四圖 同 上第四層の發掘(梅原君實)……………九

第十五圖 同 上第六層發掘終了後の状態(同上)……………九

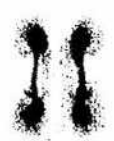
第十六圖 鳳凰臺より俯觀せる金海貝塚(同上)……………一〇

目 次

三

圖版

第十七圖	段掘終了後の貝塚(同上).....	一〇
第十八圖	發掘穴北部の上邊に於ける貝層狀態(同上).....	一一
第十九圖	發掘穴南壁の貝層狀態(同上).....	一二
第二十圖	金海貝塚發見石器及輕石.....	一三
第二十一圖	同上發見鹿骨製刀子柄頭(一).....	一四
第二十二圖	同上(二).....	一五
第二十三圖	同上發見骨製尖頭器(一).....	一六
第二十四圖	同上(二).....	一七
第二十五圖	同上(三).....	一八
第二十六圖	同上發見骨製鏃.....	一九
第二十七圖	同上發見鹿角品牙製懸吊品棗玉及び貨泉.....	二〇
第二十八圖	同上發見鹿角加工品(一).....	二一
第二十九圖	同上(二).....	二二
第三十圖	同上(三).....	二三
第三十一圖	同上發見黝青色土器口緣部(一).....	二四
第三十二圖	同上發見赤色素燒土器口緣部.....	二五
第三十三圖	同上發見黑褐色土器口緣部.....	二六
第三十四圖	同上發見黝青色土器口緣部(二).....	二七



第三十五圖	同上發見土器底部.....	二〇
第三十六圖	同上發見赤色素燒土器捺型紋片.....	二一
第三十七圖	同上發見陶質黝青色土器捺型紋片.....	二二
第三十八圖	同上發見赤色及黑褐色色素燒土器底側面.....	二三
第三十九圖	同上發見土器底裏面及臺附土器片.....	二四
第四十圖	同上發見小形壺圓錐形鉢.....	二五
第四十一圖	同上發見各種土器把手類.....	二六
第四十二圖	金海貝塚南方崖部發見土器片(一).....	二七
第四十三圖	同上(二).....	二八
第四十四圖	金海貝塚發見骨製及土製紡錘車.....	二九
第四十五圖	同上(側面).....	三〇
第四十六圖	同上發見鐵斧頭及鐵片.....	三一
第四十七圖	同上發見玻璃製棗玉.....	三二
第四十八圖	同上發見貨泉.....	三三
第四十九圖	同上發見米粒塊.....	三四
第五十圖	同上發見木棒.....	三五
第五十一圖	同上發見古瓦片.....	三六
第五十二圖	同上發見貝加工品.....	三七

目次

五

第五十三圖	金海貝塚採集貝類(一)	二八
第五十四圖	同上(二)	二九
第五十五圖	朝鮮史前遺跡分布圖	三〇

插圖目次

第一	金海貝塚縱斷圖	八九
第二	同上發見石器類	一一
第三	同上發見鹿角製刀子柄實測圖	一四
第四	朝鮮及內地發見鹿角製刀子柄及同石製模造品	一五
第五	金海貝塚發見尖頭器實測圖	二〇
第六	內地及朝鮮發見尖頭器	一八
第七	金海貝塚發見骨鏃類	二〇
第八	支那及朝鮮發見骨鏃類	二三
第九	金海貝塚發見土器實測圖(一)(口緣部)	二六
第十	同上(二)(底部器蓋把手類)	二六
第十一	同上發見土器捺型紋拓影	二八
第十二	同上發見紡錘車實測圖	二九
第十三	內地及朝鮮發見土製紡錘車	三〇
第十四	瑞西湖上住居址發見牙製懸吊物	三五



# 金海貝塚發掘調査報告

朝鮮總督府古蹟調査委員 濱田耕作  
同 古蹟調査事務囑托 梅原末治

貝塚發掘の  
歴史

慶尙南道金海郡金海面會親里の貝塚は明治四十年八月今西龍君の始めて發見せるものに係り爾來學者の之を調査せるもの少なからず。本府古蹟調査事業の開始以後に於いては、黒板鳥居兩委員の發掘調査を経たるが特に鳥居委員は大正三年及六年の前後二回稍々大規模の發掘を試み其の遺跡の頗る注目し値するを説かれたるを以て此の半島稀に見るの貝塚は著しく學者の注意を惹くに至れり。本員等大正九年度の古蹟調査の事に當るに際し委員關野貞谷井濟一兩君等と同行して金海に至り更に貝塚の構成遺物の性質其の年代等に関する資料を蒐集し前記諸氏の事業を助成せんと欲し約一週間に亘りて遺跡の一部を劃して是れが分層的發掘を行へり。固より這般の發掘は其の規模に於いてなほ小なるの憾を免れずと雖も幸に其の層位的狀態の調査は略ぼ満足す可き成績を示し各種遺物を多量に採集せしのみならず絶對年代考明の資料たる貨泉を發見して金海貝塚研究の過程に一躍進を試むるを得たるものあり。茲に調査の結果を報告し併せて其の考察する所を記すること左の如し。

## 第一章 遺跡

## 第一節 貝塚の位置及現状

〔圖版第二十六〕

貝塚の位置

金海貝塚は金海邑城の西南數町鳳凰臺と稱する高丘の東方にあり、貝塚所在地は元と鳳凰臺に接続せる花崗岩の低き丘尾の一端なりしも、今は金海より會峴里に通ずる小徑を其間に通じたるを以て、一見獨立せる小丘の觀を呈す。會峴里は此の鳳凰臺及び貝塚所在地の南方低地に位し、洛東江下流の形成せる廣大なる沖積平原に接せり。

貝塚の状態

貝塚所在地は東西に長く稍々瓢形に近き小丘にして、其の長徑約六十五間、幅中央に於いて約十五間、高さ二十尺に近し、中央部二ヶ處に天然の岩石を露出せるも、多くは芝草を以て被はれ、其の東部並に南部には雜樹林を生せるを見る。丘陵の東方及び北方は稍々緩傾斜をなし、一部畠地を作れるものあり、西方は前記會峴里に通ずる小徑を開きたるを以て、丘陵の一部を削去し、或は崩壞を致せるが、特に南方は會峴里人家の爲めに鑿開せられ、斷崖狀をなせる處多し。

貝殻の露出

貝殻は丘陵の西方小徑を開通せる部位に於いて、著しき露出を見るも、北方畠地と接せる細長き切取線に於いても、貝殻層の存在あり、東方より南方に亘りて、丘陵を繞りて低地一面に多少貝殻の散布あり、殊に南方斷崖の一部には、厚き貝層の土器其他の遺物を包含せるもの、今まなほ歴然として認むるに足る。<sup>(圖七)</sup> 又た丘陵と鳳凰臺との中間畠地には

從來發掘の地點

貝殻の散布中絶せるも、鳳凰臺東麓の畠地の一部<sup>(第六圖)</sup>には少許の貝殻あり、是れ即ち今西龍君が貝塚發見の當初先づ注目せられたる地點なるが如し<sup>(11)</sup>、なほ此等各貝殻散布地間の關係等に就きては、貝塚の構成を述ぶるの條に記す所あるべし。

丘陵の西端小徑に接せる傾斜面は、貝殻の露出顯著なる作業の容易なるに依り、從來學者の發掘を経たるもの尠からず、即ち先づ其の最北部<sup>(第三圖)</sup>は大正六年鳥居龍藏君の手によりて、約十尺以上の深き切取りを作られ、其の最下部に於いて一小石室を發見したり<sup>(12)</sup>、次に其の南方の鑿去部は大正四年黑板勝美君の發掘する所に係り<sup>(13)</sup>、更に其の上部の長き縱溝は、大正三年鳥居君初度の調査に際して發掘せられたるものなり<sup>(14)</sup>、此等の部分は今まなほ其の形迹を殘留し、累次發掘の歴史を物語れるが、吾人亦た此の地點の分層的調査に利便多きを認め、終に鳥居黑板兩氏發掘地點の中間<sup>(同上)</sup>に階段狀縱溝を穿つに至れり。

貝塚丘上に登れば、西方近く鳳凰臺より北龍宮峯許后陵を望み、更に東北高く盆山々城の聳立せるを見る可く、金海邑城は此等の丘陵山嶽に圍繞せられて、盆地の間に擴がり、首露王陵亦た指呼の内にあり、更に目を西南に轉すれば、鶴洛の平野は渺茫として海に連り、竹洞の舊城亦た小島の浮べるが如し、想ふに丘陵南方の沖積平野は、三溪里より流下する細流其の構成に與りて力あり、洛東江大洪水の際には、時に此の丘陵の麓に至る迄浸水することありと、言へば、往古貝塚築成の當時に在りては、此の丘陵は南方直に海水に濱せる臺地たりしなる可く、丘上の住民は、鶴洛の平野を蒼茫たる海面として眺めたるなる可し<sup>(15)</sup>。



〔注〕(一)今西龍君朝鮮にて發見せる貝塚に就て(東京人類學會雜誌、第二百五十九號)貝塚所在地及金海の地形に關して詳述する所あり、參照す可し。  
 (二)鳥居氏調査の結果に關しては、未だ詳細なる報告に接せず。たゞ總督府に提出せられたる寫真に依りて概要を窺ひ得るのみ。  
 (三)里板氏の發掘は主として同行の加藤清孝君の監督の下に行はれたるものにして、同君の談に依れば發掘は前後數日に及び、採集の遺品少なからざりしと云ふ。  
 (四)鳥居氏第一回の發掘に就きては、大正五年四月東京人類學會例會に於いて調査の一端を發表せられたり。  
 (五)此の發掘地點に就きては、地方人士の談に本くを以て或は多少の誤謬なきを保せず。以上の外本貝塚を調査せる學者には、早く今西氏に次ぎ柴田常惠君あり、申田西村真次君あり、木員等の後藤田亮君亦た西方の

一部分を試掘せられたり。  
 (六)今西氏の記述に依るに、此の貝塚の邊を當時土木職と呼び、連亘せる鳳凰臺に關して、土人の間に上古首露王に關係ある神聖地なりとの傳あるを云ひ、又た其の傳説は三國遺事載する所の駕洛國記の記事に關聯するを注意して、國書選述の年代より推し、連代に此の邊の首露王宮址たりとの傳説存在したる可きを説けり。(同君「朝鮮にて發見せる貝塚に就て」(前出)及び「金海貝塚の所在地土木職に就て」(東京人類學會雜誌、第二百六十號)即ち駕洛國記三國遺事に首露王後漢獻帝建安四年を以て殞落し「遂於國之良方平地、遺立廟宮、高一丈、周三百步、而葬之號首露王廟也」)とあるを以て、今の首露王陵は此の貝塚所在地若しくは鳳凰臺の東北長方に位置するを指せりとなすなり。

### 第二節 發掘の經過

〔圖版第七—第十二〕

縱溝の階段狀發掘

大正九年十月二十三日日本員等金海に著するや直に郡廳警察署員の案内により、同行の關野谷井南委員と共に、貝塚所在地に臨み從來發掘の次第を聴き、新に分層の調査の計畫を定め、既述の如く黒板鳥居兩氏發掘地點の中間に於いて、丘陵頂點より畑地に至る傾斜面二十五尺の間に一大縱溝を鑿開し之を階段狀に發掘して、貝塚西端に於ける最厚貝殼層の性質を精査すると同時に、丘陵中央部を發掘して、貝塚堆積の厚さを考察するの證憑を得んことを期せり。



縱溝の幅は滞在時日の豫定を慮り之を十尺となし、段掘りの各階は登攀の便宜より二尺を以て原則とし、丘頂より發掘を開始すること、せるが表面の部分は後世の擾亂を致せる虞あるを以て、是は單に分層の調査の參考的資料とし、内部の階段的殘層に於いて精確なる結果を獲ることとせり。

縱溝發掘の經過

翌二十四日午前九時、人夫六名を以て、頂上第一層(第十一圖を指す、以下第三、第三三順次下方に數ふ)より發掘を始む。此の層の上部は既掘の貝殼の堆積なりしが、底部に近づき、貝層の原狀を遺存せる部分に到達したり。乃ち包含の遺物を檢出したる後、階幅三尺を残して第二層(第十二圖)の發掘に移れり。此日の行程に徴して、翌二十五日より、人夫を増して十三名となし、同一方針の下に第三層以下の發掘作業を繼續したるが、何れも傾斜面下數寸乃至一尺の間は、稍々攪亂狀態にあるを除きて、内部は貝層構成當時の原狀を保存し、調査上極めて良好なる結果を示せり。二十六日午前中第五層即ち丘陵表面より垂直深位八尺の部位に到達せるも、貝層の厚さなほ數尺の下に及ぶ可きを想察せしむるものあり、而かも道路との距離漸く剩す所多からざるに至れるを以て、此層以下各階段の深さを三尺に變更して發掘を續け、二十七日午後には第七層に至り、道路に接觸し、特に四尺の深さを發掘せり。而かも貝層なほ盡きざるを以て、道路を残して其の西方に接近せる畑地に同一線上約二間四方の縱穴を穿ち、此の地點に於いて前者以下の貝層狀態を檢せり。二十八日午前中、此の部を掘ること二尺五寸にして始めて貝層盡き、基底の土壤面に達せり。凡そ丘陵の頂部より、此處に至る垂直深位實に二十尺に及べり。(第十一圖及第十二圖參照)

斯の如くして丘陵表面に於ける各段層の調査を行ひ遂に新しき貝層段を顯出したるを以て同日午後より最下段第七層(同VII)より始めて各段の貝層及び遺物の包含状態を綿密に調査し漸次上段に及ぼし翌二十九日午後に至りて全く其の目的を達せり。

各層發掘の概要

貝塚の構成状態に關しては發掘の遺物と共に次節以下順次述ぶる所あらむも特に顯著なる發掘品を指摘せんに最上層後世攪亂せられし部位に於いて高麗時代と思はるゝ古瓦片の混在せるを外にしては貝層中の土器破片は各層を通じて悉く赤色素焼黒色素焼及び祝部土器風の陶質の堅緻なるもの三者を共存せり。石器は出土頗る稀にして僅に第二層中二箇を發見せるのみなりしが第五層及第七層には鐵滓あり特に前者には鐵斧を發見せり。又第三第四層附近に於いて木炭塊と覺しきものを認め第七層にて米粒塊を得たり。就中特記す可き遺物は第六層の處女貝層中に於いて發見せる貨泉一箇と第四層中に於いて獲たる玻璃製棗玉一箇となり。

丘陵各部の試掘

前記西端の縦溝發掘の作業中二十七日午後人夫四名を割きて貝塚丘陵中央部の貝層状態を検する目的を以て岩石露出部の東方(圖三)に長さ二間幅四尺五寸の一區を劃して發掘を試みたり。然るに此の部分に於いては表面下三四寸にして貝層に達するも其の層の厚さ極めて薄く厚さ一尺に満たずして地山となれるを知れり。茲に於いて引續き丘の北邊畑地となれる部分を削りて全部丘陵の東西に亘り貝層状態を調査し更に南方人家に接せる懸崖部に於ける露出貝層の状態を観察せり。斯くて西端大縦溝の發掘による成績と併せて略ぼ満足す可き結果を齎せるを以て二十九日夕を以て貝塚全部の調査を終了

することゝせり。此の間別に囑托林漢詔は補助人夫二名と共に貝塚全地域の測量を完成す。即ち前後日を費すこと六日使役人夫延人員七十八人なり。

### 第三節 貝塚の状態

〔圖版第三十一〕

貝層の上下に於て遺物の秩序的變化する

金海貝塚の構成状態に就きては從來其の厚き貝層の上下に於いて包含の遺物の種類を殊にし文化變遷發達の痕を明にするものあるを説ける人無きに非ず。然るに本員等の分層的發掘の結果は其の二十尺に上る貝層に於いて遺物の種類は上下に於いて何等の相違を認めざる。其の土器破片の示す所によりて明なり。此の事實に關しては後節土器に就きて叙するに際して再び詳記する所あらんも赤色粗糝の素焼黒色粗質の素焼は堅緻なる陶質の祝部風の土器と共に存在して或る地域に於いては多少或る種類の土器多量に包含し或る種類のもの少量なるの現象はこれ無きに非ざるも此の現象は上下を通じて何等秩序的系統的の性質を有せず。他の骨角器其他の遺物の存在状態と相俟ちて西端二十尺の貝層は大體に於いて同一文化時期に於いて構成されたるものとするの外文化發達の順序を示すの證據に接せざりき。

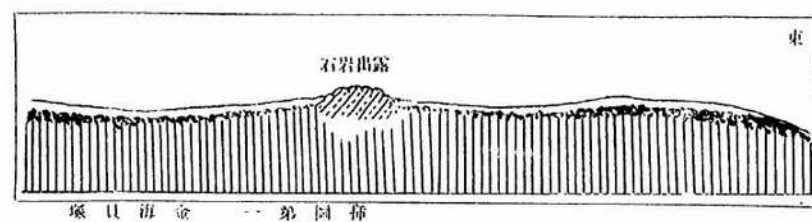
西端貝層厚由生成の理

丘陵西端に於ける貝層は吾人の發掘の結果に據れば主として蛤牡蠣類の貝殻より成り其の分量は各層に於いて多少の相違あり又た少からざる土砂の混在を見るのみならず第二層より第三層に亘りては厚さ一尺内外の土壤層の介在せる部分を認めたり。斯の如きは必しも貝塚構成時期の中絶を語るものに非ず。或は雨水と共に土砂の流下せるか



西岸の厚き  
貝層は斜線  
の堆積に過  
ぎず

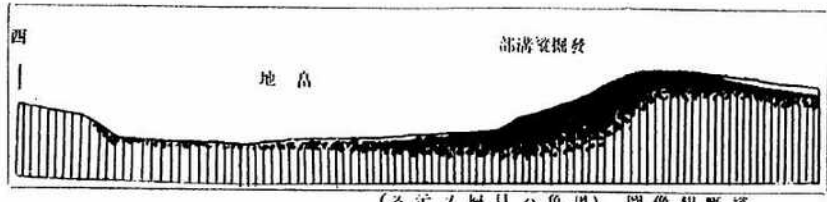
丘陵各部に  
於ける傍證



或は特に土砂を投棄せる等の事情に歸す可く二十五尺の傾斜面に於ける貝層は比較的長からざる同一文化の一時期に於いて丘上の住民が投棄堆積せるものにして其の斯の如き厚層を出現せるは畢竟傾斜部に於ける斜線的堆積に本くものに外ならず固より表面に於いては後世の遺物の存在は之を否む能はざるも之を以て非常なる長時期に於ける堆積の結果となすは吾人の贊する能はざる所にして既に述べたるが如く遺物の性質の上下相異ならざること亦た之を證するもの之謂ふ可し。

此の推測を傍證するものは又た丘陵中央部及北邊に於ける貝層の状態なりとす。即ち中央部岩石露出せる附近に在りては殆ど貝層の存在を認めず其の東西數間の區域は貝層存在せるも薄くして一二尺を超へざるに過ぎず吾人試掘の結果が告ぐる所なり(第三圖の斷面参照)然るに西方に至るに隨ひ貝層の厚さを増すもの、如く八間内外の地點よりは急に六尺以上の貝層となり西端崖部に及んでは終に二十尺の深さとなれるなり斯の如く丘陵の端傾斜部に於いて貝層の急激に厚くなれることは單に西端に於いてのみならず東端に於いても亦た同様の状態なるは中央部岩石露出部より東方七八間に於いて傾斜面に近づくや急に貝層の厚さを増せる徴迹あるによりて明かなり。

貝塚構成に  
關する吾人  
の結論



金海貝塚調査報告

たゞ此の部分に於いては大なる樹木と雜草の生せる爲め調査を充分にする能はざりき又た丘陵南部に於いても形勢は之と同様に於て其の絶好の證據は西南隅人家の後庭に於ける切り取りに於ける貝層の厚き露出面(少くとも十尺を越ゆ)なり此の貝層の厚さは恐らく西端の傾斜面に於けるものと連続せる堆積の一部に見る可きものならむ。

(第七圖) たゞ丘陵の北部は其端に至りて多少貝層の厚さを増すと雖も他の傾斜面の如く甚しからざりしは元來此の部分は緩傾斜に屬し貝殼の投棄せらるゝこと少なく又た投棄せらるゝも他の諸部の如く急斜面に非ざるを以て滑落して大集積を爲すこと無かりしを推測す可し。

以上吾人の調査考察する所に據れば此の貝塚丘陵の傾斜部に於ける貝殼の厚層は直に以て其の構成に長久なる年處を要したるものと見る能はず其の發見遺物は何等層位的變化を示さず表面及それに接近せる一部を除きて大體に於いて同一文化の時期に於いて構成せられたるものなりと思惟するを以て穩當なる見解なるを知らむ即ち丘陵の中央部岩石露出部を中心として其の周圍に食餘の貝殼其他の敗殘物を遺棄し特に傾斜面に於いて著しきものありし爲め此の部分に於いて貝殼の漸次上部より下方に滑落して遂に二十

尺の厚層を現出するに至りしなる可く、丘上比較的貝層の稀薄なる東西十數間の臺地は蓋し貝塚を構成せる民衆の住居地たりしを想定して誤なからむたゞ吾人の調査は其の時日の關係上此の住居跡と推定せらるゝ部分をも發掘して其の小屋掛の遺跡、燧火の痕跡等の有無を明にする能はざりしを遺憾とす。若し夫れ此の貝塚積成の年代と其の住民の何人なりしかの考察に至りては、發見の遺物と、四隣諸邦に於ける考古學的業績と對比して多少之を闡明するに足るもの無きに非ず。此等は次章遺物に就きて記載を試みたる後論述する所ある可し。

〔註〕(1)鳥居龍溪君「平安南道黃海道古蹟調査報告書」(大正五年度古蹟調査報告、七八六頁)に曰く、本具ハ前年度尙南道金海ノ貝塚及慶尙北道慶州半月城臺下並ニ大邱連城臺下ヲ發掘セシガ、其遺跡ノ下部ハ石器時代ニシテ、中部ハ之ヨリ稍新シク、上部ニ於テ三國時代(新羅、任那等)ノ遺物存在スルヲ確メ、之ヲ以テ同一民

族ガ文化ノ漸次發達進歩セルモノナラント云ヒシコトアリシガ、今回美林里ノ遺跡ヲ調査スルニ又之ト前々相似タル所アリ云々。  
(2)表面に於いては古瓦片の發見あり、又た南方崖部に於いて發見せる陶質高坏蓋等に至りては、之を貝塚積成の時期のものとなす能はざるに似たり。(後節參照)

## 第二章 遺物

今次の發掘に於いて本員等の採集せる遺物は頗る多量に上れり。就中其の大部分をなすものは各種の土器破片なるが、其他の遺物に在りては骨角製品最も豊富にして、刀子柄、鐵針其他の尖頭器あり。次に石器、鐵器、錢貨、紡錘車、玉類等あり。種類は多様なるは貝塚として稀に見る所に屬す。以下項を分ちて各種工作品に就きて述ぶる所あり。最後に貝塚構成の貝殻並に獸骨等に及ぶ可し。

### 第一節 石器

〔圖版第二十六〕

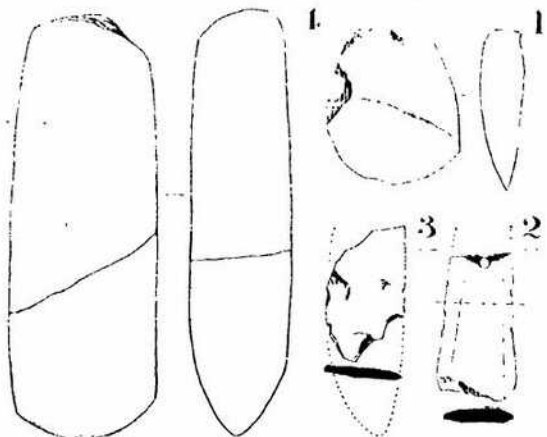
石器類は骨角器の多種豊富なるに比して出土頗る稀にして本發掘を通じて得たる處僅に打製石器と砥石片と各一箇に過ぎず。

打製石器はIIの層位に於いて發見す。長さ二寸六分あり。砂岩を打ち缺きて作れる粗製の品にして、撥形に近きも上部缺損して完形を呈せず。及部亦た打ち缺けて銳利ならず。今兩側面幾分の磨滅を見る。蓋し打石斧の類とす可きか。(第廿四圖)

砥石一箇は殘闕なるとも、本來柱狀の細長き類に屬せしことを推測す可く、石質は粘板岩なり。其の一面に磨研の痕を存するも、果して石器を磨研せしか金屬器に使用せしか明かならず。(第廿四圖)以上二種の石器の外IV、Vの兩層位に於いて各一箇の輕石を獲たり。(第廿四圖)共に不整形なるも、小形の一には角狀をなせる部分に多少加工の痕迹あり。當時何等かの

従来發見の石器

用途に供せしものか。以上の如き僅少なる遺品を以て本貝塚の石器の性質を概言すること固より不可能なるも従来此の遺跡より石器を發見せること甚だ尠なくして亦た以て本貝塚の一特色とす可し。たゞ僅少なから石器の存在すること



二第圖標 金海貝塚發見石器類(三分之一)

製蛤刃の長大なる太手の類に屬す。又た石庖丁は粘板岩製の楕形品と推定せられ就れも本員等發見の貧弱なる遺品に似ずして一種の特色を具ふるものなり。たゞ以上が余等の



知見に上れる確實なる石器の重なるものなるに於いて、今次の發掘が偶然石器の僅少なる地域に出會せるに非ざるを示すと同時に、本貝塚亦た骨角製諸品鐵器等の外に多少の石器をも包藏せるの事實を語るものなるを知る可し。

【註】(一)此の石釧及石斧は共に大正三年鳥居氏の將來に係る、石釧は黒色の粘板岩製にして、兩側に刃あり、中央の穿孔は雙面鑽狀をなす。石斧は硬質の砂岩を以て作り、片及にして、一面のみ磨研し、上述に柄の如きものを附したる形迹あり。長三寸五分(二の三)。(二)弘津金石館所藏の石斧は、同地の産にして、金海小學校長なりし山田伸二君が會館里にて採集して、同館に寄附せるものなりと云ふ。二箇共に硬き砂岩製にして長

六寸内外の楕形の大形に屬す。又は一は蛤刃に、他は片及なり。(二の三)の四に其の前者を示せり。(三)大正十一年五月の發掘にして、今ま總督府博物館に藏せり。青色の粘板岩製にして、小破片に過ぎざるも、其の幅一寸三分あり。原形は楕形をなし、本邦並に南滿洲より發見する石庖丁の形式に屬し、同じものは慶州其他より之を出ず。但し基部には穿孔を有せざりしに似たり。(二の三)

第二節 骨角器 (二) [圖版第十二]

骨角器の豊富

骨角製品は石器の稀有なるに反して本貝塚より頗る豊富に發見せられたり。此等は主として鹿角及び鹿猪の骨を加工して作れるものにして、其の成形より分類すれば刀子柄、鐵針等の尖頭器紡錘車等に大別す可く、其の製作の半途に屬する未成品其他材料の原品若しくは遺材と思惟せらるる獸骨角片をも多數に採集して器物製作の順序等を推考するを得たるもの鮮かならず。

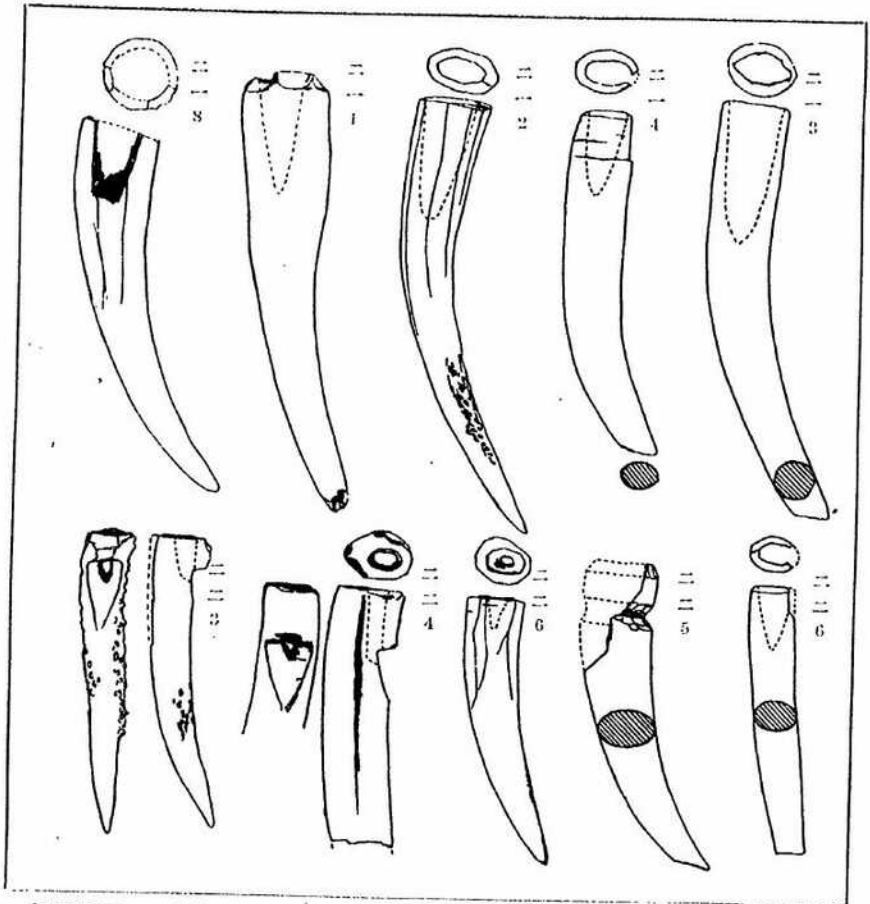
(一)刀子柄 は骨角製品中特異のものにして其數亦た多く約十箇に上り大小種々の類あるを見る。然れども其の特色とする所は凡て鹿の叉骨の尖端の曲れる部分を適當の長さに切り取り、其の表面を削り或は磨研を加へ、本の部分は中央の海綿狀の粗鬆部に若干の

刀子柄の製作

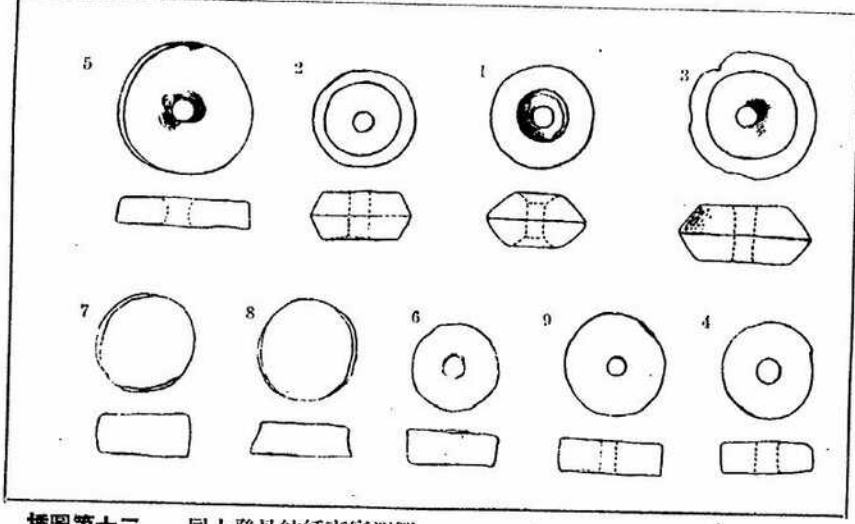
深さの孔を穿ち、他の物質を挿入するに便にせるにあり、但し時には鹿に非ざる他動物の角を用ゐたるもの無きに非ず。<sup>(第三十二圖)</sup>第二十一圖(1)乃至(4)は此種刀子柄の代表的遺品に属せるが、就中(1)(2)の如きは比較的簡單なる製作に属するも、(2)は其の表面を削平して、稍々多角形に如き形をなせり、又た(3)(4)は一層精巧なる磨研を加へ、尖頭をも切取りたり、うち(4)は其の本に近く二線の切り込みを半面に割せるは、或は裝飾的契機に出でたるものなるや、將た挿し込み部破損せるに由り、之を切斷せんと試みたるものなるや、恐くは後者ならむ。第二十二圖(5)の本に近く、括れをなせるが如きも、亦た此の理由に由るやも知る可からず。以上器形の完存せるもの、或は大部分を遺存せるもの、外單に角端を刀子柄に適當なる大きさに切取れるもの、更に其の表面に磨研を加へ、或は粗鬆部に孔を穿たんと試みたる等製作の半途に属するもの、尠ならず。其の大きさは掌を以て握るに適當なる四寸内外を普通とするも、中には三寸位の小なるもの及び六寸に達する大なるもの無きに非ず。<sup>(第三十三圖)</sup>

鐵製刀子の柄

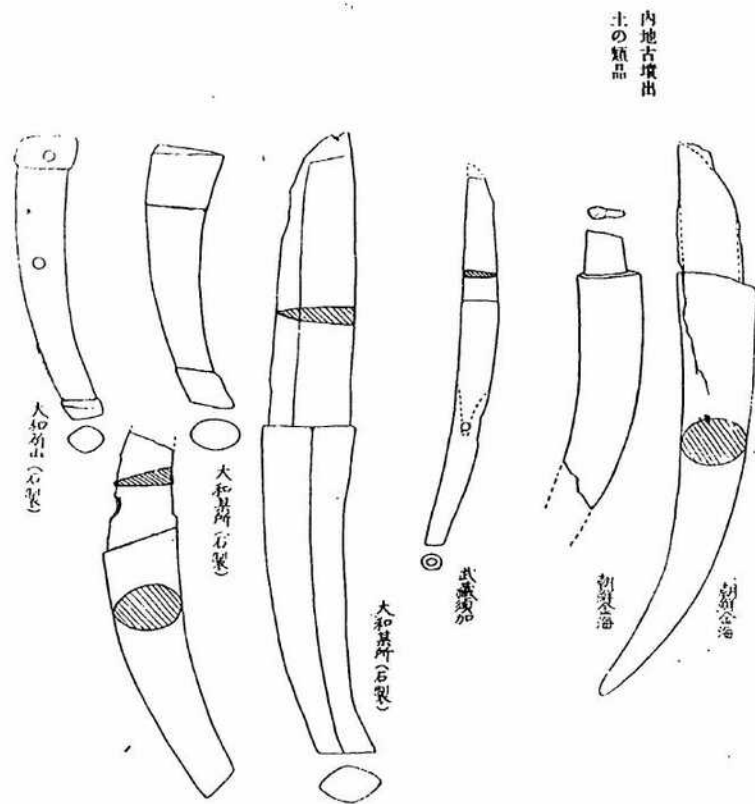
此種の遺物は本貝塚の外、大正十年十月本員等の一部を試掘せる梁山貝塚に於ても發見せられ、又た慶州月城の遺跡よりも出土せることあり、而かも本員等は發掘の當初より何者かの柄ならむとは想像せしも、果して如何なるものを挿入せしかを知る能はざりき。然るに其後總督府博物館藏品中、島居氏の舊に金海貝塚に於いて採集せられたる遺物に、全く同様の角製品多數存在せるのみならず、内に鐵製刀子のなほ袋部に殘存せるものあるを認め、是が刀子鐵製の柄として使用せられしものなるを確め得たるのみならず、更に



挿圖第三 金海貝塚發見鹿角製刀子柄實測圖



挿圖第十二 同上發見紡錘車實測圖



（一ノ分三）品造模製石同及柄子刀製角鹿見發地内及鮮朝 四第圖挿

同性質の完好なる遺品が内地古墳より發見せられたること、後藤守一君の注意によりて知るに至れるは、吾人の最も喜ぶ所なり蓋し鹿角等を以て石斧石鑿等の柄となすことは歐洲石器時代殊に瑞西湖上住居遺跡等に多く、此の角柄の意義を襲へるもの即ち之にして内地古墳出土の刀子（石製模造品アイヌの「マキリ」等亦た此の種形制の系統に外ならざる可し。たゞ金海に於いて余等の發見せる諸例は一も鐵刀子の附屬し、或は其の痕迹あるものを認めず、而かも柄部には著しき磨擦手澤の存するもの



あれば單なる柄として製作せしものと見る能はず、刀子に附着して使用を經たるものとす可きが如し。思ふに鐵器の稀少なりし時代に於いて、刃部は其の數比較的少なく、柄部は人々の嗜好便宜等に從ひ、多くの代用品を有せしものと見る可きか。又た斯の如き刀子は男女を通じ、各人の佩用せし、日常生活に最も必要なる器具にして、我が古史に見えたる「紐小刀」と稱するもの亦た此の類に屬するものなる可し。<sup>(6)</sup>

(二)磨球器 刀子柄と其形狀相類し、同じく鹿角の尖端を以て作り、表面或は磨球せられ、本に近く大なる切込みを作り、それより横に孔を穿ちて、木の部分に於ける切断面の中央に貫けるものあり、其の例二品を得たり。<sup>(圖の三、四)</sup> 一見箇の如き形を有せるも、其の目的に副はず、恐らく紐を此孔に通じて佩用せる一種の磨球器類と見る可きか、其の孔を穿つに斯の如く横斜せるは、圓孔を角の兩側を横斷貫通するよりも容易なりしに由るなる可し。歐洲學者は鹿角の尖端にして、前記刀子柄の如く磨球の迹あるものを多くは磨球器 (Polisher, smother, 伊語 spatola) と呼べり、亦以て此種角器の用途を考察するの一見解と云ふ可し。<sup>(7)</sup>

磨球器

〔註〕(一)本頁等の慶南道梁山具塚に於いて發掘せる同種の遺

品四箇あり、共に柄部のみにして、刀子を殘遺せず。詳細なる記述は、同日塚調査報告發表の日に譲る。

(二)大正六年十一月鳥居委員の發掘報告せるもの、伴出物は骨簾竹針等の尖頭器、土器等なり。刀子柄一箇にして長さ二寸五分、牛成品なり。

(三)今ま總府府博物館に在する鳥居委員が金海具塚兩度の發掘にて獲られたる刀子柄は、總て三十餘箇あり、内三箇に鐵製刀子の草を遺存す。圖示の一は角柄の先端狀損し、刀身約五分を遺す。刀子の横断面は長さ二寸五分、

角形なり。<sup>(四參照)</sup>

(4)本邦出土の此種遺品の一例は、武藏國北埼玉郡須加村大字須加字中郷の古墳發見の遺品にして、今ま東京帝國博物館に藏せり、角製柄部は中央に孔を穿ち、發掘に挿入せる刀子は長一寸三分あり、略原狀を呈す。此部に乾漆かと思はる、稍の殘闕を存す。なほ此の角柄刀子を右にて模したるもの本邦各地古墳より出土せり。

大和郡古墳(高橋健自君古墳發見石製模造器其の研究)「梅原未道、佐味田及新山古墳の研究」一七一―四頁及び大和某陵より出たりと傳ふるものを參考の爲め

圖示せり。<sup>(四參照)</sup>  
(5)鹿角等を以て石鐮の柄とせるもの、瑞西湖上住居其他「テラマール」より多く發見せらる。同遺跡に於いて金屬時代に入りては、金屬の利器に同じく角柄を附するもの多し。(Keller, Lake Dwellings, 參照)本邦古墳出土の刀劍に鹿角製の裝飾柄を附せるもの少なからず

るは、同じく此の系統なり。京都帝國大學文學部考古學報告書、第一冊、第三冊參照  
(6)高橋健自君古墳發見の遺品(一七四―一六頁)參照。  
(7)Peet, The Stone and Bronze Axes in Italy. (p. 52) 等參照。

### 第三節 骨角器 (二)

〔圖版第十三―第十六〕

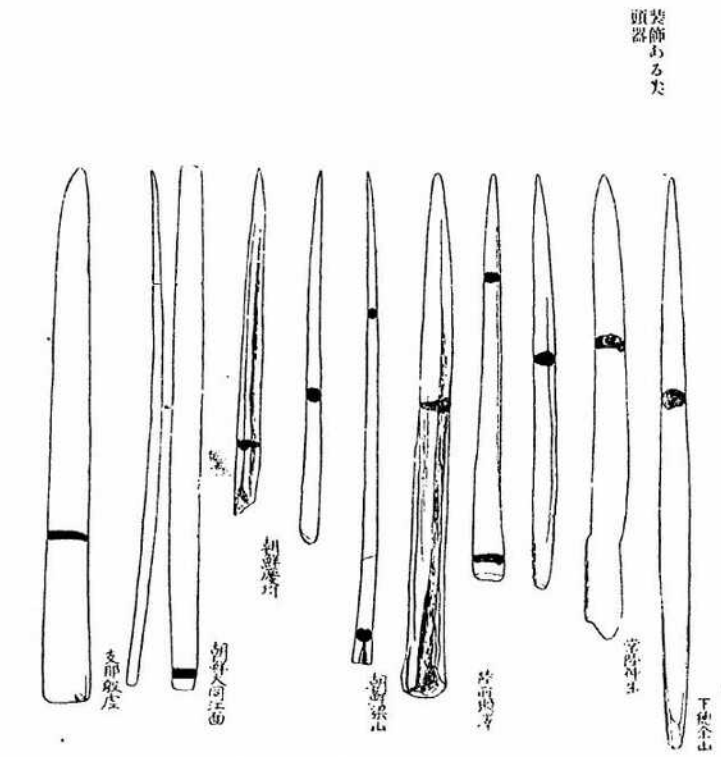
各種の尖頭器

次に骨角器の大部分を占むるものは針、銛、鏃等一切の尖頭を有する器物にして、一々の用途を岐別すること難きものあり。故に總稱して尖頭器 (Point) と呼ぶ可し。今次の發掘を通じて獲たるもの、總數三十箇に近し。今ま左に類に依りて之を記さむ。

(一)針類 猪鹿等の獸肢骨の緻密部を用ひて、之を削り且つ磨球を加へたるものにして、針身は断面圓形なるも、頭部に至るに從ひて稍々扁平となり、此處に兩側より穿てる針耳を開く。其の製作概ね精巧にして、長き使用を經たるものなる可く、滑澤あり。中には針耳の部分に於いて破損せるもの鮮からず。長さ二寸五分前後のものを普通として、時には四寸に達するものあり。<sup>(第二十三圖の1乃至3及5)</sup>

(二)大形針類 縫針の類とは同式なるも、其形長大にして、一端に針耳をば穿たざるものあり、断面は橢圓なるを常とするも、時には方形なるもあり。其の尖端の頗る銳利なるを見る。鏃針とも稱す可く、獸皮等を刺して太き紐糸を以て縫ふの用に供せしものならむ。<sup>(第二十四圖參照)</sup> 就中道路面にて採集せる一箇<sup>(第二十圖7)</sup>は完好なる一例にして、長さ四寸餘あり。又た第四層

発見の一箇(第三十)は針身方柱状に近く、尖頭に於いて急に錐状となれり。第五層発見の一箇(第四十)は最も見る可き遺品にして長さ七寸に近く、反りに有す。本部圓形なるも大部分は方柱状に鋭く削られたり。頭部に一種の松脂様の黑色物質を以て三條の帯を繞らし、裝飾とせるは異例に屬す。



(一ノ分二) 器頭尖見發那支及鮮朝地内 六第圖挿

(三)大形錐針類 前者よりも更に太くして粗製なるものは從來多く、錐と稱せられしものなれど、必しも漁具なりとは斷じ難く、各種の刺錐に用ゐられしものなる可し。本員等の得たるもの十數箇に上れるが此の類は多く、獸の大腿骨脛骨等の長肢骨を以て作り、骨の一端關節部の突起を残して頭部となし、骨本來の表面を利用して一面をなし、他の三面を削り磨研を加へ、

長さ五寸に及ぶ、而かも骨の内部髓腔の迹残れるもの少なからず。(第三十五)なほ此の大形尖頭器中に入る可きものとしては第五層発見の扁平なる一例なり。(第三十)全體に反りを有し、一端に徑一分の圓筒形の鋭き孔を穿てり。されば獸皮等を刺縫する大形の針とも稱す可きか。之と同形の遺品支那河南省彰德府殷墟の出土品と傳ふるもの、中にも其の例るを注意す可し。(六參照)

(四)骨針 最後に縫針に類し、針耳を有せず、却て其の部分扁平にして羽矢状を呈し、表面に三條の刻線を飾加せるものあり。(第四十)長さ二寸七分頗る滑澤を有す。錐針の裝飾あるものとして見る可きが恐らく頭髪の留針として用ゐしものならむ。支那殷墟の發掘中骨針と稱するものあり之に類す。

(五)骨鏃 是其の形の見る可きもの十二箇を數ふ、之を形制より大別する時は二類とす可し。第一類は鏃身と莖部との間に判然たる區別無く、葉卷、煙草若しくは鯉魚狀に近き形を有したる鏃鋒の部分莖部に比して鋭利に削られたるに過ぎざるもの是れなり。(第二十六參照)此の内或は稍々扁平なるもの、短小なるもの、細長なるもの等種々の變化あり、其の製作亦た精粗の差違あるも鏃として最も簡單原始の形式に屬す。

第二類は鏃身と莖部との間に截然たる區別を設けたる、進歩型式に屬するものなり。其の発見層位に於いて前類よりも新しと言ふ能はず。たゞ其の多數(四箇中)は共に第五層より出でたるを注意す可し。となす、内一箇は細長き圓錐形の鏃身を有し、莖との間は殆んど直角に切り込みたり。其の細き圓莖今は大部分を缺失し、今全長二寸八分あり、鏃として

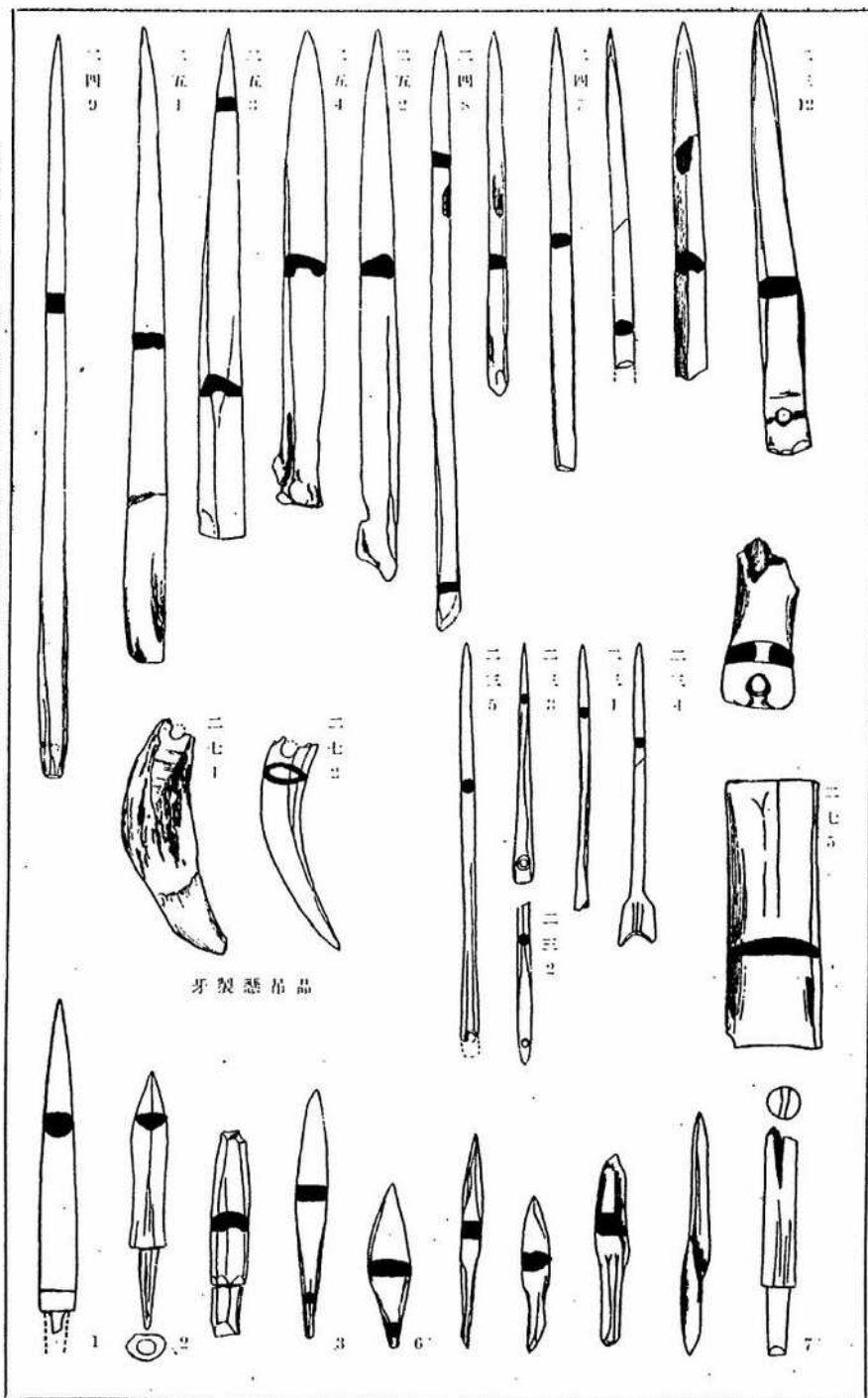
有柄三角鏃

頗る大形なり(圖の1)次に他の一箇は其の形最も精美にして全長二寸三分あり鏃身の基部は圓形なるも其の尖端に至りては三角鏃をなし支那漢鏃と其の形を同ふせり(圖の2)殘餘の一箇は鋒部缺失せるも此の部分に矢筈に類して銳利なる縦の切り込みあり而かも矢筈としては切り込み深きに過ぎ弓筈としては全體小弱に失せり(圖の7)第四層發見の一例は莖部との界に深き切込み線を設け莖部を細く削り去らんとして未だ完からざる未成品なり製作の順序を示す點に於いて興味ありとなす。

以上骨鏃の遺品中第一類のものは簡單原始の形式にして近く梁山慶州等南鮮の同種遺跡よりの發見品に其の類例を見るのみならず支那河南省殷墟出土品中にも此種の大形骨鏃及貝鏃あり我が内地の石器時代遺跡に於いても例へば常陸椎塚發見品の如く其の例を見るだ、南滿洲或は時に内地貝塚等より出せる扁平三角狀の磨製石鏃形の骨鏃を發見せざるを注意す可し次に第二類の有柄のものも其の簡單普通の形式のものには如上の朝鮮遺跡の發見品にも存し平壤大同江面の遺跡又た南滿洲石器時代の遺跡等にも著しき發見品あり蓋し第一類の形式と共に竹鏃等と本來の形を共通にし漸次柄部を矢筈に挿入するに便にす可く發達し來れるものに外ならず兩者並び行はれしは之を想察するに難からずた、茲に一考す可きは有柄三角鏃の形式に屬するものが(圖の2)漢の銅鏃と同軌に出るの事實なりとす固より漢鏃の如き三角鏃銅鏃も恐らく本來は此種骨鏃若しくは石鏃等より發達變化し來れるものなる可きも金海貝塚に於いては此の型式の骨鏃は寧ろ特異の例にして他の多數の骨鏃と其の制を殊にするのみならず本貝塚の

插圖第五

金海貝塚發見尖頭骨質測圖



插圖第七

同上發見骨鏃類 (三分ノ二)

(備考) 圖ノ下方ノ一例ハ插圖第七ニ當ル、記入ノ數字ハ圖版トノ對照ノ爲メ。



三角鏃の起  
原説

構成が後説するが如く其の確證ある發見品によりて後漢の初期を上らず漢代文化の影響を受けたりと認むべき點あるに於いては或は之を以て漢鏃の感化を意識的若しくは無意識的に受けて之を骨製の上に現したりと解するも亦た必しも附會の説に非ざる可し。而かも漢の三角鏃は土耳其斯坦のアナツ (Anan) のクルガン (Kurgan) 發見品よりして、シュミット (Schmitt) 氏の提出せる希臘スキタイ人 (Graeco-Scythians) に起源を有して東方シベリヤ其他の地方に分布せるものなりてふ假説に想到する時は特に一層の興味を覺ゆ可きなり。<sup>(10)</sup>

其他の製品

各種尖頭器の外に骨角製品には紡錘車<sup>(第四十圖)</sup>と鹿角の一端に穿孔あるもの、斷片<sup>(第三十七圖)</sup>等あれど前者に就きては後節土製紡錘車を別叙する際に併せ述ぶるを便とす可し。後者は鹿角の枝の分岐點と思はるゝ部分を切りて作り其の一端に雙圓錐形の孔を開けるも他の一端は缺損して其の完形を想像する能はず。従て用途に就きても之を想定すること難し。但だ穿孔部には之を懸垂したること久しき爲め磨滅を生じ滑澤ある淺き凹溝を残したるを見れば或は一種の懸垂裝飾品の類とも見る可きか。

加工せる材

今またに骨角器の材料として多少の加工あるものに就きて一言せん此の類のもの多數ある内に最も顯著なるは獸の長肢骨の緻密部を切りて長方形の板状となせるものにして長二寸三分幅八分あり。<sup>(第七十圖)</sup>表面に縦に微かなる刻線の残れるあるを認む其の用途は確め難きも其の長さは恰も小形骨針と略ぼ相似たるより見れば或は斯る器具の材料として第一歩の工程を示すものか。

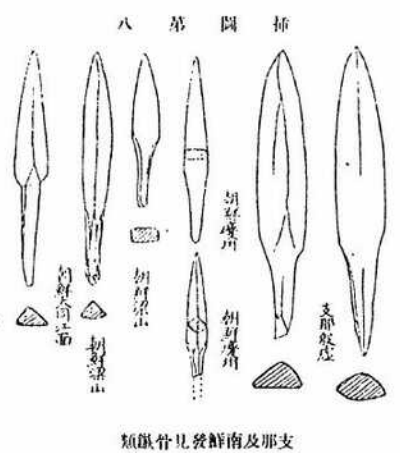
金屬製利器の使用

其の他第二十八圖に示せるは此等加工骨角の遺品なるが長肢骨を長さ六寸五分に切断し一端に切込み線を遺存するものあり(同圖)是は長大なる尖頭器を作るの材料に供する目的たりしなる可く又長四寸七分同二寸弱の切断骨片あり(同圖)後者は小なる針類を作るの材料なる可し鹿骨には長三寸五分二寸一寸五分等に切断せるもの(同上)長三寸に切りて周囲を削れるもの(同圖)鹿角の太き根本を短く切りて上下に加工して紡種車を作らんとして中止せるもの(同圖)等ありなほ鹿の又角の其の儘附着してたゞ其の上下兩端を切りたる角器の原料品を第六層に於いて獲たり(第三圖)

上來記述する所に依り骨角製品が他の利器に比して特に出土の數量豊富なるを見る可く其の製作に際しては金屬製利器を使用せる形迹の推測せらるゝあり是は狩獵に用ゆる箭鏃か骨鏃を主として石鏃を絶てて見ること無く恰も魏志東夷傳に倭國の俗を記して竹箭鐵鏃骨鏃を用ゆるを云へるものと對比して此の貝塚構成民族の文化狀態を考察する上に大なる興味を惹く。

- 【註】(一)支那河南省彰德府安陽縣殷墟より出土せり傳ふる骨製尖頭器の京都帝國大學に送するものに其の類品あり其の一、二を參考として圖示せり。(第二圖)なほ羅振玉君「殷墟古器物圖録」に骨鏃として挙げたるものに此の類あるを見る可し。
- (二)前出羅氏「殷墟古器物圖録」の骨鏃を見よ。京都帝國大學藏品中亦た其の例あり、埃及王朝以前の象牙製品に亦た裝飾附屬針あり。多少相似たるものあるを見る。(Capart, Primitive Art in Egypt, Chap. II)
- (三)大正六年鳥居氏慶州月城附近にて採集せられ、總府府博物館に送するもの。(第四圖)梁山日塚に於いて大正十一年藤田氏の發見せるもの。(同上)等を舉ぐ可し
- (四)前出羅氏「殷墟古器物圖録」に載せたるもの及び京都帝國大學藏品中に之を見る。(第五圖)
- (五)東京人類學會雜誌、第四百三十四號參照。
- (六)南滿洲發見の骨鏃としては、京都帝國大學藏品中旅順老鐵山附近出土品中に扁平にして兩脚あるものあり。扁平三角形式の磨製石鏃に至りては同地其他遼陽附近

等に於いても發見せらる(同上)なほ鳥居龍溪君「南滿洲調査報告」を參照す可し。内地日塚發見の一例として、モリス氏「大森介塚」中に圖示せられたるものあり。



支那及南鮮發見骨角類

第四節 土器

〔圖版第十七乃至第二十四〕

土器破片の包含量は西端發掘部に於いても頗る豊富なるのみならず南方崖部の露出貝層に於いても亦た然るを見る。たゞ器形を復原し得可き大破片若しくは破片の一群は殆んど稀にして僅に二三を得たるのみ。土器の種類は既に述べたるが如く略ぼ三種あり。一は緻密陶質の青黑色若しくは黝黑色のものにして内地の所謂祝部風朝鮮の所謂新羅燒

金海日塚發掘調査報告

- (7)平壤府山田鎮次郎氏の蒐集品中には此を見る挿圖第八
- (8)京都帝國大學所藏品中に其好例あり。
- (9)殷墟發見品中柄部較然ならず。而かも断面平たき二等邊三角形を呈するもの鮮からず。
- (10)ハムベリ氏の千九百四年土耳其斯坦探検中「アナツ遺蹟に於ける有史以前の文化」(Pompeii, Exploration in Turkestan, Expedition of 1904, Prehistoric Civilization of Anau)第一冊に於いて、シニヤド氏が考古學的遺物を解説し、其の結論中三角形鏃に關して、其の分布を詳説し提議に論及せる條を見よ。なほヤトリー氏「器具及武器」(Pieris, Tools and Weapons, p. 33)參照。但し一方に於いては三角鏃が各地に於いて自然的に獨立の發生を見たりとも説き得可し。
- (11)三國志魏志東夷傳倭國の條に「兵用矛楯木弓木弓短下長上、竹箭或鐵鏃、或骨鏃、所有無與倫比其末層同」とあり。なほ正倉院藏物類に「白黑交羽骨鏃箭」とあり、當時骨鏃の存在せるを見る可し。(那珂通世遺書「三二八頁參照」)

各層凡て三  
種の土器を  
發見す

下層には赤  
色及黒褐色  
の土器を多  
く發見す

と稱するもの、系統に入る可きもの二は赤色の素焼にして我が彌生式土器に類するもの三は黒褐色の素焼にして其質稍々粗弱なるものは是れなり而かも此等各種の土器中黝色陶質の祝部風のもの其の手法最も進歩し赤色素焼は之に次ぎ黒褐色の素焼は最も幼稚なる窯法に屬するも吾人が縦溝に於ける分層的調査の結果は三者多少の數量を異にするも發掘の各層位共に三種の土器を包蔵し上層に於いて或者を主とし下層に於いて或者を缺く等の事實は終に之を認むること能はざりき又た斜面に於ける發掘は垂直線的に新古の層序を示さず新しき遺物は外部表土に近く古き遺物は内心に向つて存在す可く層位的順序は水平線的に按排せらる可き傾向ありとすも此の方向に於ける觀察の結果も亦た三種の土器に於いて何等内外に於ける存在の偏重無く判然たる層序を認むるに至らざりき土器の破片には大小の差あり數字を以て俄に多少を定む可きに非ずと雖も發掘の際に於ける感想に於いては下層に於いて赤色及黒褐色の素焼比較的多量なりしが如し而かも依然として陶質の新羅燒風のものを出せること既に記せるが如し兎に角這の事實は本貝塚構成の年代と時期の長短とを考察する上に最も重要な資料を供するものなれば後段之に關して別に論及する所ある可く今次に各種の土器に就いて其の性状を記述する所あらむ。

(一)陶質黝青色土器 西端縦溝の發掘に際しては器形を復原し得可き遺物は發見せざりしも南部崖部の貝層中に包含せるものに高坏蓋(圖の四十三)と低き臺附坏(同上)の器形を見る可きもの二箇を獲たり前者は扁平なる鈕を有し表面に同心圓帶と緋り模様の裝飾を有

器形を見る  
可き遺品

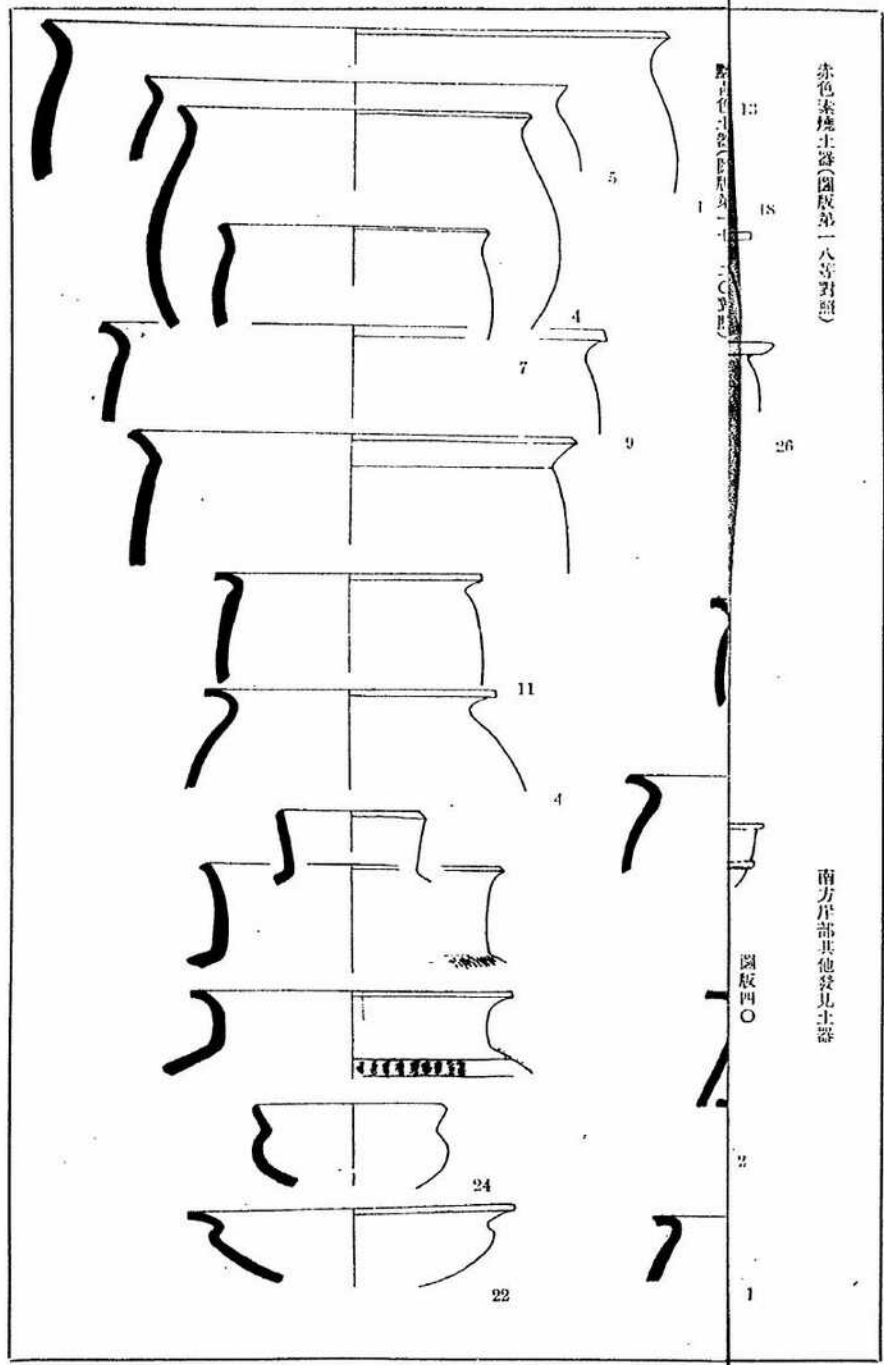
する南鮮古墳出土品に最も普通なるものにして後者は低倭なる臺を有し器坏亦た平低なるものにして元と蓋を備へしものなる可く慶州附近古墳發見品にも其の例あり而かも兩者とも稍々紫黑色を呈し地釉を出せり此の兩者は他の同種の破片と共に本類土器中最も進歩せるものにして其の發見場處は南崖露出部と東方試掘部の表面に近き處なれば或は他のものと全く同一時期中に入る可きものに非ずして稍々後代に屬するものとす可きなり以上の外器形全體を復原し得可き破片は之を出さずたゞ各種の器縁と器底とありしのみ(第三十一圖第三十)之により大小の壺甕の類多く存し其の大形のもの亦た少なからず中には腹徑二尺に近きものありしを想像せしむ又た角形捉手(第四十)環耳(同圖)複合小環耳(同圖)の此等に附着せしものありしを知り得たる外其の器制が後述赤色素焼のそれと全く共通のもの多かりしを知るたゞ器底部に多くの圓孔(第三十)若しくは細長なる孔を放線狀に穿てるもの數片あり之によりて甕様の土器存在せしを推察せしむ然らば則ち此の貝塚住民は穀物を蒸煮して食料に供せしなる可く既に農業時代に在りしものと推論す可し而かも第七層(山)より炭化せる米粒の一塊(第四十)發見せられたる興味ある事實は之を實證するに足るものと云ふ可し次に土器の紋様は器の表面に施されたる押印の地模様の外特殊なるものを見ずたゞ此の地模様には各種の變化あり精麗各様の布席紋及び之に横線を割せるもの又た細緻なる並行縦線紋上に横線を割したる簾紋等に至る(第七十)此等は布席等の原物を押壓したる外木製土製等の押印を以てせること他の諸民族に於けると同様なりしなる可し(三)

甕の存在

提手と其の  
手法

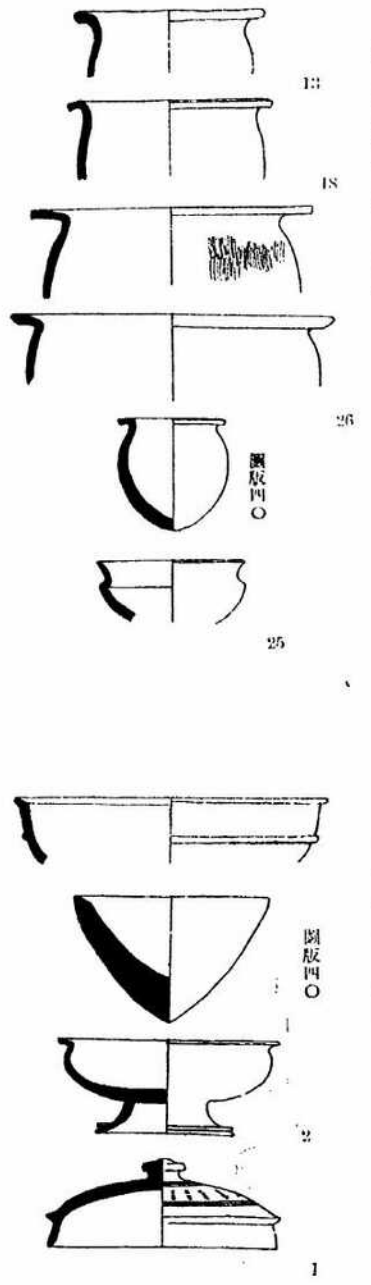
(二) 赤色素焼 其質厚手にして柔かきもの多きも中には堅緻にして前記陶質のものど性質を同ふしたゞ火度の相違に本き成色を異にせるに過ぎざるものあり。完形に復原し得可きもの一箇を第七層中に發見せるが是れは口径二寸三分高二寸五分の底部尖れる小壺なり。(第四)各種の器底と器縁により其或者は前類陶質土器と共通のもの鮮からざるを知る可く(第三十二圖)平底或は不安定の圓底の鉢壺稍々尖底を有し我が彌生式土器のそれに相似たるもの等あり中には其の厚大なる破片により頗る大形の器物の存在を推測せしむるものあり。又た高坏様の器物の臺四箇(第三十圖)あり是れ亦た彌生式土器のそれに相類す。又た角形の提手は其數十數箇あり(第四十二圖)其の先端尖れるものと鈍圓なるものどあり。此等は小なる器物に於いては單に提手として役立ち大なる甕鉢に於いては女子が頭上に載せて運搬するの際把手の便宜に出でたるものなる可く器物の高低によりて附着部位亦た高低ありしこと。現時朝鮮民間に於ける實例に徴して推察す可きなり。而して此の角形提手中上部内側に凹溝を刻せるもの稀ならず(同上)これ窯中に焼くの際破壊を防ぐの用意に出でしなる可く其の附加の法單に器側に之を附着するのみに非ずして往々器側の内部に穿入して鞏固を計れるものあるを注意す可し(同圖2)紋様は其の性質前類と同じく各種の布目紋格子紋等の外粗大なる並行横線紋等あり其の附加の法亦た相異ならず。最後に其の色澤白色を帯びたる平たき角形の一器の既發掘部より採集せるものあり。口径四寸六分高二寸七分表面を磨琢せるもの、如く其の用途を詳にする能はず。(第四)聊か其の性質を異にするも赤色素焼の一變種として此處に掲ぐ。

押圖第九 金海貝塚發見土器實測圖 (其二)

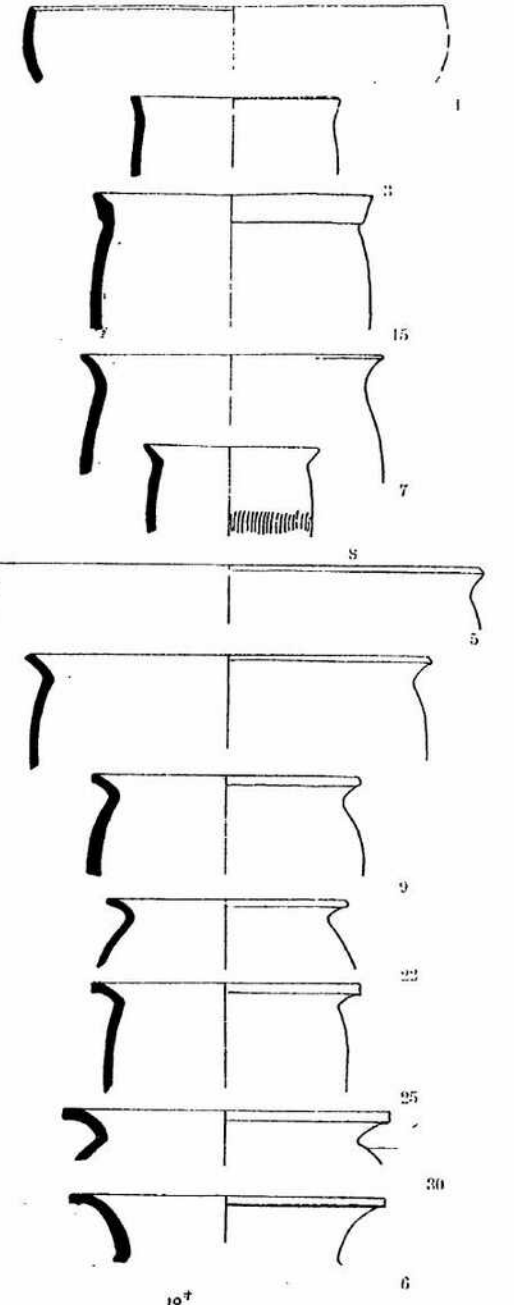


挿圖第九 金海貝塚發見土器實測圖 (其二)

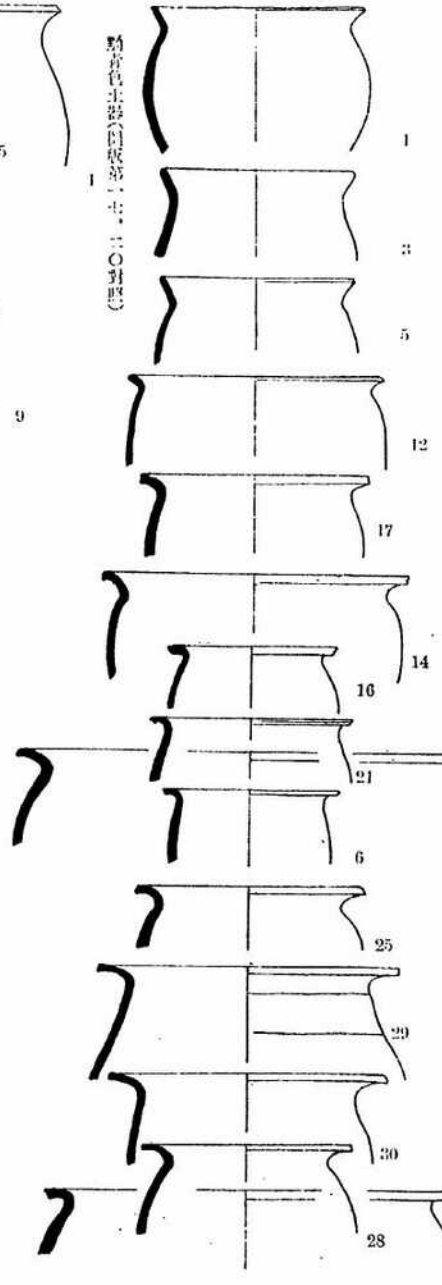
赤色土器(圖版第一八等對照)



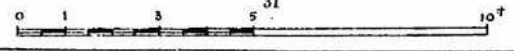
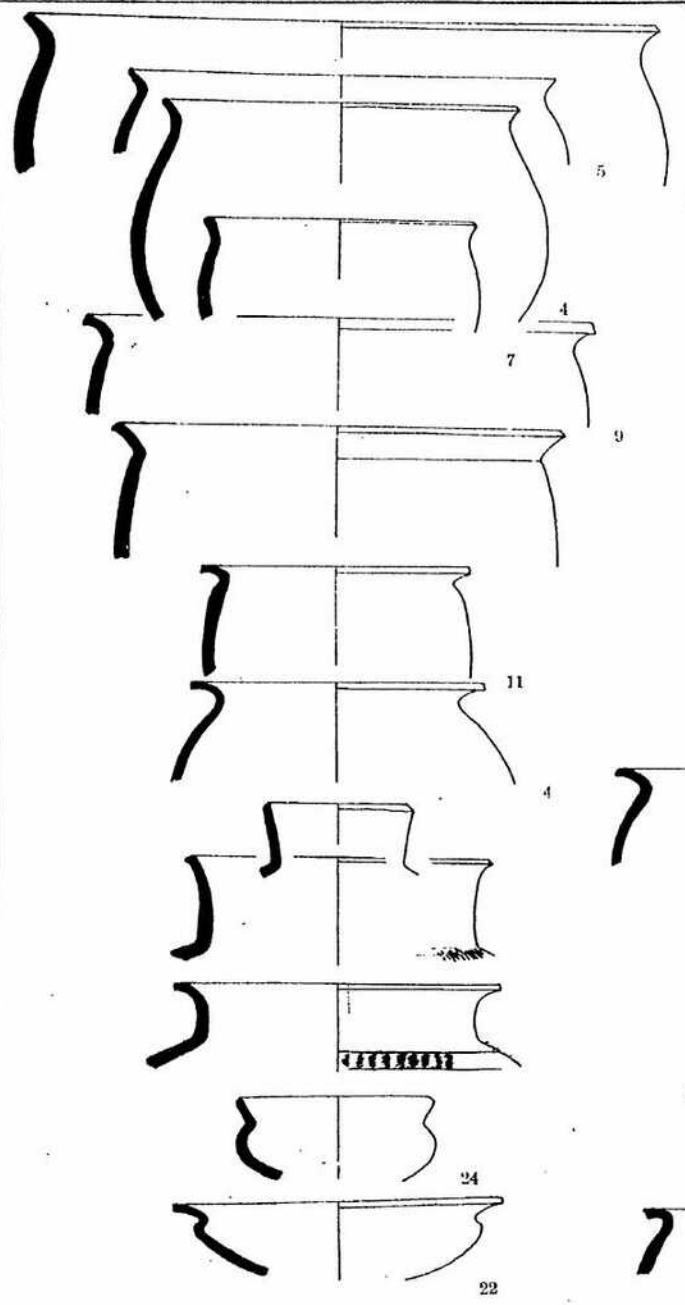
南方片部其他發見土器



黑褐色土器(圖版一九對照)



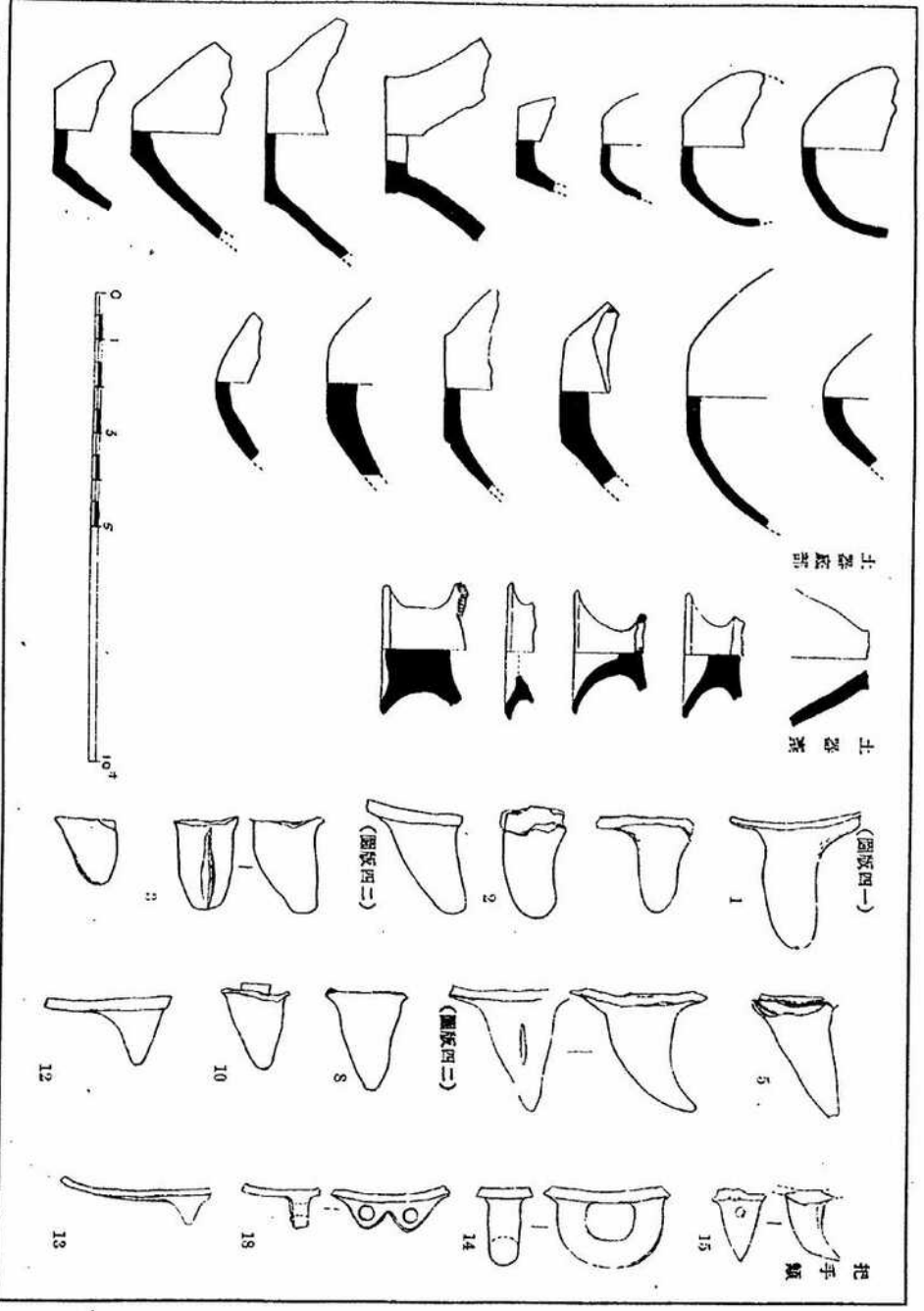
暗青色土器(圖版第一七、二〇對照)



裏面白紙



插圖第十 金海貝塚發見土器實測圖 (其二)



(三) 黒褐色素焼 其の製法は前者に比して柔く且つ古拙なるを見る。其の器縁の形式は前類と共通せるものあり。器底は遺品多からざるも不安定なる圓底の存在せるを知る可し。  
(第四) 破片より察するに器形は小なるもの多く、蓋鉢の類を出でざりしが如し。模様は特に附加せるものを見ず、たゞ製作の際に於ける刷毛目の如きものあるのみ。角形捉手の類亦た此の様の窯器に存在せざるを注意す可し。

三種の土器  
粗の手法の精

以上三種の土器は既に述べたるが如く、貝塚の各層位に於いて共存せるのみならず、器物の形式に於いても互に共通し、殊に赤色素焼のものに在りては、黝青色陶質のものとのただ色調を異にするのみにして、手法紋様等に於いて全く同じきものあり。其の窯法の差違製作の精危は其の間に存するも、之を固より別人種の製作に出づるものと爲すこと能はず。同一人種の手に成り、たゞ其の手法を相異にするものなるを言ひ得可きのみ。而かも三種の土器中、本來黒褐色の柔き土器は最も古拙なる手法に屬し、赤色の稍々柔かなる素焼之に次ぎ、陶質黝青色のもの最も進歩せる製作なるは疑を要せず。雖も此の三者が同一層位に就いて互に挟在するの事實は、即ち此の各様の土器が等しく同一時期に於いて製作せられしものなるを證するものにして、此の場合に於いて何等時代的差違を告ぐるものに非ざるなり。但し、南岸發見の紫黒色の地軸ある一類を除く。思ふに其の器物の用途目的に従ひ、或者は堅緻なる陶質の窯法を要求するものあり、或者は粗質柔軟なる製作にて事足るあり。此等を併用せしことなほ現時吾人の社會に於いても各種の土器陶器の並び存するが如かりしならむ。或は又た其の價格の高下、製作處の差違等も更に此の區別を

時代的差違  
に非ず

生ずる原因たりしやも知る可からず。而して斯の如く陶質黝青色の土器と少くとも赤色素焼の土器とが此種遺跡に並存せるの事實は、朝鮮各地の遺跡等に於いても既に認められたる所にして、たゞ金海貝塚に於いては此等が同一時代に並び行はれし事實を此次の發掘に由りて明にするを得たるのみ。

轆轤の使用

轆轤の使用が當代既に存在せしや否やに就きては完形の土器殆ど無く小破片の發見のみなりし本貝塚の場合に之を斷定すること難し。雖も陶質黝青色土器に於ける二箇の完形に近き遺品に於いては、確に其の使用を認む可く、他の種類のものに於いては、少くとも之を用ひざりしもの、存在を肯定せしむるものあり。然れども以上異種の土器が同一時代に並存せしを證し得とせば、土器製作術の一大革新の標幟たる轆轤の使用が、長く一部に局限せられしを信すること能はず。大多數の土器製作者が直に此の便利にして而かも簡單なる器械の使用を傳習せしに相違無かる可し。吾人漢代支那文化が金海貝塚に波及せし事實を知り、又た陶車が既に漢代以前より存在せしことを信ず可しとせば、陶車の完全不完全は兎も角、多數が之によりて製作せられしを推定するを以て穩當なる見解とす可きか。若し夫れ本貝塚の土器が既に陶車使用後に成れるものなるに係らず、其の形式は簡單なる甕壺鉢等の種類を出でず、何等優雅なる美術的形式と裝飾の發生を見ざりしことは、他の遺物に於ける現象と共に其の住民の性情特質を表白するものに外ならざる可し。

金海貝塚土器の特徴

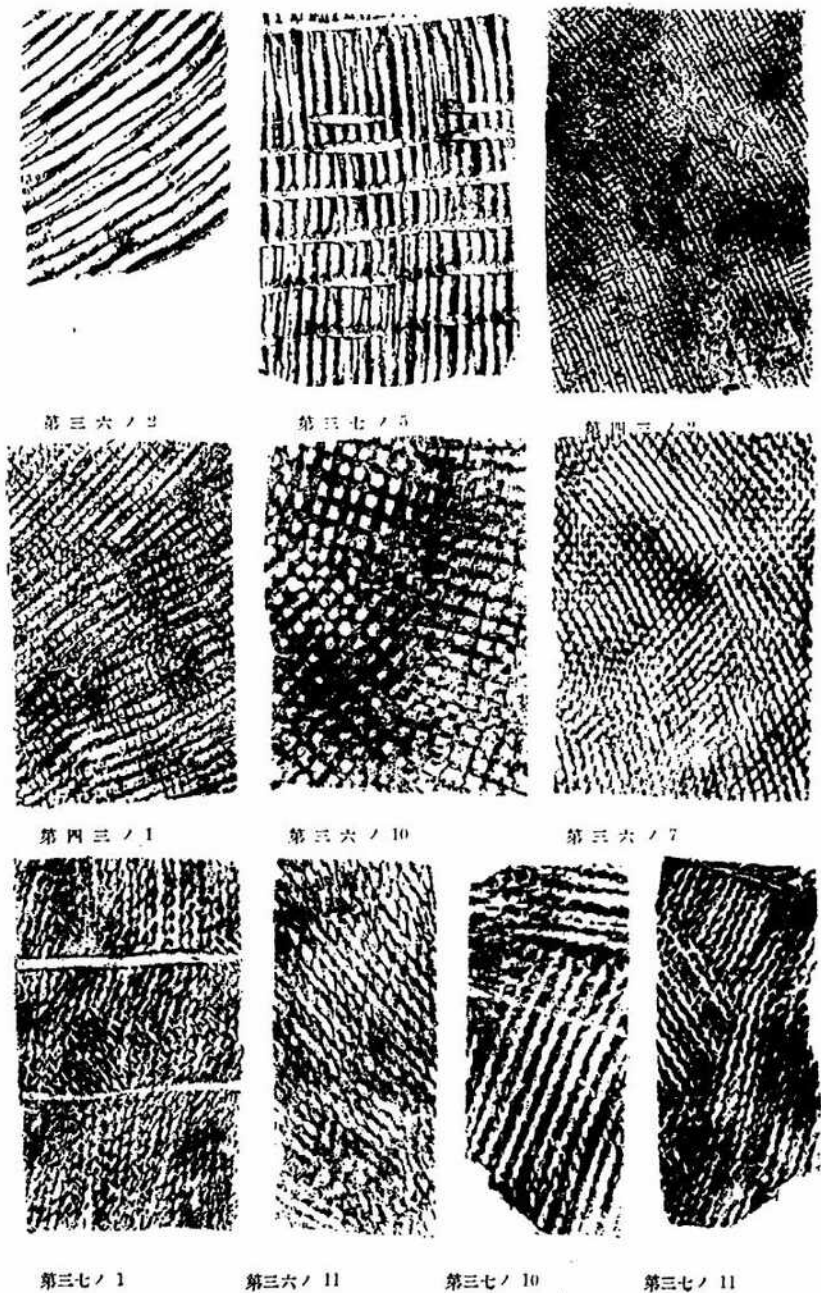
【註】(一)「朝鮮古蹟圖譜」第三卷所載、慶尙北道慶州附近發見土器

一、二、四、七號等參照

挿圖第十一

金海貝塚發見土器捺型紋拓影

(約四分三)





- (2) 概は支那本土、滿洲、朝鮮等に於ける漢六朝間の墳墓中の副葬品として多く發見せらる。又た銅器の概は支那三代以降之を見る。梁山貝塚に於いても吾人の發掘に於いて此種の土器片を獲たり。
- (3) 北米テヨロツキ (Chaco) の土器製作に際して使用する木製の紋印の如く其の一例なり。(Holmes, Aboriginal Pottery, Bendaat, Manuel d'Archéologie amér. franc. p. 103 所引) 又た土器上に押捺せられたる織布に關しては第三章第二節を参照せよ。
- (4) 京都帝國大學文科大學考古學研究報告「第三冊、彌生式土器分類圖録參照。
- (5) 廣南道金海郡長有面柳下里、慶州北道慶州月城及大邱公園附近の遺跡に於ける島居博士の調査は皆此の

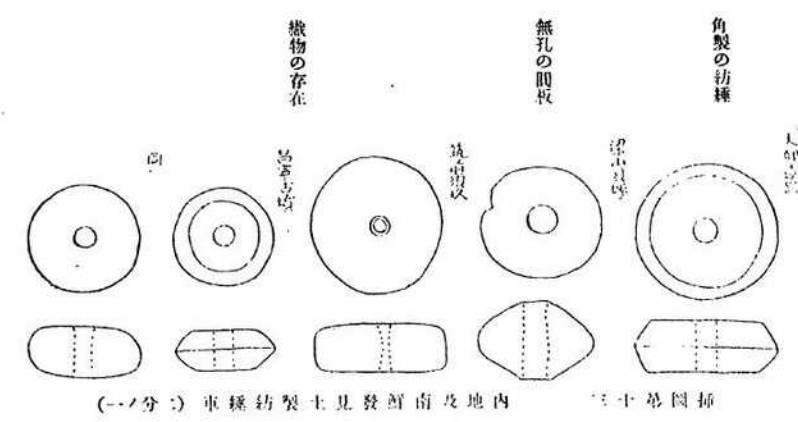
兩種の土器を出せり。又た梁山貝塚に於ける吾人の試掘の結果は、全く金海貝塚と同様に於て、三種の土器の存在を認めたり。

(6) 製陶用の體は支那に於いては、周禮考工記に「辨土云へり。此の陶車の古代諸國に於ける分布に就きてはラウフェル氏詳論せる所あり。氏は少くとも埃及を中心として歐洲に擴がれる一派と、支那を中心として、日本朝鮮安南緬甸等に擴がれる一派と、恐くは印度を中心として爪哇スマトラ等に及べる一派との三派の存在を想像し、更に此等は其の淵源に於て一の文化團より派出せるものならん云へり。(Lauer, The Beginnings of Porcelain in China, pp. 148-177)

### 第五節 土製品 [圖版第二十五]

本貝塚に於いて土製容器と共に比較的多數に發見せられしものに土製の紡錘車の類あり。今次の發掘亦た各層より之を發見し、其の數八箇を數へ、別に角製のもの一箇と、土器破片に加工したる圓板一箇を獲たり。

紡錘車  
此等の紡錘車は其の形に二別あり、一は單に扁平なる圓形の板にして中央に孔あるもの(第十四圖)他は厚手にして算盤玉の如く、側面中央に於いて膨み稜角あるもの(同上)是れなり。其の大き共に直徑一寸内外にして高さは前者に於いて二三分後者に於いて四五分あり。穿孔の方式は簡單なる圓筒狀なるを常とするも、算盤玉形の一箇(發掘地城に接せる道踏面にて採集す



の上下に漏斗状に開けるは一異例なり(同圖)質材は多く赤色素焼の第二類土器と同じきも内一箇(第七層)は其色黒味を帯び且つ表面滑澤あり火力の高かりし爲め玻璃質に變じて著しく堅緻なるを見る(同圖)角製品の一箇は算盤玉形をなし穿孔は圓筒状にして器形の削切亦た頗る銳利なり(同圖)

扁平圓板形のもの、中穿孔無きもの二箇あり、土器破片に加工せるもの亦た穿孔無し(此の器運搬思ふに穿孔は窯燒以前陶土未だ柔かなる時に行はる可きものなれば斯の如き無孔の圓板は紡錘車の未成品とするよりは寧ろ他の用途に供せられしとするを至當とす可きか)

金海貝塚の構成せられし時代に其の住民が織物を有せしことは土器破片上に押印せられし布紋によりて之を證す可く彼等自ら紡織に従事せしこと亦た察するに難からず、而かも如上の發見品は世界各地に於ける紡錘車の最も普通なる形式に屬し之を以て紡錘の用に供せられしとするに於いて敢て疑ふを要せざる可し、なほ同種の遺品の南鮮に於ける他の貝塚及び遺物包含層等よりも發見せられ又た内地の石器時代金石併用時代の遺跡に於いても之を出せるのみならず、南鮮古墳中より出

土せるものあり、斯の如き普通形式の器物を以て遽に文化の傳播分布を考察するに資する能はずとするも、なほ之を反證するものに非ざるを知るに足らむ。

- (一) 鳥居博士が前後三回の發掘に於いて採集せるもの十數箇あり。
- (二) 慶尚北道大邱府兵營附近の遺物包を層より徑二寸一分中央に孔を穿てる遺品を發見す。今、總督府博物館に蔵す。此類の加工品は内地石器時代遺跡にも其の實例多し。
- (三) 梁山貝塚に於いて橋本良哉君の發見せるものに算盤玉形のものあり。前註大邱兵營附近の遺跡より鳥居氏の發見せるものと大正六年發掘調査の際獲られたるものは、徑一寸三分五厘高五分五厘あり、表面滑澤を有す。慶尚南道昌寧按洞第七號古墳よりは、徑一寸内外の算盤玉形のものあり。
- (四) 内地石器時代遺跡發見の石製及土製の品に就きては、野中完一君「本邦石器時代遺跡より發見されたる紡錘車」(東京人類學會雜誌、第百五十九號)を参照す可く金石併用時代のものに關しては、中田登學博士の「九州北部に於ける先史原史兩時代中間期の遺物に就いて」(考古學雜誌、第七、第八卷連載)を見る可し。土製紡錘車の一例としては、筑前國筑紫郡春日村出土品あり。挿圖第十三にこれを載す。

第六節 鐵器 [圖版第二十六]

今次の發掘に於いて第七層より鐵器殘片及鐵滓片を發見し第五層(四)に於いて鐵斧頭一箇を獲たることは既に述べたる所なるが是は遺物の調査に於いては、たゞ角製柄部のみを發見し身部を見る能はざりし鐵製刀子と共に注目す可き遺品なり。

鐵斧頭一箇は現存長さ約三寸、刃部を缺失す。所謂短冊形にして楔狀に近き類なるも其の横断面は楕圓形を呈し本に至るに從ひ一方の縮約甚しく袋部に續く。袋部は兩袖をなし柄は斧刃に對して直角に附せられしこと現時工匠の使用する手斧の如き又た鐵の如きものなる可し(第四層)同形式の斧頭は皆て鳥居博士によりて本貝塚より發見せらる。鐵器

鐵刀子

破片一箇は幅一寸三分現存長さ二寸餘ある扁平なる鐵板にして一端折れ曲れる痕あり、近時學者の所謂鎌と稱するもの、殘片なりと推測せらる。此類の鐵製品は内地古墳より往々發見するのみならず、南鮮古墳よりも咸安、昌寧等に於いて出土せることあり。<sup>(4)</sup>

鐵製刀子は今次の發掘に於いて、たゞ其の角製の柄部を發見したるのみなりしが、<sup>(2)</sup>其の遺物の柄部に附着して遺存せしものあること既に述べたるが如し、殊に大正十一年藤田氏一行の本貝塚を調査せる際、梅原囁托の發見せる一例は最も完好の遺品にして、及は角柄の彎曲せる外側部に附せられたり。<sup>(4)</sup>斯の如く柄部の長大にして刀身の短小なるは、蓋し柄部は掌を以て握るに足る長さを要し、刀身は鐵材の貴重なる際に於いて可及的に節約を圖れるなる可し。歐洲殊に瑞西湖上住居跡等に於いて發見せらる、鹿角柄の如きも其の尖端の石斧或は金屬器の短小にして、柄部の掌握に足る長大の形を存せると同軌に出づ。なほ角柄刀子の内地古墳より出でたるもの及び其の石刀子、アイヌの「マキリ」に關しては既に説及する所あり。<sup>(5)</sup>

【註】(1)大正三年鳥居氏發見に係り、長四寸あり、略ぼ完形なり。

同 同郡城南村大字新井小字後井古墳發見 一箇

(2)高橋健自及後藤守一君等の説く所にして、後藤君の上代に於ける鎌(考古學雜誌第十一卷第一號)參照。

肥後國上益城郡小坂村古墳發見 二箇

(3)本邦出土の此種遺品は前註後藤氏論文に見ゆる河内但馬、丹波、播磨、美作等の諸例の外、本貝塚の注意せしものに次の三者あり。初め二者は弘津金石館の藏品にして、後者は熊本縣廳の所藏なり。

(4)同郡城南村大字新井小字後井古墳發見 一箇

(5)本冊第二章第二節、骨角器の條及同註參照。

第七節 裝飾品

【圖版第十五、第二十七】

穿孔部削平

裝飾品として擧ぐ可きもの二種あり。一は獸牙製の懸吊物にして、他は玻璃製棗玉なり。  
(一)牙製懸吊物 二個あり其の一は第四層發見に係り、野猪の牙を以て作り、現存部長さ二寸二分あり。<sup>(7)</sup>其の根本の部分に兩側より銳利なる利器を以て削り、之を薄くし、此處に徑一分の圓孔を穿つ。今ま孔の上邊缺失す、又た外側珞瑯質の部分に少しく削れる痕あり。斯の如く獸牙の穿孔部を削りて薄くせるは、孔を開くに容易ならしむる目的の外、或は穿孔に際して孔縁部の整美を缺くに至れるを除かんが爲めなる可し。其の例歐洲石器時代遺物等に鮮からず。<sup>(8)</sup>次に他の一箇は鹿の一種の牙を以て作り、現存長さ二寸あり。貝塚第五層位より發見せらる。根本部の穿孔は徑一分五厘強なり、其の上邊亦た缺失せり。<sup>(9)</sup>  
(二)玻璃製棗玉 一箇は第四層發見せられたるものにして、長さ九分餘あり。削平にして、横長軸を貫きて一方より穿たれたる孔あり。<sup>(10)</sup>玉の表面は風化して淡褐色を呈し、琥珀に近き色彩を見るも、其の表皮を剝落すれば、玻璃の風化せる際に現はる、虹彩(iridescent)の色あり。内部は稍々乳白色を帯び半透明の質を存するより考ふれば

以發見の玻璃玉

玻璃なること殆ど疑ふ可からず、島居委員亦た嚮に本貝塚より二箇の九玉を發見せるが此の裝玉と同質なるは特に注意す可し。

獸牙特に猪牙が古代民族間に於いて懸吊的裝飾品として用ゐらるゝの例は世界各國に乏しからず、歐洲舊石器時代以降現代未開人に最も屢々發見する所にして我が勾玉の原型亦た之に存することは既に先輩學者の説ありて、今更改めて説くを要せざる可し。たゞ玻璃製裝玉に至りては其の質料の點よりして、本貝塚築成民族の文化と年代とを考察する上に特殊の意義あり、古代東西文化交流の研究に向つて亦た興味ある問題に接觸し來るを覺ゆ。

支那漢代の玻璃

支那文献の傳ふる所によれば、支那人が玻璃の製法を知れるは西曆第五世紀北魏の時代に在りとせるも、一方には前漢武帝の時既に琉璃の文字見わたるのみならず、近時支那日本に於ける考古學的資料の新分野開拓は玻璃の存在を更に古く漢以前に遡らしむるの必要を感せしむ例へば支那學者が其の字體より認めて三代の遺品とする鈇印に玻璃を以て作れるものがあるが如き、河南殷墟の出土品と傳ふるものに玻璃製品の鮮からざるが如き是れなり、<sup>(6)</sup>殷墟の遺品と稱するものは其の出處必しも信す可からず、發見の精確なる層位明かならざるを以て直に學術的資料とするの危険無しとせず、姑く古録の研究と共に之を將來に留保するも、漢代に於ける玻璃の遺品の存在は終に之を疑ふ可き餘地無からむ、即ち本貝塚より出せる裝玉の玻璃製なるは後述王莽の貨泉の發見に依りて證せらるゝが如く、少くとも後漢時代の遺物とするに足るものあり、又た我が九州の北部筑前國

金海の東玉の本原地

筑紫郡須玖の遺跡より發見せられたる玻璃製璧破片は鑑鏡等の作出遺物に依りて漢代のもとの認むるに異論無く、同種の璧の破片は亦た支那内地よりも出でたり、<sup>(9)</sup>此の外南滿洲及北朝鮮の漢代若しくは之に近き時代の墳墓より一種の玻璃製裝飾品を出すが如き、<sup>(10)</sup>スタイン民の和闐附近の遺跡より玻璃器の斷片を發見せるが如き、<sup>(11)</sup>皆な漢代に於ける玻璃の存在を推測せしむる資料たらざるは莫し、固より之が製作の技術は西域より傳へたるものならむも、既に全く支那的産物たる璧の存在することは支那に於いて其の製作の行はれしことを想定せしむるに足る。

今ま金海貝塚發見の玻璃製裝玉は果して何處に於いて製作せられたるや、其の恐くは朝鮮に非ずして他國より輸入せられたるは吾人の想像を禁ずる能はざる所なるも、果して支那に於いて製作せられたるものなりや、將た更に西域より轉々將來せられたるものなるや、遽に之を推定し得ざるものあり、たゞ斯の如き形式の玉は例へば土耳其斯坦アナツの遺墟等にも出でたるの事實を明にして、之を將來の研究に俟たんとす。

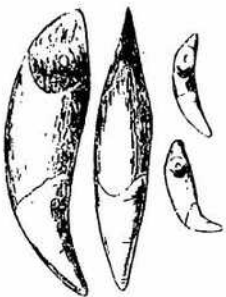
〔註〕(一)ケル「湖上住居」Keller, Lake Jewellings, Vol. II.

Plates XLV, LXXXIV, 等にある獸牙裝飾品参照。

(二)大小二箇あり、大正三年の採集に係る。表面風化して茶褐色を呈する。こゝ本遺品と同じ。

(三)勾玉の起源に關しては故坪井正五郎博士の考説「パリの通信」(東京人類學會雜誌第四十四號)及び「曲玉に關する羽柴三宅二氏の説を讀み及び思ふ所を述ぶ」(同上第五十四號)等に見ゆ。

金海貝塚發見調査報告



插圖第十四 瀋西湖上住居發見牙製懸吊物(ケラー氏)



- (4)「魏書」西域傳大月氏の條に「世祖時其國人商販京師、自云、能鑄石爲五色琉璃、於是採礦山中、於京師時之殿成光澤、乃美於西方來者、乃謂爲行殿寶百餘人、光色映徹、觀者見之莫不驚嘆、以爲神明所作、自此中國琉璃遂賤人不復珍之」とあり。
- (5)漢武帝の時身海國獻する所のものに白光琉璃の類なるものあり、(西京雜記)又た武帝の起せる神屋の扉悉く自琉璃を以て作りしと見ゆ。(漢武故事)此等は皆な速に信じ難しと雖も、「漢書」西域傳大月氏國の條に玻璃珠類あるを記したるに、師古「魏略」を引きて云ふ、「大秦國多出赤白黑綠黃青縹緗紅紫十種流離」とあり。流離即ち琉璃にして玻璃と同じ、前漢代少くも硝子に關する知識の支那に存在せしを察するに足る。なほヘルト氏其他諸家の研究を參照す可し。(Ulrich, Zur Geschichte des Glases in China, chinesisches Studien I; Münsterberg, chinesische Kunstgeschichte, Jbl. II, VII. Glas; Bachel, Chinese Art, Vol. II, 6c.)
- (6)大正八年近江藤井善助君の所藏に歸せる黃縣丁氏薄漢の古鏡中に、玻璃製品三箇あるが如き其の著例なり。
- (7)京都帝國大學所藏傳世出土遺品中に各種の小形品十數點に上る。
- (8)東京帝國大學文學部所藏に係る。「考古學雜誌」第十一卷第十二號所藏の「硝子製殘斷片」參照。此の須玖發見品の前漢時代に考定することに就きては、「考古學雜

- 誌」第八卷以下所載の論文を見よ。又た此の遺品より類推すれば、文政五年筑前怡土郡三雲村にて發見せる銅鏡、銅鐸、鏡等も伴出せる哩亦た玻璃製なりと斷ぜらる。青柳種直「筑前國怡土郡三雲村所藏古器圖考」に曰く「又鏡を重れたる間毎に、形扁く圓にして徑三寸八分、中間に穴あり、穴の徑七分、兩面を翠土にて塗たる如き物を挿あり。牛面の白き中に旋紋あり、此すべの形厚二分許、其縁を側にて見れば、翠土の如き物の中心は餘色にして淨あり、硝子の如し。若し硝子の久しく水土に煮れて表は白色に變じたる歟。これ悉く碎けて全からず」云々。其の翠土の如しとせば恰も作の藻玉の表面の色と一致せり。
- (9)東京帝國博物館所藏。「考古學雜誌」第十一卷第十二號所載圖版及解説參照。
- (10)漏斗形を呈し一種の耳飾と解す可し、朝鮮にては平安南道大同江面の古墳及土城、同龍岡郡黃山南麓の古墳等より出づ。南滿洲にては遼陽及熊岳城附近の古墳より發見せらる。(京都帝國大學文學部考古學研究報告)第四冊一六二頁參照。
- (11)クティン氏「古和蘭」(Sein, Ancient Khotan, Pt. I, III, 6c.)參照。
- (12)バムネリー氏「土耳其斯坦探検報告」(本章第三節註(10)既出)圖版。

### 第八節 古 錢

〔圖版第十五及第二十七〕

王莽時代の古錢貨泉一箇は本貝塚發掘作業中十月廿六日午後三時第六層(a)即ち丘陵頂點よりの垂直深位十一尺傾斜表面よりの深一尺五寸の地點より發見す。此の場處は全く攪亂せられざる貝殻層中にして後世撤入の疑を容るゝの餘地無く本貝塚築成年代考定上最も貴重なる遺品となす。

錢は直徑七分五厘厚四厘餘發見の際一部分を缺失す。全面青錆を生じ間々水銀色を發し加ふるに貝殻より生じたる石灰分附着して文字明瞭を缺き且つ重壓により形に歪みを生じたるも「貨」の字畫は之を確認す可く其の貨泉たること何等の疑無し。漢書「食貨志」元鳳元年(A.D.17)貨泉を作る徑一寸重五銖とあり。漢建初尺を以て測るに本例の貨泉の徑七分五厘は正しく其の一寸に當れり。蓋し貨泉の各種類中最大品に屬す。

朝鮮に於いて貨泉は北鮮漢樂浪郡の中心地たりし平安南道大同郡大同江面の古墳<sup>(9)</sup>及び同地の樂浪の土城等に於いて發見せられたることあり更に内地に於いては金石併用時代の遺跡として知らるゝ丹後國熊野郡函石濱<sup>(10)</sup>並に筑前國糸島郡松原より石器金屬器等と伴出し我が國古代文化の變遷の絶對年代を知る可き絶好の資料とせらる。而して今ま金海貝塚亦た此の王莽の貨泉を出だしたるは此等内地の諸遺跡と其の文化の性質を比較して絶東に於ける支那文化の波及金屬時代の曙光の何時に始まれるかを考定するに最も緊要なる資料を提供せるものなり。吾人は今次の發掘が金海貝塚の一小部分に限

朝鮮及内地の貨泉

貨泉は大形

られたるに係らず、偶然此の古錢一箇を貝層中より發見して、斯る重大なる問題の解決に貢獻し得たるを喜ぶ。

【註】(1)『漢書』食貨志に「元鳳元年復中下、金銀貨之貨、類増減其買直、而雜大小錢販作貨布(中)貨泉徑一寸、重五銖、文曰貨、左曰泉、右曰貨、與貨布二品並行」とあり、王莽の没落後、年にして再び五銖錢を復せることを載す。即ち貨泉の製造は莽の短き治世に限られたるものにして、此錢の分布は彼の時代を距ること遠からざる年代に歸す可きものなり。

(2)『古泉圖』には大小各種の貨泉を擧げたるが、金海貝塚の出土品は其のうち第一種の大形品に屬す。我が丹後筑前の遺跡及び南滿洲古墳發見のものは然れども第二種の小形品(直徑七分餘)に屬す。吳大澂「權衡度量實驗考」載する所の廣銅尺と稱する建初六年の尺と相合せり。而かも却て其次に載する所の王莽銅尺には合せ

す。  
(3)『古蹟調査特別報告』第二冊、平壤附近に於ける樂浪時代の遺跡(一)第十四頁、大同江面第一墳の條參照。  
(4)平壤府山田鎮次郎君蒐集品中に其の例あり、大正九年十一月木貝等實見。  
(5)貨泉二箇を發見す。共に發見者兼田幾次郎君より京都帝國大學に寄贈せらる。兩石遺の遺跡に就いては「京都府史蹟勝地調査報告」第二、第三兩冊に梅原未治の調査報告を載す。  
(6)貨泉一箇、發見者醫學博士中山平次郎君より京都帝國大學に寄贈せらる。松原の遺跡に就いては同博士の「九州北部に於ける先史原史時代中間期の遺物に就て」(『考古學雜誌』第七八兩卷連載)に詳なり。

### 第九節 自餘諸品 [圖版第二十六]

炭化せる米粒

以上吾人は金海貝塚の發掘品に就きて類を分ちて記載する所ありしが、なほ二三其中に入らざる雜品あり、其の一は既に述べたる炭化せる米粒塊なり(第四十)是は第七層(b)より出でたるものにして、米粒相密著して雞卵より稍々大なる一塊をなし、黒く炭の如く變化し貝殼中より浸出せる石灰分外部を裹めり、されど指を以て破碎すれば粒々相散じて其の原形を略ぼ遺存するもの少なからず、稻は熱帶地方に於いては悠久の古代より植

東亞に於ける稻の栽培

培せられ、亞熱帶地方にも布及せり。支那日本に於いて共に其の起源を神話時代に發し、文獻を以て徵すること能はず、周禮既に稻人の官あり、揚州、荊州、青州等稻に宜しきこと見ゆ、(1) 南鮮に於ける稻の農植は其の日本より輸入せられしにせよ、支那より傳習せるにせよ、或は此等諸國と共同の源より渡來せるにせよ、其の頗る古き時代に在りしことを推測するに不合理なるを見ざるのみならず、今や本貝塚に於いて明に米粒塊の殘存せることは、漢代に於いて南鮮民族間に稻を植む米を食せし事實を確證するものにして、日本朝鮮等に於ける農業時代の開始の何時に存するやを決定するに重要な事實なりとす。なほ我が九州筑後國八女郡長峯村大字岩崎に於ける中山醫學博士の發見に係る炭化米粒等之を傍證するに足る。(2)

尖端炭化せる木棒

次に第五層に於いて發見せる木棒あり、(第三圖)長さ約六寸五分、徑約五分、其の一端は黒く炭化して焼け焦げたる痕あり、本貝塚住民が火を用いたる際の遺物なることは固より言ふを須むずと雖も、其の木質の楡なるより考へ手を以て揉むに適當なる長さなるより察するに、或は發火用木燧に使用せられしものに非ざる無きやを疑はしむ。たゞ炭化したる一端は節ありて摩擦によりて圓錐形に磨滅せられざるを以て、此の推測を確證するに由なきも、其の使用の度數久しきに亘らざる時は必しも如上の如く磨滅せざる可し、それは兎もあれ、南鮮地方には燧石の產出乏しきが如く、石器の此の材料を以て作られたるもの無きより見るも、發火の方法は燧石によりて行はれずして、鑽木の方法に由りしこと、日本古代に於けるが如きものありしを想像するに足る。(3)

鑽木發火

古瓦は第一層及第三層の表面(四)等より是を出せり其の多くは平瓦の破片に過ぎざりしも第三層出土の一箇は花瓦の断片にして縁と顎との断面を見るに足る(第五)平瓦類は孰れも其質堅緻なる陶質にして表面に細目紋を押せり年代を判するの明證なきも金海邑北出土の古瓦より推せば或は高麗朝前後のものに非ざるか。

【註】(一)我が古傳説に、古く神代に稻米の存在を傳ふ。即ち日本書紀「卷二」一書の説として保食神死して其の腹中に稻を生ぜるを載せたるが如き、又古事記の上巻に須佐之男命が大宜津比賣神を殺せる際、二日にて稻種の生ぜるを擧ぐるが如き是れなり。但し喜田文學博士は米穀は彌生式系統なる我が國津神に早く知られ天孫族は寧ろ後に穀等より之を傳へたるものと考へらる。其の詳細は同書「天御寶珠」の發表せらるる日を待つ可し。「種志」後人傳に「種禾稻稗麻、菘桑耕織、出細管織類」とあり、當時日本民族間に農業の業知られたるを言へり。

(二)支那に於いては伏羲氏民に佃漁畜牧を教へ、次で神農氏耒耜を作り、五穀を養ふることを傳ふ。周禮「地官」に稻人の定員を擧げ「稻人掌墾下地以墾、治水、以防水水以溝澆水以塗、均水以列、舍水以治、寫水以泄、揚其麥作田、凡涇澤可洪水、珍草而芟之、澤草所生種之若種、旱稼其學敏、糞其糞事」とあり。水

田に稻を植むたること明なり。

(三)周禮「夏官、司馬職」方氏條を見よ。

(四)筑後國八女郡長峯村大字岩崎發見の燒米及び彌生式遺跡時代に於ける農業に關しては、中山博士「土器の右無未詳なる石器時代遺跡」(考古學雜誌)第十卷第十一號)に、また八木英三郎君「日本考古學」中卷第十八頁、に彌生式遺跡より燒米あること見たり。

(五)古代及野蠻民族間に於ける發火法に就きては、ラホック氏「有史以前」(Lubbock: Prehistoric Times, p. 585) スーレン氏「發明の起源」(Ous Mason, The Origins of Invention, chap. III) 等を見よ。スーレン氏は「タナー」氏に從ひ、發火法を I. By Reciprocal Motion, II. By Sawing, III. By Pounding, IV. By Percussion, V. By Compression of Air 〇五に分ち、日本古代のそれに「第一法中 Simple two stick apparatus に屬するものなり。

第十節 貝殼獸骨等

〔圖版第二十七—第二十九〕

貝の種類

本貝塚積成の貝殼は貝塚の状態を述べたる際に既に記したるが如く蛤牡蠣の類大部分を占め「アサリ」の類之に次ぐ。牡蠣は長さ一尺に達する「ナガ、キ」蛤は徑四寸を超ゆるものなどあり。されど斯の如き大形の貝殼の外小形のものに於いて多くの種類あり。本貝等の認めて異種類に屬するものを採集して京都帝國大學理學部助手黒田徳米君の鑑定を請へるに氏は次表の如く三十四種の存するを擧げ別に甲殼類三種を示されたり。

(一) 鹹水産貝類

1. Arca (Anadara) granosa Linné.
2. Arca (Scapharca) suberosata Lischke.
3. Batillaria zonalis Bruguiere. (= Potamides)
4. Batillaria nutrifornis Lischke. (= Potamides)
5. Cellana eu-osania Pilsbry. (= Helcioniscus)
6. Cellana nigrochanta Reeve. (= Helcioniscus)
7. Cerithidea rhizoporum A. Adams (= Potamides)
8. Cyelium sinensis Gmelin. (C. chinensis *novel.*)
9. Cypraea vitellus Linné.
10. Fusinus perplexus A. Adams (= Prusus)
11. Haliothis kamtechakana Jones.
12. Latrunculus japonicus Sowerby (= Edurnia)
13. Murex meretricis Linné.
14. Mytilus crassirostris Lischke.
15. Ostrea (Lopha) gigas Thunberg.
16. Ostrea ariakensis Wakija (?)

金海貝塚發掘調査報告

- ヘイガヒ  
ナルボツ  
イボツミニナ  
ウミニナ  
ベツカフガキ  
マツバガヒ(クソノツノ)  
オキツツミ  
ホシキヌタ  
ナガニシ  
エゾアハヒ  
バ  
ハヤガリ  
イガヒ  
ナガカキ(エゾガキ)  
スミノエガキ(?)

註:

- |   |            |
|---|------------|
| 17. Parapholus (specis inlect.) g. inci Sowerby.                      | モ、ガヒ (?)   |
| 18. Pecten laqueatus Sowerby.   | イタヤガヒ      |
| 19. Polinicos (Noverita) didyma Bolten.                               | ツヌタガヒ      |
| 20. Pyrazus (Tympetoronus) microtyrtus Kiner (= Potamidus)            | ムチタリ       |
| 21. Rapana thomasiانا Crossk.   | フカニシ       |
| 22. Septifer erassus Dunker.  | ムラサキヤクガヒ   |
| 23. Tergula (chlorostoma) argyrostoma basifurca Filshay.              | クサガヒ       |
| 24. Tergula (chlorostoma) xanthostigma A. Adams (= nigricolor Dunker) | クマノコガヒ     |
| 25. Tergula (chlorostoma) curviretri Dunker.                          | オホニシダカバツガラ |
| 26. Thais brevini Dunker. (= Purpura)                                 | レイシガヒ      |
| 27. Thylacodes imbricatus Dunker.                                     | オホヘビガヒ     |
| 28. Trapezium japonicum Pilobry.                                      | ウネチシトマヤガヒ  |
| 29. Turbo (Bettillus) cornutus Gmelin.                                | サ、バ、ユ      |

(1) 淡水産貝類

- |  |              |
|--|--------------|
| 30. Corbicula fluminea (?) Miller.                           | カイトンソウ、ミ (?) |
| 31. Thana (Melanoides) gortschoi (?) Martens (= Melania).    | カハニチ         |
| 32. Thana (Stiliospira?) Hbertina Gould (= Melania).         | オホタニシ        |
| 33. Viviparus (Lidjovna) cf. japonicus Martens (= Paludina). | ヤルタニシ        |
| 34. Viviparus (Lidjovna) nullatus (?) Revere.                |              |

甲 殻 類

1. Palanus sp. indet.
2. Palanus sp. indet.
3. Leonitina sp. indet.

フジツボの一種  
同上  
クダラガキと稱するもの

以上の如く貝類の大部分は海水産にして淡水産は僅に五種に過ぎず、黒田氏に従へば此等の貝類は凡て現今なほ南鮮に通用のものにして特殊のもの無きが如し。たゞ採集貝

貝 杓 子

子安貝の川  
蓬

殼中人工を加へたるもの二三に就きて述べるに、

(一) イタヤガヒ一箇(第五十三圖の下)は其の一端の縁に近く二箇の小孔を穿つ柄を附するに便にせるものなることは現今なほ行はるゝ、貝杓子によりても容易に想像せらる可し。同様の遺物は、大正十一年五月藤田委員一行の梁山貝塚試掘の際にも出土せり。

(二) ホシキスタ一箇(同圖の上)は日本に於ける主産地は安房紀伊、土佐等にして南方にては琉球には特に多きも北方には之を見ず、朝鮮に於いては殆ど之を産せずと云ふ<sup>(1)</sup>。此の貝の背面を平たく打ち缺きて安定にしたるは若しくは内臓を取り去りて腐敗を防ぐ、世界各國に於ける子安貝を貨幣裝飾護符等に使用する場合に普通に見る所なり。此の貝の殻は比較的堅くして普通食用に供せらるゝこと無しと云ひ且つ其の背面の打ち缺き方を扶出する必要以上に大きく又た整美なるは、食用以外通貨裝飾若しくは護符的の意義に用ゐられしと解す可きが如し。日本に於いては子安貝を貨幣としたること明ならざるも支那に於いては貝貨の存在は確實なる遺物と文字の研究によりて殆ど疑なし、金海貝塚に於ける此の單一例の發見と其の大形の *Cypraea vitellus* に屬し普通貝貨の場合に見る所の小形の *Cypraea moneta* 又は *Cypraea annulus* に屬せざるより見れば恐くは貝貨としてよりも子孫繁殖其他の意味を有する護符的のもの若しくは裝飾として用ゐられしものなる可く、偶然の漁獲に出でずとせば、日本方面よりの輸入に係るものとす可きなり。

貝類の外甲殼類の貝殼三種ありしことは既に記せるが如し。又た海膽類の棘魚骨の殘片を見たるの外、多數の獸骨を採集せり。獸骨は之を京都帝國大學助教授駒井卓君及び東



北帝國大學教授理學博士松本彦七郎君に請ひて鑑定を煩はせるに、松本博士は別に附載せる最も有益なる報告を寄せられたり、之に據れば鹿野猪の類大部分を占むること内地の諸貝塚等と其の軌を一にせるも特に重要な家畜としての牛馬の遺骨の存在せることとなり、已に稻米を農植し、金屬を使用せし金海貝塚住民が、家畜として牛馬を飼用せしことは、必しも驚くを要せざるも、此人類の飼用動物として古き牛馬は如何なる経路によりて朝鮮に入り來れるかは、研究を要する所なる可く、内地貝塚に就いては已に屢々馬の存在を證する遺物發見せられ、魏志倭人傳の記載を裏切りたるものあり、未だ牛の存在を聞かざるも、これは將來注意を要する所なる可し。

要之、金海貝塚丘陵上に占據せし人民は、一方に於いて已に農業を知り、牛馬を家畜として飼養し、米穀を食用に供せしと同時に海濱に近く漁撈の便あるを以て貝類魚類をも食し、又た山野に狩獵して猪鹿を捕つて之を食膳に上せたることは、今更言説を要せざる所にして、而かも其の食餘の獸骨貝類は、彼等が器用製作の材料となりしなり。

【註】(一)日本内地貝塚に於いては、子安貝類を見ること殆ど無し。丘陵次郎博士「日本貝塚の貝類」(東京人類學會雜誌百〇八號)等参照。

(二)チャクソン氏「古代文明移轉の證左としての貝」(Theakson, Shells as Evidence of the Migration of Early Culture)等参照。

(三)支那河南省殷墟に於いては、子安貝の發見あり、又た滿洲熊岳城古墳より出づ。其他骨製子安貝は直隸河南等より出土す。云々。羅振玉君「簡牘札」(已西第、號)。

同氏「殷墟古器物圖錄」濱田耕作「支那古代の貝貨に就いて」(東洋學報)第二卷第二號等参照。  
 (四)蘇(蘇聯)の類(骨)の断片其内に在り。同様のもの殷墟より出でたること羅氏の圖録に見ゆ。  
 (五)魏志倭人傳に「其地無牛馬、虎豹羊鷄」云々あるも、日本内地に有史以前より少くも馬の存在せしこと、河内國府、尾張熱田、薩摩出水貝塚等に其の遺骨の確に存在するを以て證すべし。

### 第三章 考 說

#### 第一節 貝塚の示現せる文化

吾人は以上金海貝塚の發掘と其の結果發見せる各種遺物に關して記述する所ありしが、之により骨角製品最も多數にして、僅少なる石器と鐵器とを伴出するの事實を認めたり。而かも鐵器は鐵刀子の場合に於いて、角製柄に附着せられたるものなるのみならず、骨角器の金屬器を以て切斷加工せられたる形迹を存し、且つ其の貝屑中に於ける存在状態よりして、兩者全く同一時期に屬するものにして、別時代の遺物と推測せしむるの證左無し。石器は其の發見數甚だ少なきも、石斧、石庖丁(後者は今次發掘貝塚の發見に係り)の類あり。これ亦た骨角製品鐵製品等と別時代に屬するものたるの證憑を有せず。然らば即ち本貝塚の示現せる文化は、已に今西博士が本貝塚發見の初に云はれたるが如く、一方に僅少ながら石器の使用あり、他方既に金屬器の使用を見るの時期、即ち金石併用の過渡期に屬するものなりと考定す可し。即ち西歐學者の所謂「エネオリシック期」(Neolithic Period)或は「カルコリシック期」(Caulolithic Period)に相當する文化たり。然れども歐洲に於けるが如く、其の金屬は銅若しくは青銅に非ずして、其の次に來たれる鐵が直に石器使用に接せるの事態は、聊か其の趣を殊にする處なり。蓋し歐洲諸國に在りては、文化金屬として銅青銅の使用先づ起り、次に鐵に及べるが、支那に於いても亦た此の順序を踏み來れるもの、如く、西漢以前は青銅時代に屬し、殷周の時金石併用の過渡に際せるに似たり。然るに支那に接續せる東方諸民族は

金海貝塚は金石併用時代に屬す

東亞に於ける  
金器の傳

久しく石器時代の文化に停滞して支那漢族が既に青銅器時代文化の極盛に達せる後も  
なほ其の域を脱すること能はざりしが漢代に於ける支那人の勢力の勃興と其の文化の  
宣傳とに由りて一躍して其の鐵器時代の文化に接觸し茲に金海貝塚に於けるが如く鐵  
石併用の時期の現出を見るに至れりと解す可きなり而かも斯の如き狀勢は單に南鮮に  
止まらず日本に於いても全く同様のものありしことは我が考古學上の事實の之を證明  
する處なり支那が韓半島に其文化を波及せるは必しも漢代に始まれるに非ず少くとも  
春秋戰國の時代より其の證迹を止むるも武帝朝鮮を征して四郡を置き以來終に其の  
植民と文化の移植に確固たる根柢を得て北鮮領有の郡縣より漸次南鮮占據の民族に及  
べるものなる可きは一般文化の狀勢より推測するに難からざる處なり<sup>(1)</sup>

金海貝塚住  
民の生活狀

凡そ骨角製品の出現は歐洲に於いては早く舊石器時代よりこれあり新石器時代金石  
併用期以後に及ぶと雖も元來此の材料は石器を以て加工するに容易ならず金屬器の使  
用によりて始めて自由の技術を蓄ふ可きものありされば瑞西湖上住居の遺址に於いて  
も特に金石併用期に於いて骨角製品の製作顯著なるを見る我が金海貝塚に於いては其  
の鐵器の稀少なる事實は如何に當時此の利器の貴重なりしかを想像せしむるに足るも  
のあり茲に於いて彼等は僅少の鐵製利器を以て多數の骨角器を製作し石器の有するこ  
と能はざる強靱なる性質を此の材料によりて發揮せしめ金屬器の代用を試みたるを想  
見せしむるものあり而かも一方には今日遺跡に殘存せざる竹木等の材料を以てせる尖  
頭器も亦た當時多數に製作せられしことは推測に難からざる所にして魏志倭人傳中に

貧弱なる生  
活の内容

倭人が鐵鐵以外に骨鐵竹箭を使用せしことを謂へるもの移して正に此の金海貝塚住民  
の文化を示せるの語とす可く其の紡織の術を知りしことは土器押紋に於いて之を證し  
農業時代に入れることは燒米の遺塊これを明にす可く又た牛馬を飼用したることは其  
の遺骨之を明にし狩獵漁獵を以て生活とせることは貝殼獸骨の堆積これを物語りて餘  
あり此等の諸點亦た魏志中の倭人の文化狀態と其の趣を一にせるを見る而かも彼等の  
製作せる土器は已に吾人の見たるが如く其の形狀に於いて單調にして變化無く何等美  
術的形式を見ず又た紋様を施せるものも無く一切の遺物は一二の裝飾品を除きて全く  
實用的の生活要具たり内地貝塚等に見るが如き土偶等の美術的宗教的生活と交渉ある  
遺品絶てあること莫し思ふに彼等は單なる沿海の住民にして其の精神的生活の内容  
は極めて貧弱なりしを想像せしむるものあるを禁せず

支那文化と  
の接觸

さて稻米を植ゆることは東亞諸國に於いて其の起源古くして金海貝塚住民は果して  
之を何處より傳へたるかを明にすること能はざるも其の鐵製利器と玻璃製玉の兩者に  
至りては彼等自身之を原料より製出せりと考ふる可きこと能はず其の接觸せる文明國たる  
支那より之を移入せるものなりとするの最も穩當なるを覺ゆるのみならず其の王莽の  
貨泉の存在は彼等が明に支那文化と接觸せるものありしを證するものに外ならず然ら  
ば則ち此の支那文化との接觸の時代は如何貝塚構成の絶對年代は如何更に進んで其の  
住民の人類は如何是れ吾人が次節に於いて少しく考察を試みんと欲する所なり

〔註〕(一)濱田耕作『東洋文明の起源』(大阪朝日新聞、大正十一

年一月所載)參照。

(二) Keller, Lake Jewellings) ファンナー  
「歐洲湖上住居」(Munro, Lake-Dwellings in Europa)

等参照  
(三) 本書第三章第三節註(一)同第九節註(一)参照。

## 第二節 貝塚構成の年代と人種

金海貝塚構成の年代は既に述べたるが如く其の示現せる文化は金石併用期に屬し而かも其の金屬が鐵器なる事實よりして支那の文明が既に鐵器時代に入れる以後其の影響に本くものなることを推測せしむ。而かも支那に於ける鐵器の存在は早く三代に之を認む可きも其の利器の主用材料としての金屬は青銅にして鐵が之に代りて一般に布及して青銅に代れるは略ぼ之を前漢時代に置く可きが如し然らば此の鐵器時代に入れる支那文化との接觸影響によりて金海貝塚の住民が鐵器を得たりとせば少くとも其の時代は西曆第一世紀以後たらざる可からず而して此の一般的推測に向つて更に確實なる證據を提供するものはかの王莽の貨泉の發見なりとす。

金海貝塚に  
得る時代の  
民の鐵器を

貨泉の考古  
學的意義

錢貨が考古學研究上絕對年代を明にす可き最も有力なる資料たるは吾人の言を俟たざる所なるが其の告ぐる所は即ち錢貨發行の年代を以て其の存在遺跡伴出遺物の上限 (upper limit) に在りて下限にあらざる。金海貝塚の場合に於いては此の遺跡の一部の構成せられたる年代の上限が王莽時代即ち西曆第一世紀 (A. D. 1c) に在りとするに過ぎず然れども王莽の貨泉は新の篡立國家の沒落と共に再び鑄造せられず五銖錢の復活せられたる特殊の事情よりして此の貨幣の通用は主として新の時代及び之に接近せる後漢の時

代に止まり長く後世に及べりとすることは不可能にあらざるも不穩當の見解たる可く吾人は貨泉の存在によりて此の遺跡の一部が第一世紀若しくは第二世紀頃に構成せられたるものなりと推測するの最も自然的解釋たるを信するものなり。況んや此の特殊の性質を有する錢貨が日本に於いても金石併用期と思惟せらるゝ遺跡より發見せらるゝ事實あるに於てをや。

人種的考察

金海貝塚構成の年代は貨泉の發見によりて其の確實なる證據を得たるも之が住民の人種的考察に至りては人類の遺骨の發見無きを以て吾人は其の確固たる科學的資料に立脚するを得ざるものあり。たゞ發見遺物の特徴を附近のそれと比較して概然たる推定を試むるに過ぎず。既に述べたるが如く本貝塚發見の土器は三類の變化を示せるも其の製作年代の間に距離を認むること能はず。同一民族の所用製作に係れりとするの適當なるを見たり。而かも陶質青黝色の土器は南鮮任那地方古墳出土のそれと全く同一系統に屬することは此等古墳築造人民との間に密接なる關係を有することを證するものにして他の反證の提供せらるゝ迄は、金海貝塚住民が即ち後の任那古墳築造の民族の祖をなせるものとすることを最も自然的なる解釋とす可く此點に於いては鳥居博士等の所見亦た吾人と相一致するを見る。

後の任那地  
方古墳築  
造者同一  
種族

吾人は嚮に屢々金海貝塚と其の發見遺物に於いて共通點を有し其の遺跡の性質に於いても酷似せるものとして慶尙南道梁山貝塚を指摘したり。此の梁山貝塚は此等の事實よりして全く金海貝塚と同一人種の同一時期に構成せるものなることを證明し、この人

金海貝塚の  
同種文化の  
分布

種の分布が確實に洛東江を挟みて慶尙南道の南北に跨れるものありしを知る可く、更に金海貝塚と共通なる土器骨角器の發見地たる慶尙南道金海郡長有面慶尙北道慶州月城、大邱公園等の諸地點も亦た同一人種分布地帯中に表入するも誤無からむ。たゞ茲に解決に困難なる問題の一は、此の金海及梁山兩貝塚の代表する金石併用期の文化と、慶州地方其他慶尙南北道各地發見する磨製石鏃抉入磨製石斧等を出す遺跡との關係なり。其の二は此等南鮮遺跡と中鮮北鮮等の石器時代遺跡との關係なりとす。

慶州地方遺  
跡との關係

金海貝塚は石器の發見僅少ななるも、其の石斧は磨製撥形のものなるが如く、磨製石鏃に就いては其の確實なる出土を聞かず。鳥居君大正五年報告に釜山小林某金海發見磨石鏃を所有云々とあるも、之に反して慶州等發見の石器には抉入磨石斧磨製石鏃頗る多く、却て撥形石斧を見ず。たゞ其の土器は兩者共に角形捉手ある赤色素焼風のものあり、其の間差違を認むること能はざるに似たり。斯の如く南鮮石器時代金石併用期に於ける遺物中石器には一見兩種類の存するが如く、而かも土器に於いて差違を發見せざるは頗る奇異なる現象と謂はざる可からず。然れども日本内地に於いても土器の性質相同じくして、而かも抉入石斧を發見する處と否らざる處とあり。此等を必しも別人種の所産となすことを得ざるものあれば朝鮮に於いても亦た此の石斧の有無を以て人種を別つことを要せざる可し。又た磨石鏃の金海梁山等に見ること無きは骨角製鏃を以て之に代ゆるに至れる故なりとも解す可く、土器の性質の共通せる現象は、寧ろ此の問題の解決に最も重きをなすものと謂ふ可し。而して鳥居博士の採集調査せられたる材料によれば、全羅南道忠

北鮮地方遺  
跡との關係

清南道の遺跡は慶尙南北道と同系統の土器を出し、京畿黃海平安南道等北鮮地方は一般に條線紋を附したる土器を出し、抉入石斧を見ること少く、南朝鮮諸遺跡と其の趣を異にせり。(附考)吾人をして此の土器の性質の相違よりして此等北鮮の遺跡は南鮮のそれと別人種の殘したるものなることを想像するを禁せらざしむ。又た更に咸鏡北道の遺跡よりは打製石斧等稍々型式を異にせる石器を出し、他の北鮮地方のものと同じからざるものを見る。此等諸遺跡相互の關係滿洲地方遺跡との關係及び同じく赤色素焼の彌生式土器と抉入石斧、石庖丁等を出し、時に貨泉をも發見する内地の石器時代若しくは金石併用期との關係に就きては其の問題の重要にして興味あるものあると共に、更に豊富なる資料の提供を俟つ可きものあり。今ま遽に論決を急ぐの時期に非ざるを思ふ。たゞ現在に於ける吾人の感想は、南鮮石器時代金石併用期の遺跡は、其の文化と人種とに於いて内地彌生式土器系統のそれと密接親縁の關係にあるを推測せしむ。金海貝塚の發掘と調査は單に朝鮮に於ける先史時代の研究に重要な寄與をなすのみならず、日本内地のそれを究むるに資すること大なり。吾人の調査報告が既往諸學者の業績と相俟ちて、此の研究の一資料たるを得ば幸之に過ぎず。



【附表】 朝鮮石器時代及金石併用期發見遺物要覽

地名	土		器		石		器		骨器		其他
	赤燒	同上	陶質青條線紋	磨擦形	磨擦形	磨擦形	鐵庖丁	骨鏃	骨鏃		
慶南金海具塚											
同梁山具塚											
同酒村面											
同柳下里具塚											
同蔚山兵營											
慶北慶州月城下											
同慶州南山											
同慶州川北面											
慶北慶州九政里											
同慶州臥龍洞											
同慶州峴峴里											
慶南密陽馬巖山											
慶北花園面											
同月背面											
同榮州東面											
同尙州洛東面											
同聞慶芮羽里											
全羅南道花源面											
											項石
											貨石

地名	土		器		石		器		骨器		其他
	赤燒	同上	陶質青條線紋	磨擦形	磨擦形	磨擦形	鐵庖丁	骨鏃	骨鏃		
江原道巨津里											
同巽陽面											
同通川面											
忠南扶餘窠岩面											
同瑞寧面											
京畿江華島下道面											
同南終面											
黃海道南部面											
同安岳郡邑內面											
同海州南山											
黃海道殷栗											
同夢金浦具塚											
平南大同江面											
同美林里											
同寺洞											
同龍儒里具塚											
咸北下三峯											
同雄基具塚											
											鐵器伴出
											砥石

【備考】(一)ハ該遺物ノ存在ヲ示ス、本表ハ主トシテ總督府博物館ニ蔵タル島居博士調査採集遺物ニ本キ、本篇ノ參考ノ爲メニ試ニ作爲セルモノニ過キズ、將來補訂ヲ要スル所多カルベシ。



【附記】本篇を草するに當り、金海貝塚發見の獸骨は京都帝國大學助教駒井卓氏及び東北帝國大學教授理學博士松本彦七郎氏に同貝殼は京都帝國大學助手黒田徳米氏に各鑑定を請ひ其の示教を忝くせるは吾人の深く感謝を表する所なり。殊に松本博士は獸骨調査報告一篇を草し之を本冊に附載するを快諾せられたるは重要な寄與として吾人の光榮之に過ぎず。

朝鮮各地に於ける石器時代遺跡の研究は古蹟調査委員文學博士鳥居龍藏氏の調査資料に負ふ所大なるは特に余等の明記して感謝せんと欲する所なり。而して金海貝塚に關する博士の既發表の意見は必しも目下保持せらるゝものと全然同一ならざることには特に書信によりて吾人に注意せられたる所なるを以て茲に又明言し置く可し。なほ本篇脱稿後同博士が三角鏃に關して「スキート族三翼式鏃に就いて」人類學雜誌第三十七卷第六號の論文を發表せられ、又金海貝塚の下部に發見せる石棺の圖版及び略解同上第三十七卷第十二號の公にせられたる者ありしも、之を本文中に引用參考する能はざりしを遺憾とす。

## 金海貝塚出土獸骨調査報告

理學博士 松本彦七郎

濱田教授の依頼により教授の採集せられし金海貝塚出土遺物中の獸骨を鑑定する事左の如し。

### (一) 非ノン・Sus cf. *leucomylos* Temminck.

材料 一頭骨右顙額部破片。一左上顎破片第一及第二大臼齒附。一雄下顎癒合部及左水平枝破片左右第一及第二門齒并に左犬齒及自第二至第四前臼齒附。一下顎右顎角部破片。一上右第一門齒。一下右第一門齒。一同上。一胸推。一腰推。一同上。一右上膊骨破片。一右内側掌骨第二掌骨。一左脛骨。一左距骨。一其他不顯著小破片若干。

是等の齒骨より推すに木貝塚の猪は現生内地猪よりは僅に大にして大略内地石器時代の西國型猪と相如く、内地石器時代の中部乃至東北型猪よりは著しく小なり。樺太石器時代猪よりは稍大なるが如し、朝鮮の猪が如何なる種類のものなりやは學界に於て未決定の事に屬す。本材料を呼ぶに *Sus* cf. *scrofa* とせず、是を内地猪に比較して *Sus* cf. *leucomylos* としたるは聊か卑見の存する所なり。本材料はさる目的に對しては甚だ貧弱にして未だ斷案を下すに躊躇する所あれど、見わたる限りに於て頗る内地猪及 *Sus cristatus* 群に近似し下顎前臼齒列が短き事に於て *Sus scrofa* 群と異なり予が後者に屬すと認めつ

ゝある樺太石器時代猪とは種々の點に於て著しき庭徑あり。ネーリツング氏はウラデオストツク附近に又ツイルソン氏は楊子江下流地方に日本猪産すと唱へ、未だ一般の認容を得たる説ならざる如きも注意すべきなり。シカの分布とシカの分布とを併せ考ふるにさる事ありとも又朝鮮に日本猪産すとも不思議ならず。尙ほ本貝塚の猪は野猪か家かとの問題に付ては同じく材料の貧弱を啣てども、その大さ、門歯大齒及前白齒の大きさ、左迄短縮し居らざる口吻部等より見るに家畜ならむの證迹は陰性なり。

(二) シカ *Hydropotes inermis* Swinhoe.

材料 一下顎右水平枝破片前白齒及大白齒附、但し最後大白齒の後踵は破損。一下顎左水平枝破片前白齒及大白齒附。

本種は麝香鹿と同じく最小型なる而して無角の鹿類の一なり。麝香鹿の下顎大白齒は外側に甚だよく發育せる補足錐を有し又前内丘の後縁に著しき褶襞ありて丘頂より後方に引ける稜が二重になれるも、本種のそれは普通の鹿類同様にしてさる事なきを以て容易に識別せらる。朝鮮産の本種として別に *Hydropotes oxyrops* Houde の名あれどもライデッカー氏はさる種の區別を認めず、本種は楊子江下流地方、北部支那及朝鮮に分布す。

(三) シカ *Cervus (Sika) nippon* Temminck.

材料 一下顎右水平枝破片最後乳白齒未だ齒槽より露出し終らぬ前白齒及大白齒附。一下顎右半部破片第二及第三大白齒附。一同上第三大白齒附。一下顎右水平枝破片最

後乳白齒及第一大白齒附。一同上第二大白齒及破片的第三大白齒附。一同上未だ齒槽より露出せぬ第二最前前白齒附。一同上第二最前乳白齒及破片的第三乳白齒附。一下顎左半部破片前白齒及大白齒附。一同上第二及第三大白齒附。一同上。一下顎左水平枝破片第二及第三乳白齒未だ齒槽より露出せぬ前白齒并に第一及第二大白齒附。一下右第一門齒。一下右第一大白齒。一叉角基部極小破片。一頸椎破片。一腰椎小破片。一左肩胛骨破片。一左橈骨下大半部破片。一左主掌骨(砲骨)下端部破片。一左内主指第一指骨。一左外主指第一指骨。一腰帶右半部破片。一同上。一左大腿骨下端部破片。一左主蹠骨(砲骨)上端部破片。一左主蹠骨(砲骨)下關節部缺損。一右距骨。一左距骨。一同上。一左跟骨。一其他不顯著破片若干。

以上の材料より見るに本貝塚の鹿は内地鹿より大ならず僅に小なるか然らずんば伯仲の間にあるべし。内地石器時代の東北型鹿よりは著しく小なり。朝鮮及南滿洲の本種は別に *Cervus eupus* Swinhoe の名を負へどもライデッカー氏に據れば内地鹿と區別なしと云ふ。更に滿洲には本種の大型なる一亞種あり又未だ名を負ひたるにはあらねども同様大型なるものは東北地方の石器時代并に北海道に産す。

(四) ウシ *Bos taurus* Linné.

材料 一胸椎破片。一胸椎棘狀突起破片。一右骰子舟狀骨。一右主蹠骨(砲骨)上端部破片。

骰子骨と舟状骨とが癒合して一片の骰子舟状骨をなす事は鹿科及牛科の特徴なるが茲に擧げし該當骨は鹿又就中馴鹿のそれよりも巨大にして牛のそれに合ふ。第三及第四掌骨が癒合し又第三及第四跗骨が癒合してそれと一骨をなす事も同断なるが鹿科の砲骨は後面全長に沿ひて甚だ顯著なる縦走溝を有し、牛科のそれは後面平坦に近し、茲に擧げし當該骨は大きさと云ひ所述性状と云ひ、よく牛のそれに合ひて紛ふべくも無し。充分に成育せしものの骨片ながら、その大きさは野生牛ならず飼養牛のそれに合ふ。先史乃至原史時代の牛に就ては多々論すべき點あるなれど、そは材料の豊富なる場合にのみ可能事なれば、茲には單に牛の存在を驗出し得たるのみに満足せむ。

(五)ウマ *Equus caballus* Linné.

材料 一、左上膊骨下部破片。一、左大腿骨下部破片。一、左脛骨上部破片。

上記股骨片より見るに本貝塚の馬は四肢骨比較的、太造りなるものに屬するが如し。先史乃至原史時代の馬に就ても前述牛の場合と同断なるものあり。

(六)アシカ(又名ミチ) *Zalophus* cf. *lobatus* (Gray).

材料 一、右跟骨。

この跟骨は巨大なる蹠脚類のものなるを示し、内地西部及朝鮮南部近海のさる巨大なる蹠脚類はアシカなれば恐らくそれなるべし。アシカの種名は學界に於て未決定の事に屬す。濠洲及新西蘭に産するものが眞の *Zalophus lobatus* にして、北米西海岸に産するものは

*Zalophus californianus* と呼ばれ、第三種即ち日本のアシカはその何れとも或は同じとも或は異なるとも云はる。分布上より見れば三種鼎立の形なれど、然る時に日本のアシカは未だ學名を負はず。因に北海道及樺太近海のト、*Eumetopias stelleri* と本種とは久しく混同せられ居りし如けれども、全く別種なり。ミチの皮を貴き敷物に用ゐし由は古事記神代の卷に見ゆ。

尙ほ獸骨にはあらねども驗出し得たるまゝ、海龜を追加す。

(七)アカウミガメ *Caretta olivacea* (Eschscholtz).

材料 一、腹甲小破片。一、肩帶小破片。一、腰帶小破片。一、左第三掌若しくは蹠骨。一指若しくは趾骨。

最前の腹甲破片は本種のものなるを示す。其他の材料は本種かオサガメ *Dermochelys schlegelii* か明かならねども假に茲に擧げ置けり。

以上の外尙ほ少数片の鳥骨と魚骨とありたれども、その準備なきを以て鑑定を見合せたり。鳥骨には略雁大の種と略鴨大の種とあるが如し。

猪鹿牛馬等の諸骨片に骨を舐りたるむが如き食肉獸の齒の痕あるものあり。蓋し犬の所業にてもやあらむ。本貝塚材料に於て犬の遺骨は實際には驗出せられざりしも、犬は日本石器時代に於て最古の家畜なるものゝ如き程なれば、恐らく本貝塚にも存在したらむ。

と推察せらる。

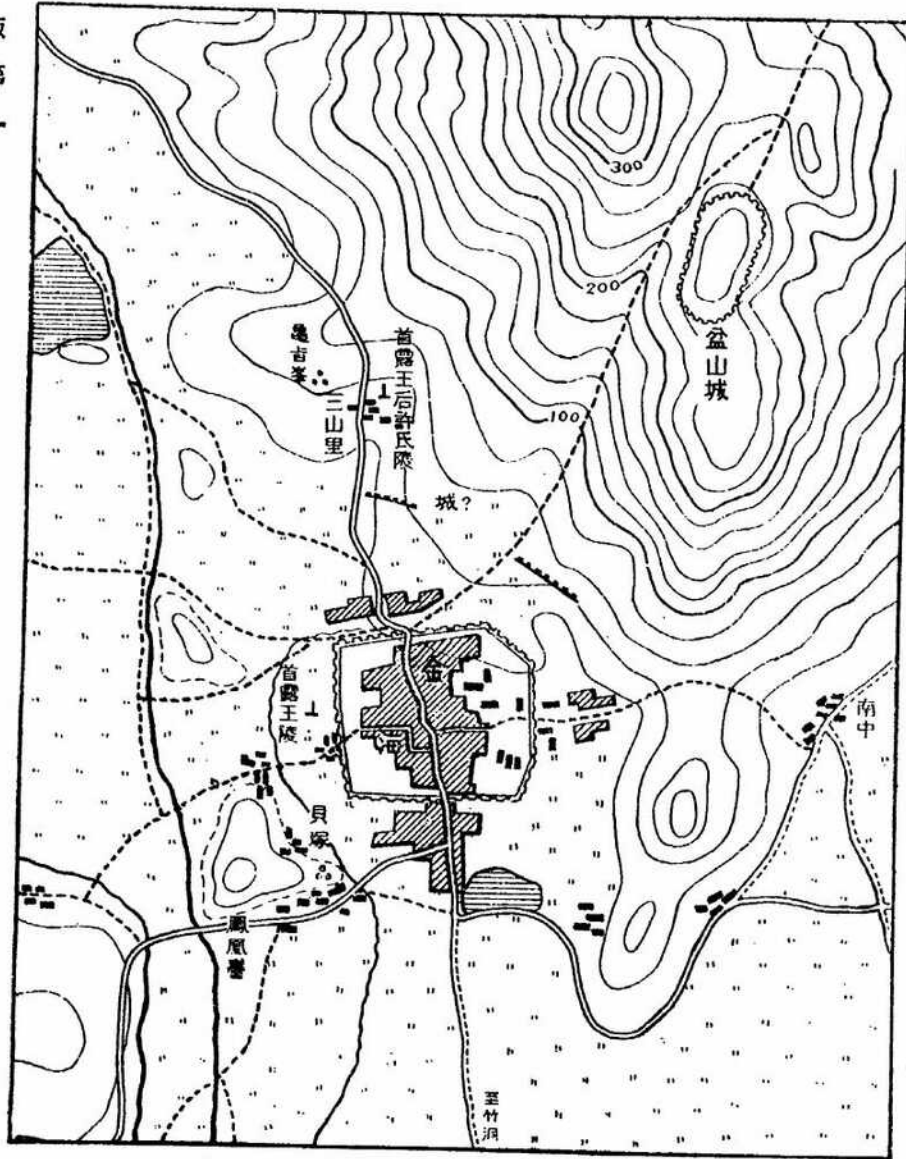
猪の距骨猪又は鹿の肋骨牛の胸椎等の或るものに金屬製ならではと思はるゝ銳利なる刃物を以て切り付けし刃の痕あり。本貝塚の他の遺物より立證せられし所と併せて本貝塚時代に金屬器の使用ありし事を示せり。

本貝塚獸類中最も多きは鹿なり。内地及北海道の石器時代遺蹟に於ても大抵同様なり。他の獸類は僅に存在を驗出し得たる程度にして本材料のみにては未だその多少を論し得ず。家畜としての牛は未だ絶わて本邦の石器時代よりは驗出せられず。馬は内地に於ては河内國國府尾張國熱田薩摩國出水等の諸遺蹟より知られたれども未だ東北地方の繩紋式遺蹟よりは驗出せられず。但し埴谷齊齋期には東北地方にも既に馬あり。内地の先史及原史時代に於ける馬の分布はこの家畜の到來の方向を暗示し。本貝塚に馬の存在は本貝塚が寧ろ降れる時期のものなるにもせよ是と照合して興味あるを覺ゆ。歐洲及中央亞細亞には新石器時代中既に家畜としての牛馬あり。支那には本貝塚時代以前より既に同断なるの文献上の證據もあれば本貝塚に内地石器時代よりは絶わて知られぬ牛が存在したりとて興味こそあれ怪しむに足らず。

圖  
版

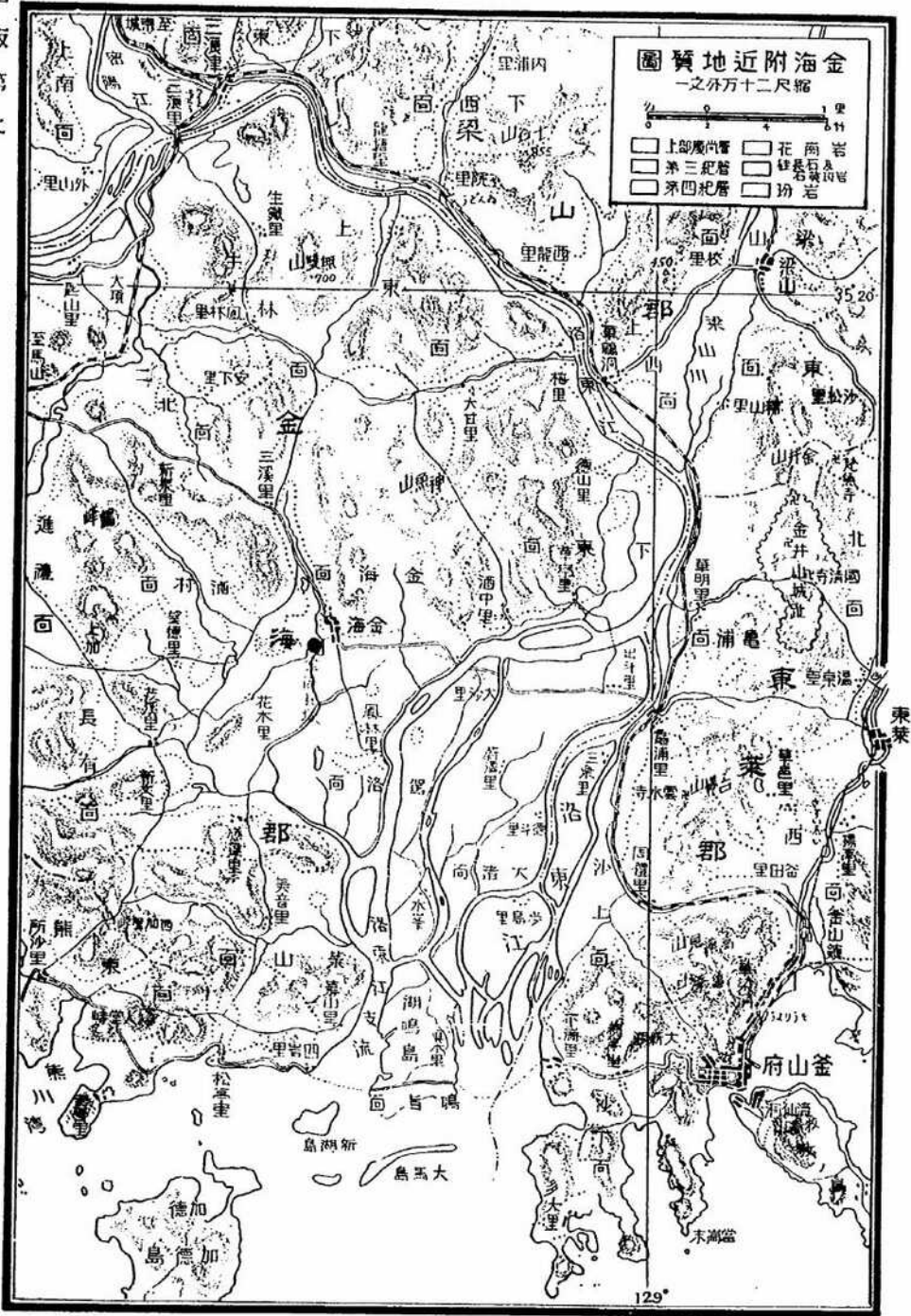
裏  
面  
白  
紙



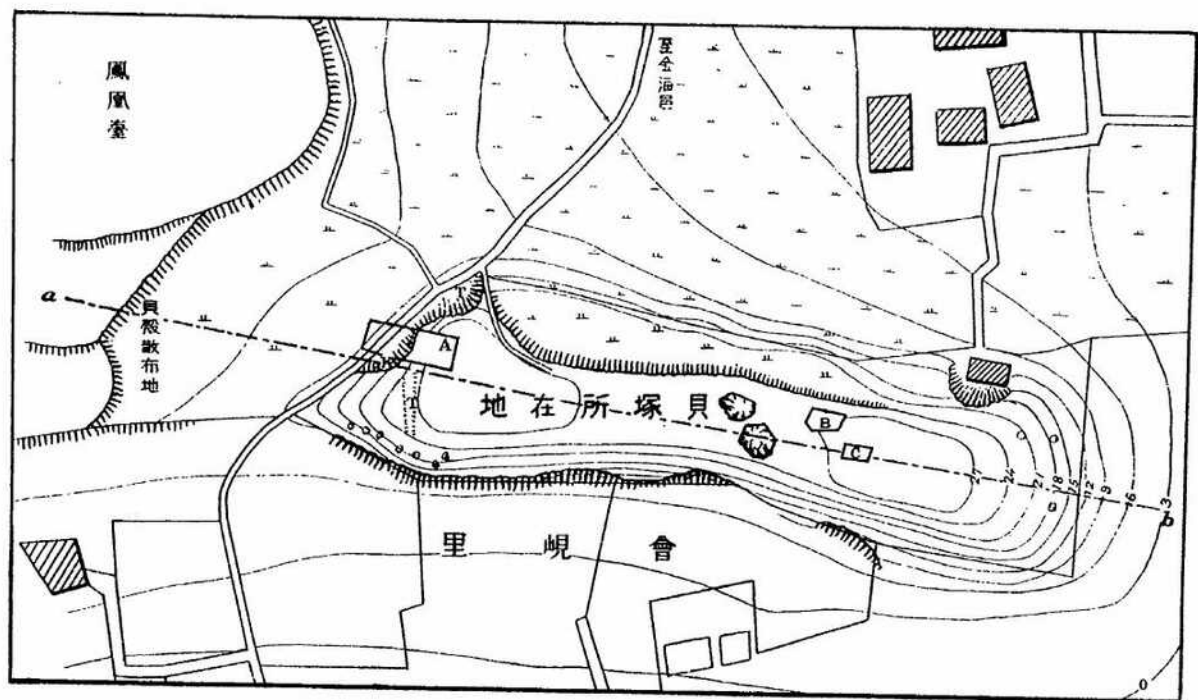


第一 金海附近地形略圖

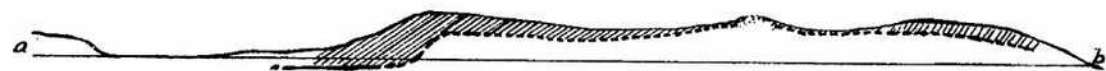
裏面白紙



裏面白紙



第三 金海貝塚地形實測圖



0 50 100 200尺

川嶽版圖

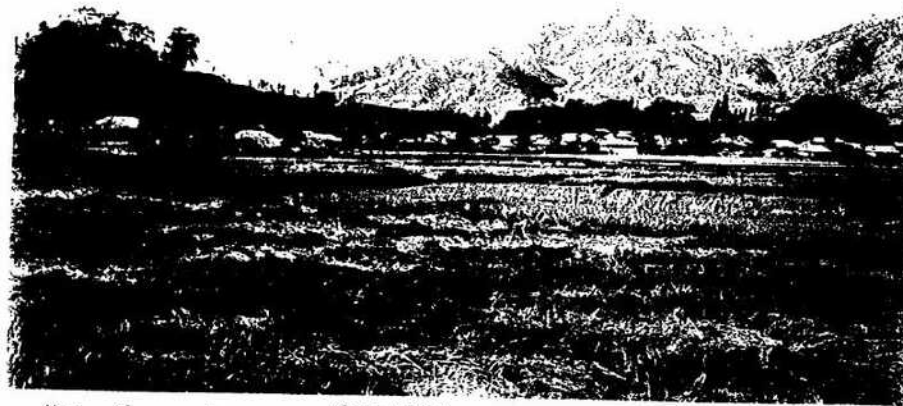
裏面白紙

圖版第四



第四 全海貝塚全景（北方より望む）

谷井委員撮影



第五 同上（南方より望む）

同上

裏面白紙



第七 同上南方岸部の具屋露出状態

第五版 圖



第六 金海具塚西端掘削部具屋露出状態

裏面白紙



圖版第六



第八 貝塚上より金海邑を望む



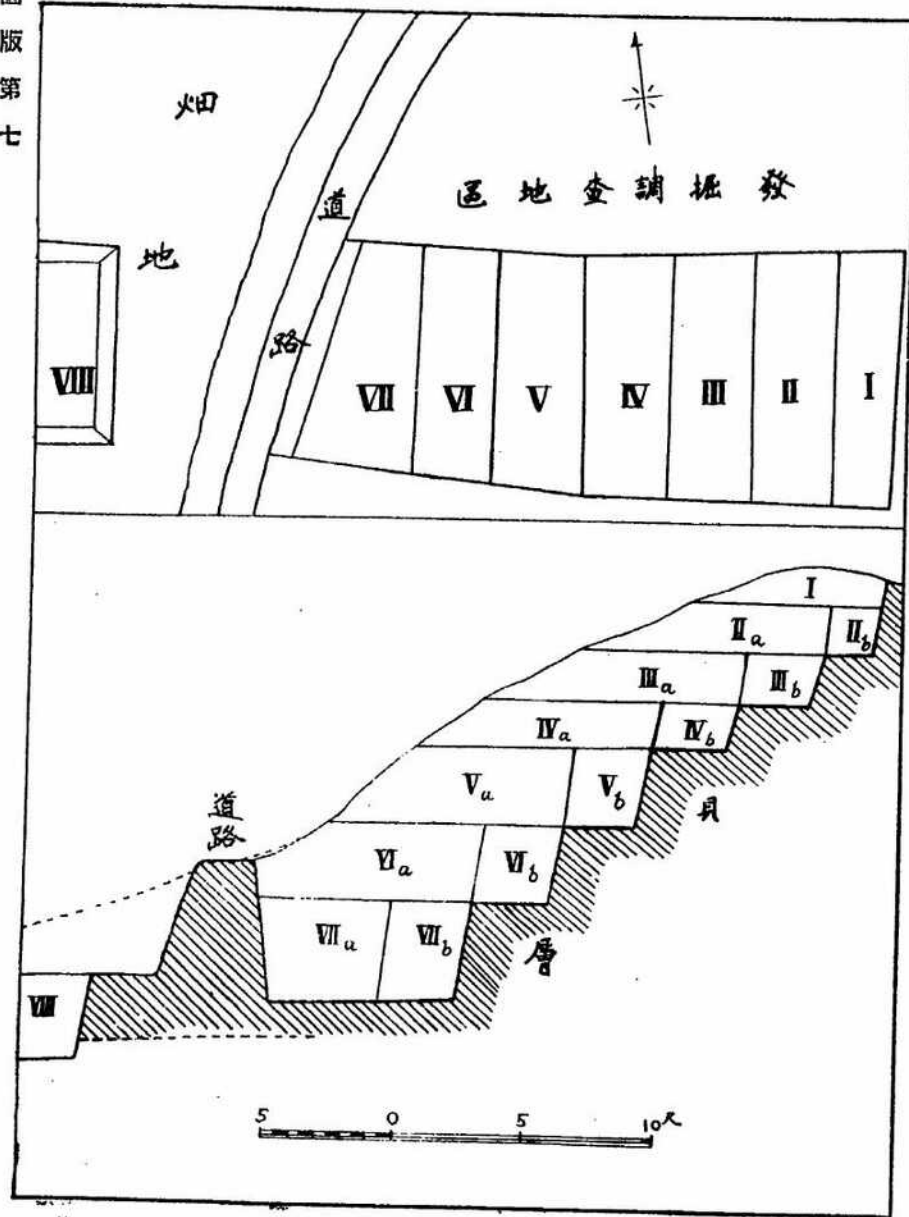
第九 北方より望める金海貝塚



第一〇 金海貝塚西方掘割部

裏面白紙

圖版第七



第一一 金海具塚發掘地域圖

裏面白紙

圖版第八



第一二 金部貝塚第三層發掘後の光景

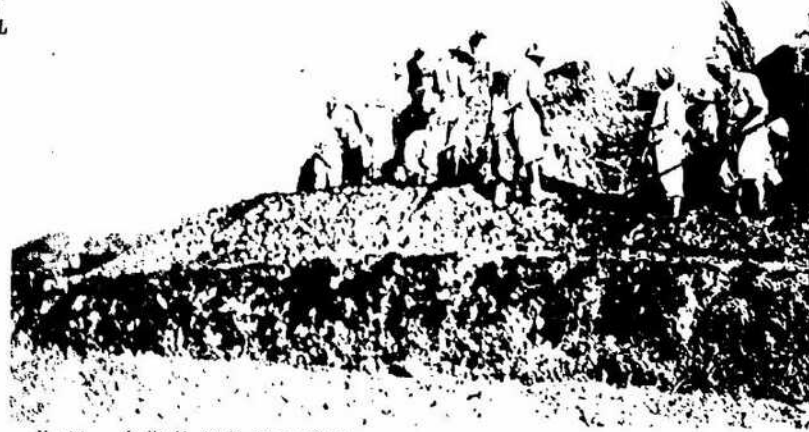


第一三 同上發掘作業中の光景

谷井委員撮影

裏面白紙

圖版第九



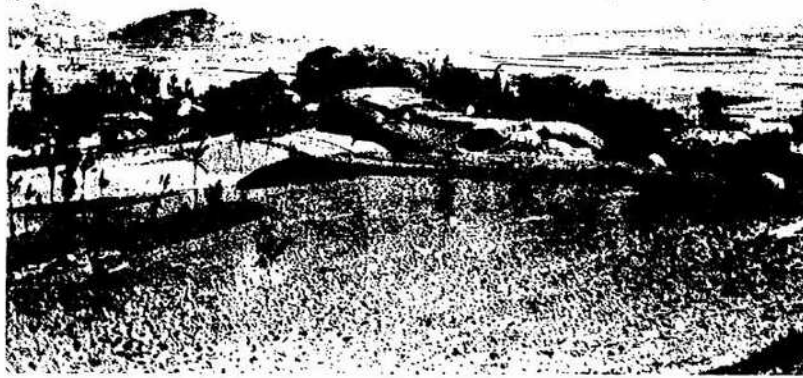
第一四 金海貝塚第四層發掘



第一五 同上第六層發掘終了後の状態

裏面白紙

圖版第一〇



第一六

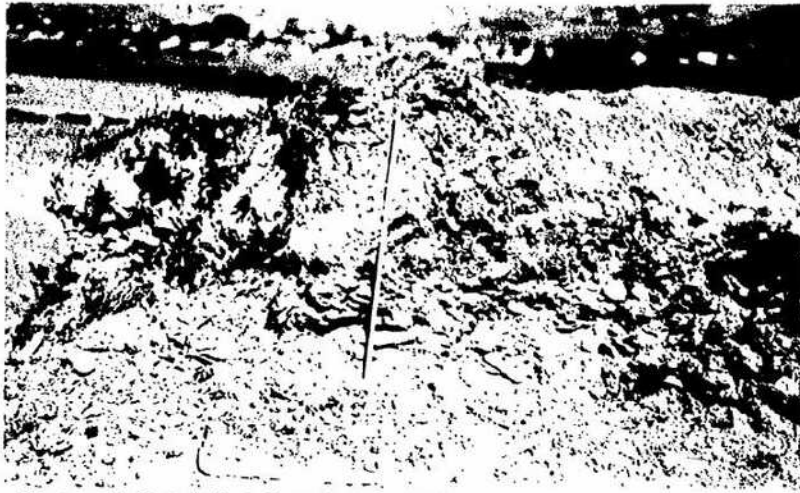


第一七

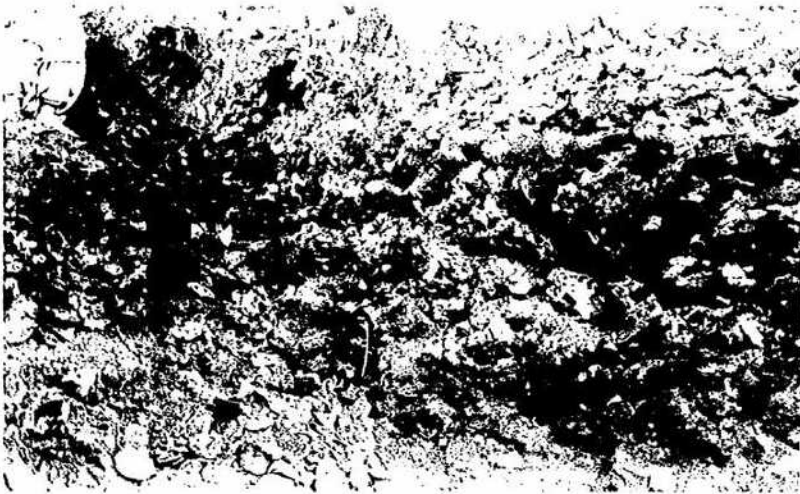
第一六 鳳凰臺より俯瞰せる金海貝塚  
第一七 段掘作業終了の際の狀態

裏面白紙

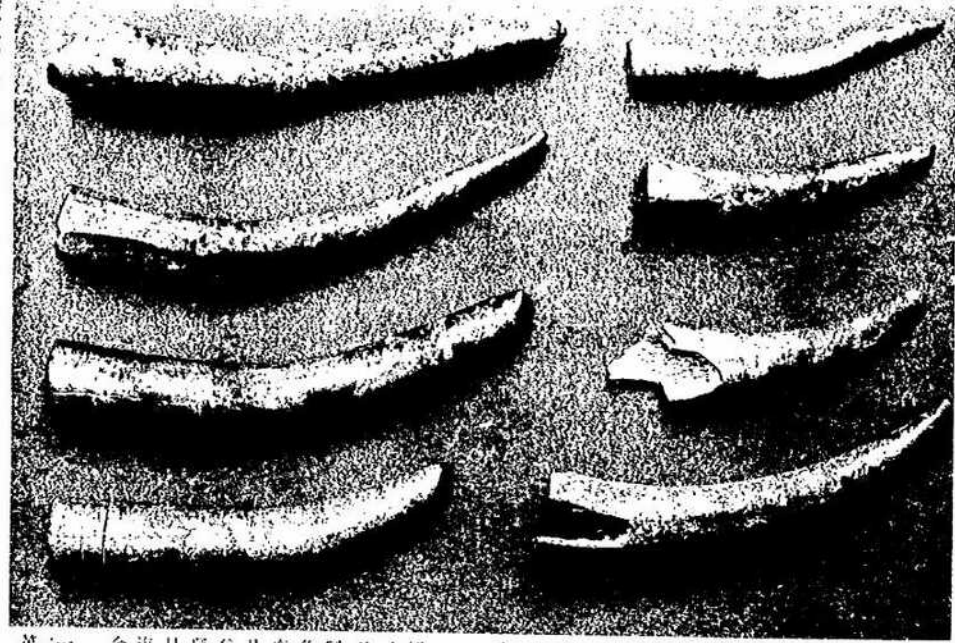




第一八 發掘穴北部上邊に於ける貝層

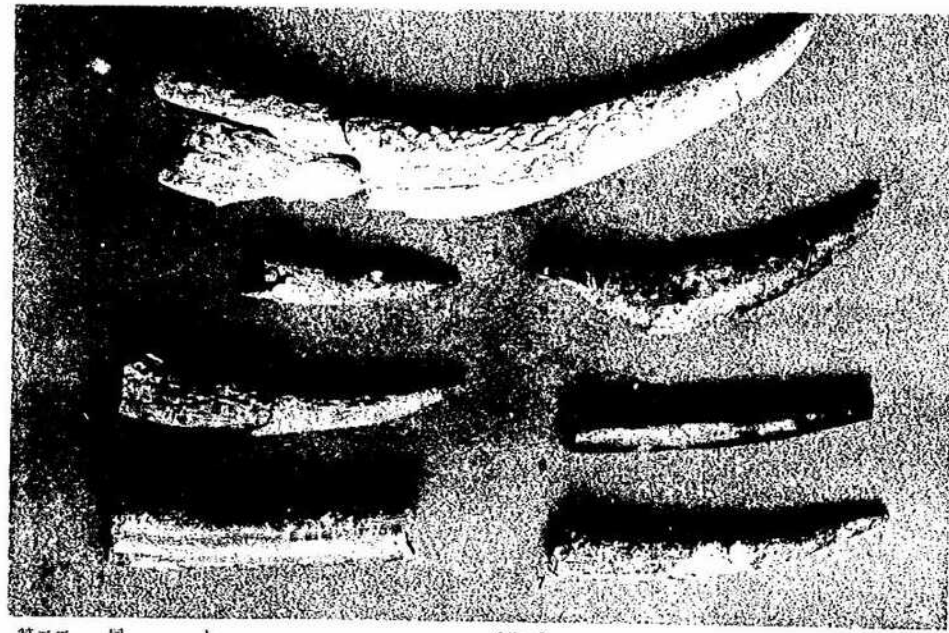


第一九 發掘穴南壁部の貝層状態



第一 金海具塚發見鹿角型刀子柄 (其一)

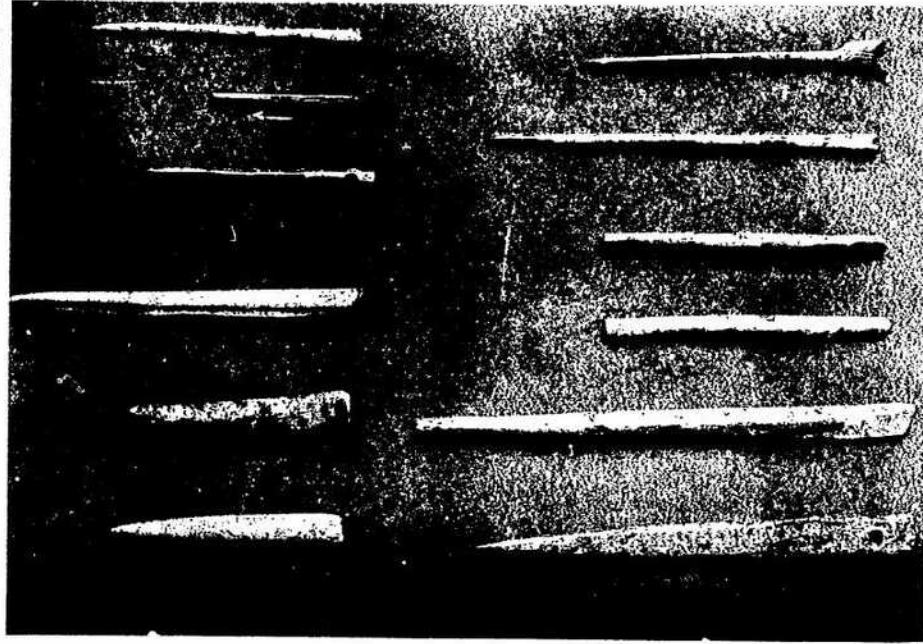
1



第二 同上 (其二)

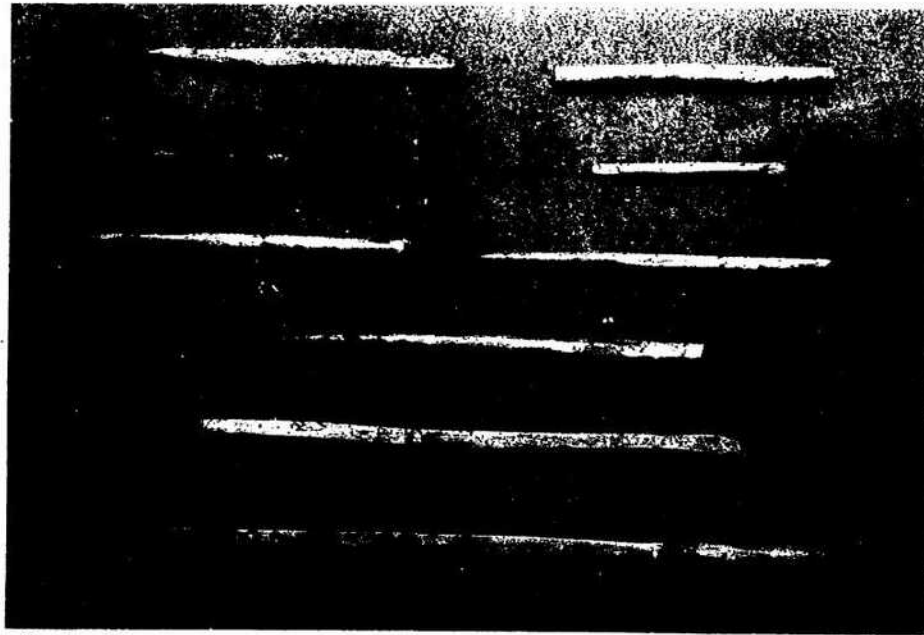
1

裏面白紙



第二三 金海貝塚發見骨製尖頭器 (其一)

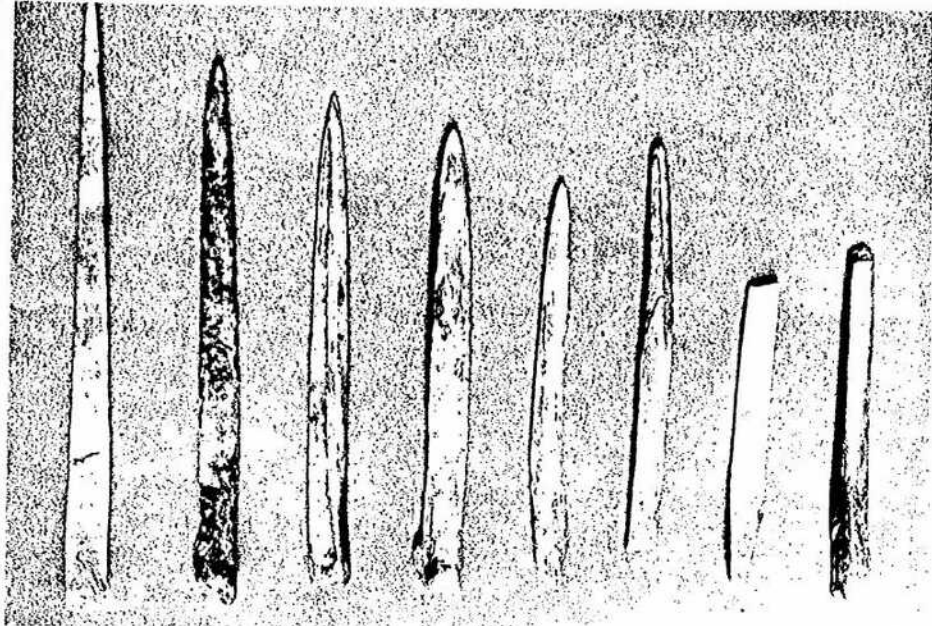
4



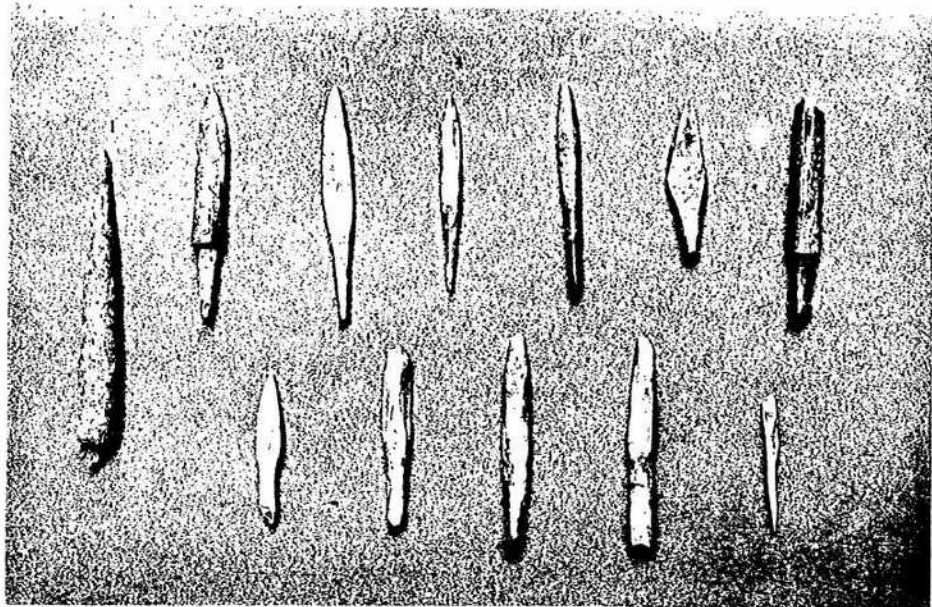
第二四 同上 (其二)

4

裏  
面  
白  
紙



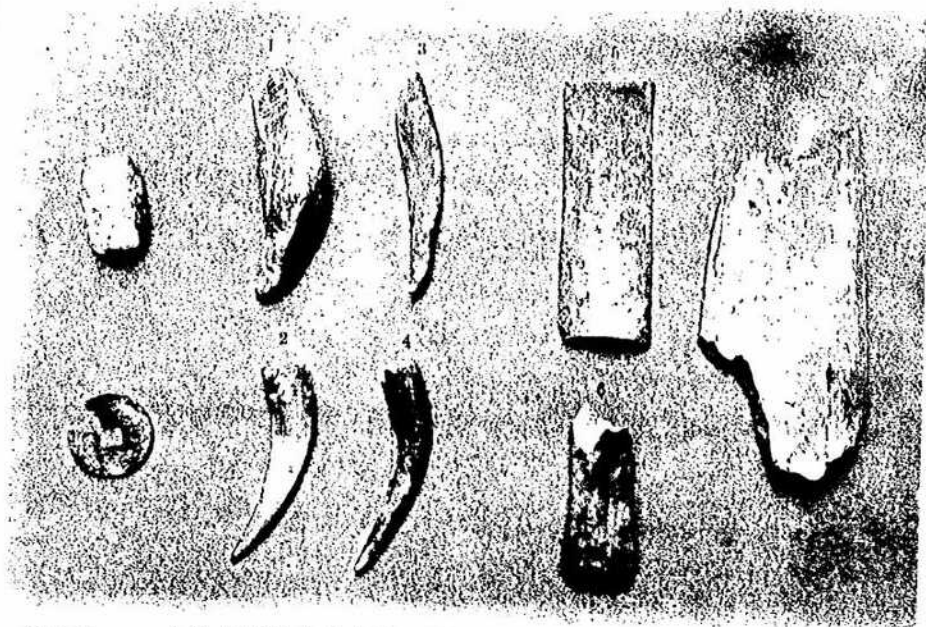
第二五 金海貝塚發見骨製尖頭器 (共七)



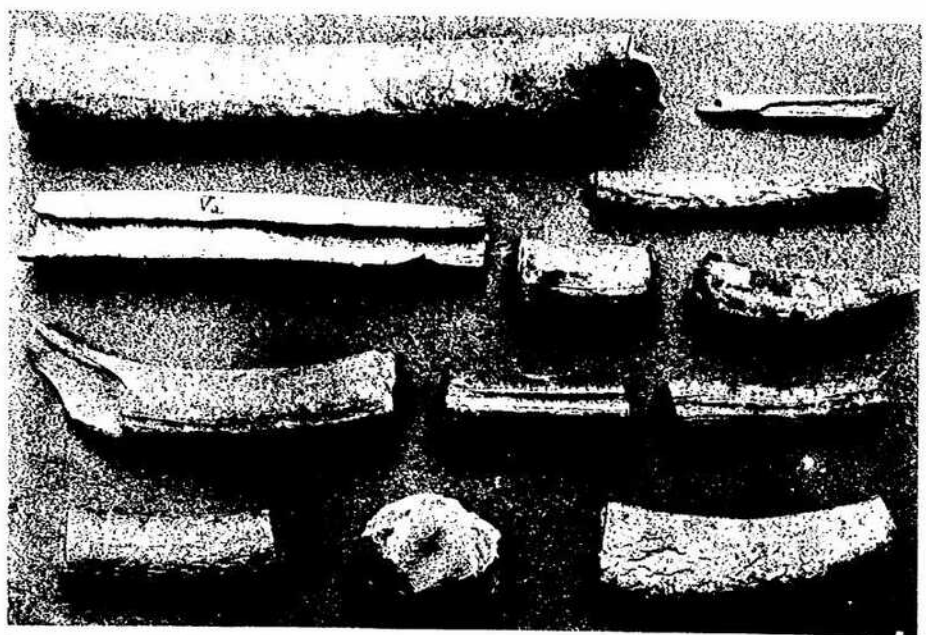
第二六 同上發見骨器

裏面白紙





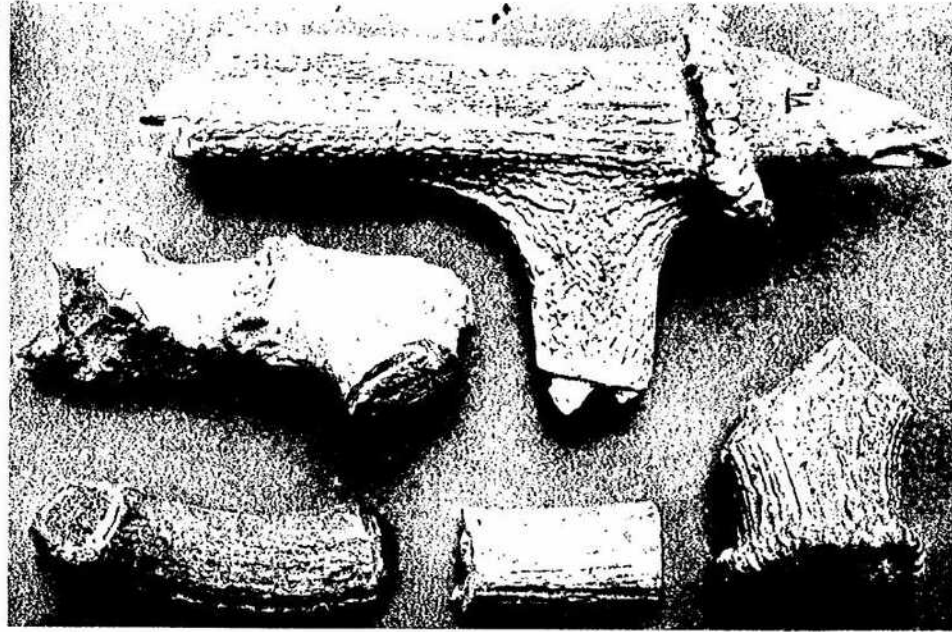
第二七 金海貝塚發見鹿角品牙製懸吊品玉器及貨泉



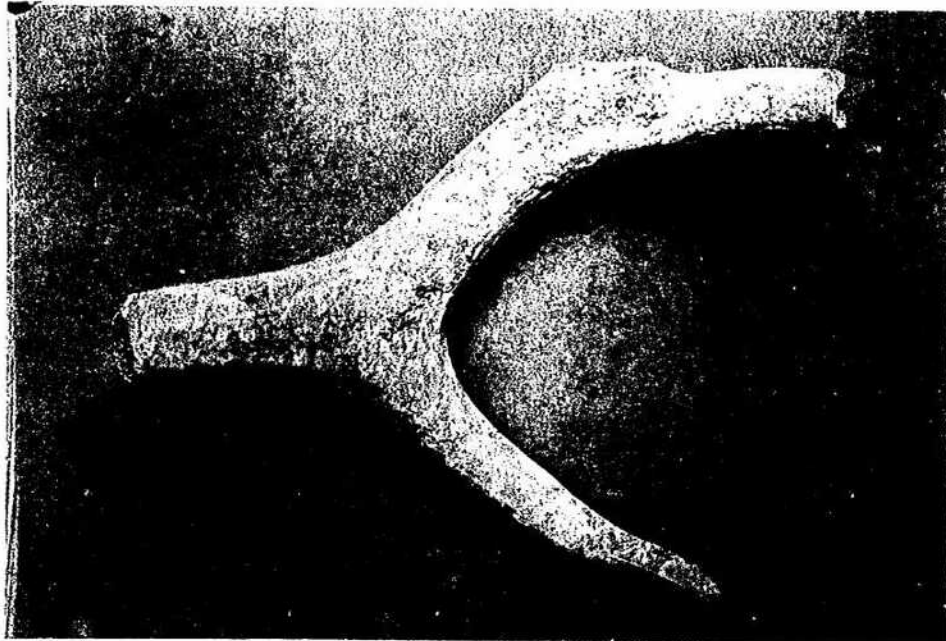
第二八 金海貝塚發見鹿角加工品

裏面白紙



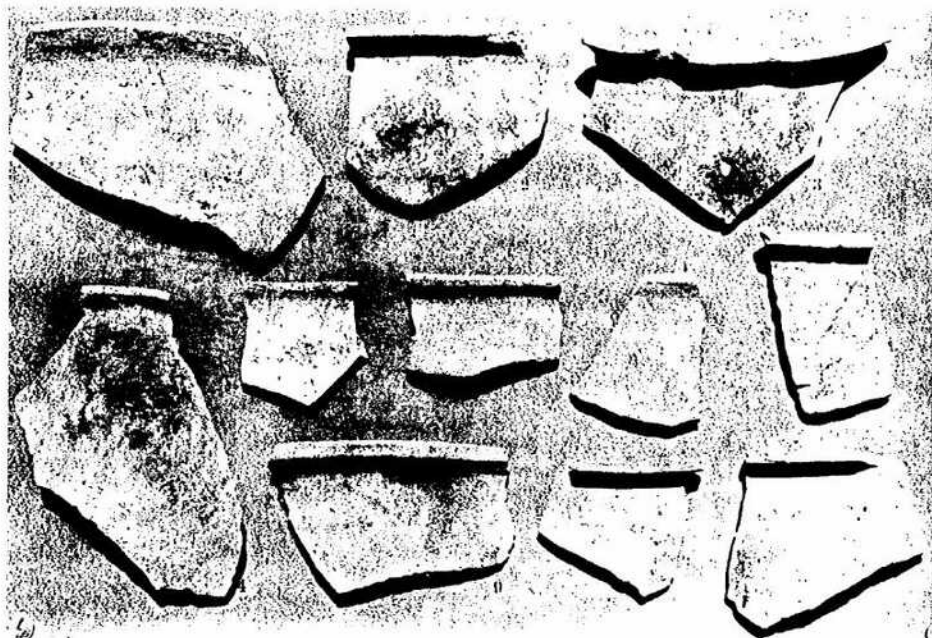


第二九 金海貝塚發見加工鹿角 (其二)

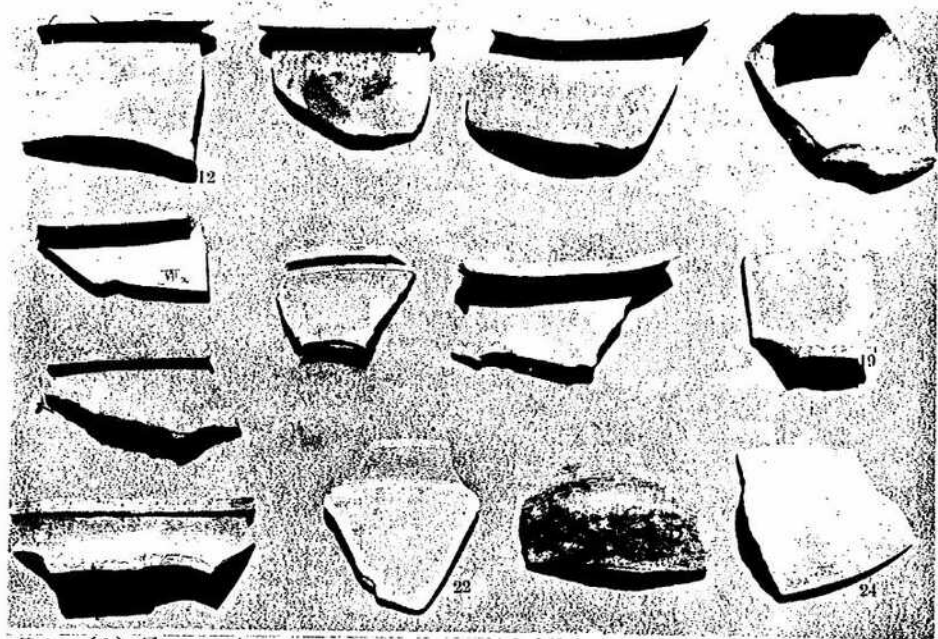


第三〇 同 上 (其三)

裏面白紙

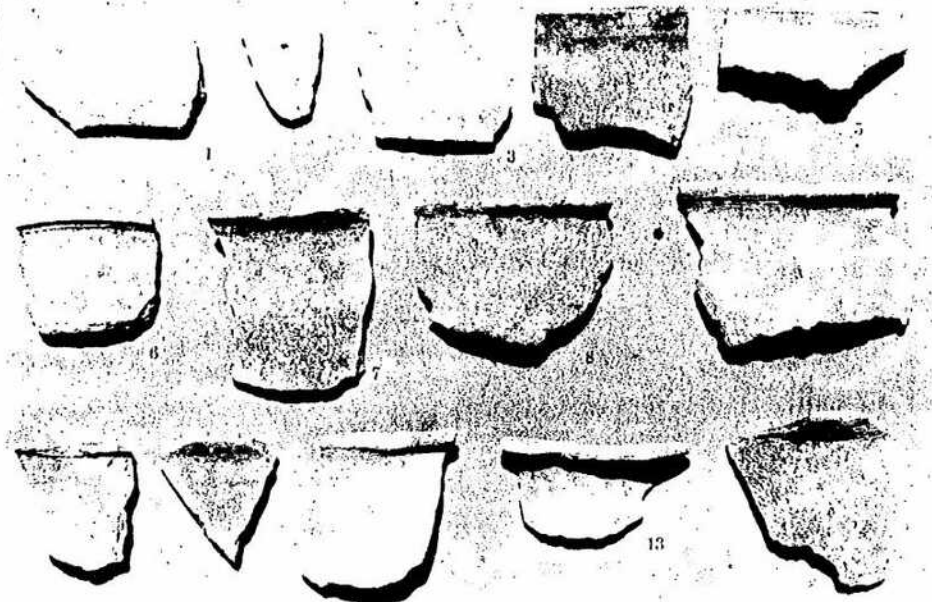


第三一 (甲) 金海貝塚發見點青色土器口緣部



第三一 (乙) 同上

裏面白紙

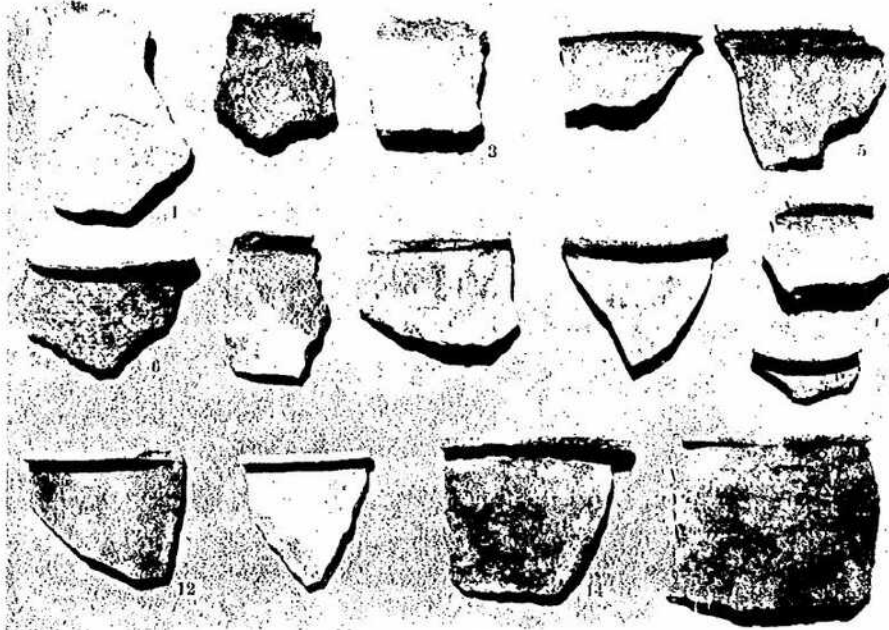


第三二 (甲) 金海貝塚發見赤色素燒土器口緣部

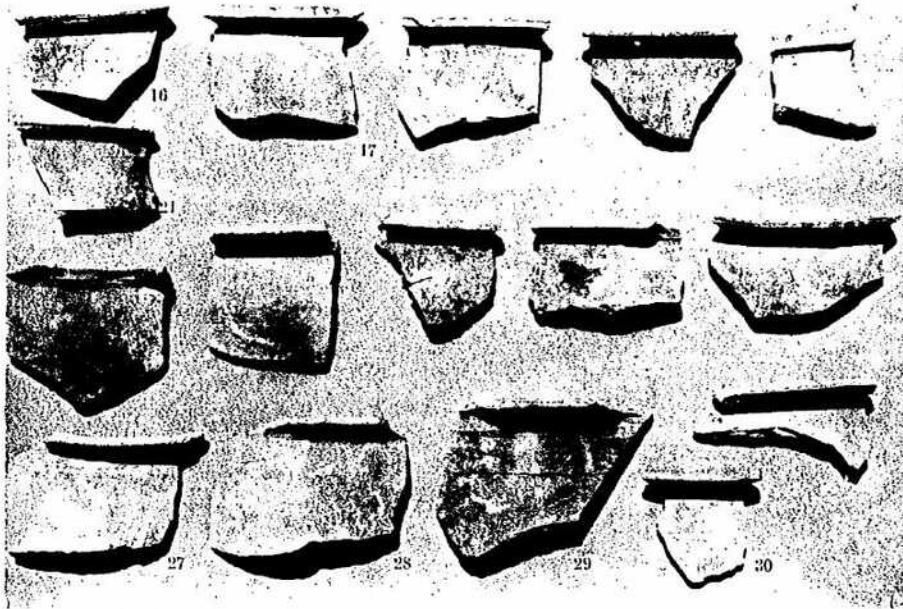


第三二 (乙) 同 上

裏面白紙



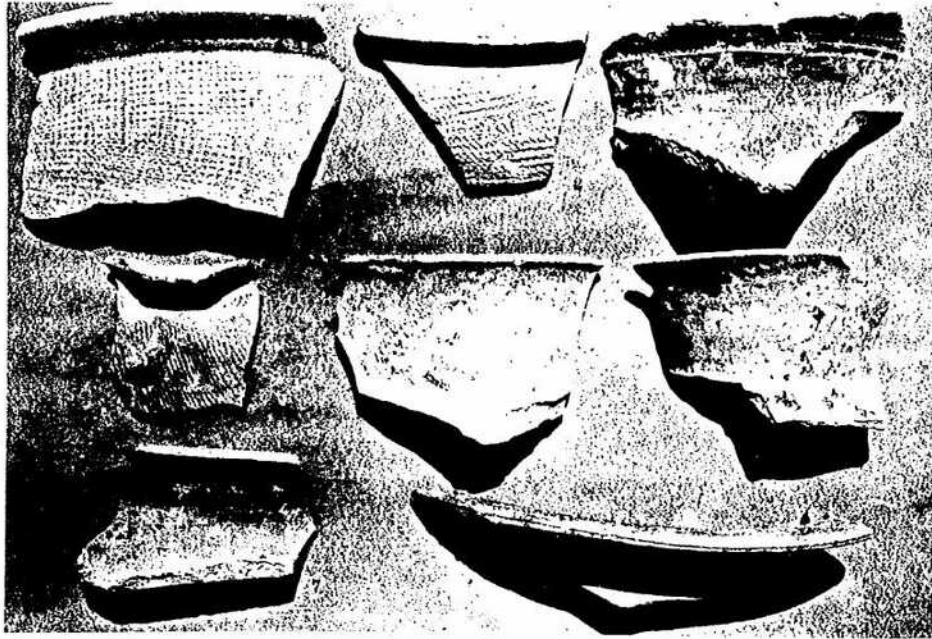
第三三(甲) 金海貝塚發見黑褐色土器口緣部



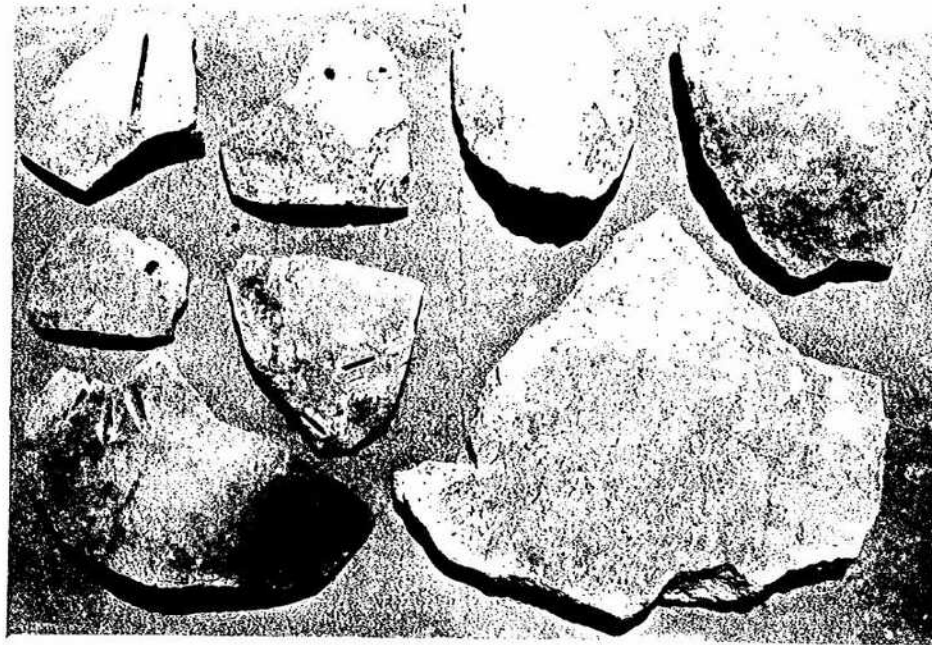
第三三(乙) 同上

裏面白紙





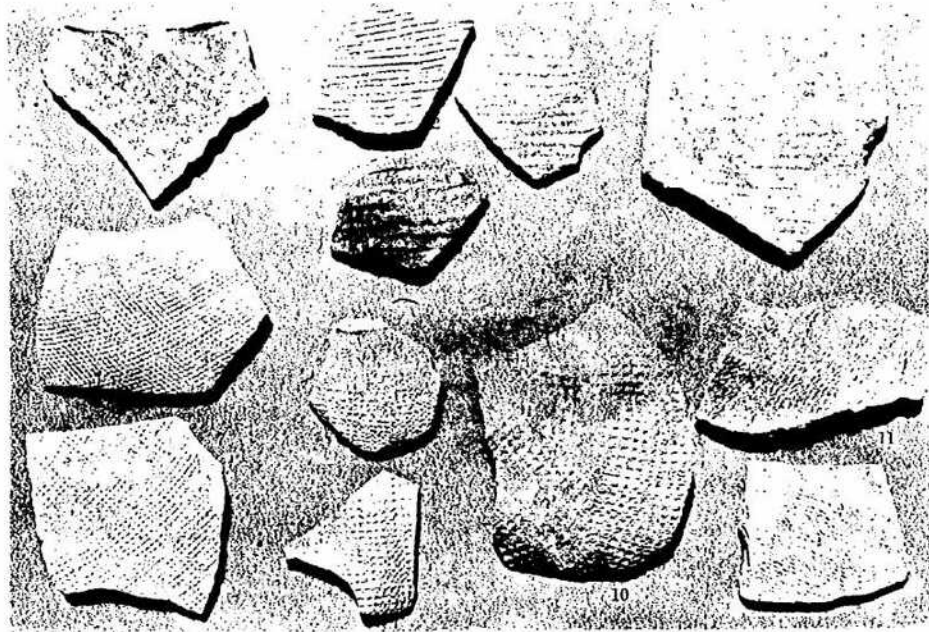
第三四 金海貝塚發見點青色土器口緣部 (二)



第三五 同上發見土器底部 (概等)

裏面白紙





第三六 赤色素燒土器片捺型紋

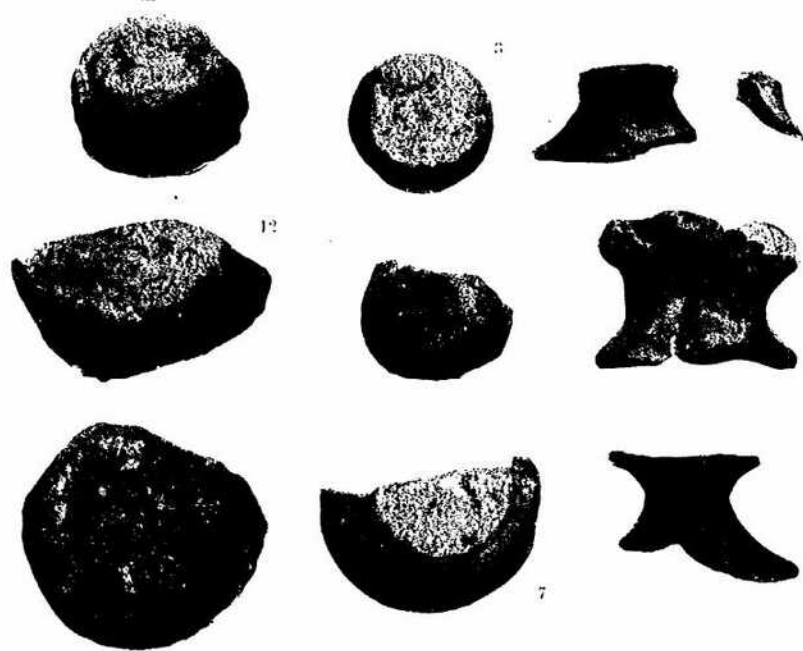


第三七 陶質黝青色土器片捺型紋

裏面白紙



第三八 赤色及黑褐色素燒土器碗底側面



第三九 同上裏面及蓋付土器片

裏面白紙

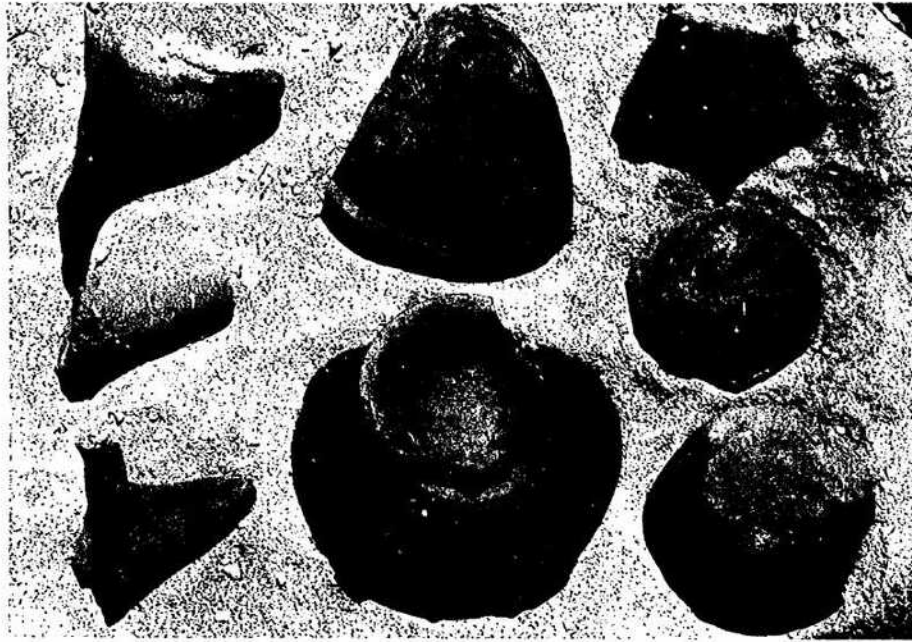


第四〇 金海貝塚發見小壺及圓錐形鉢

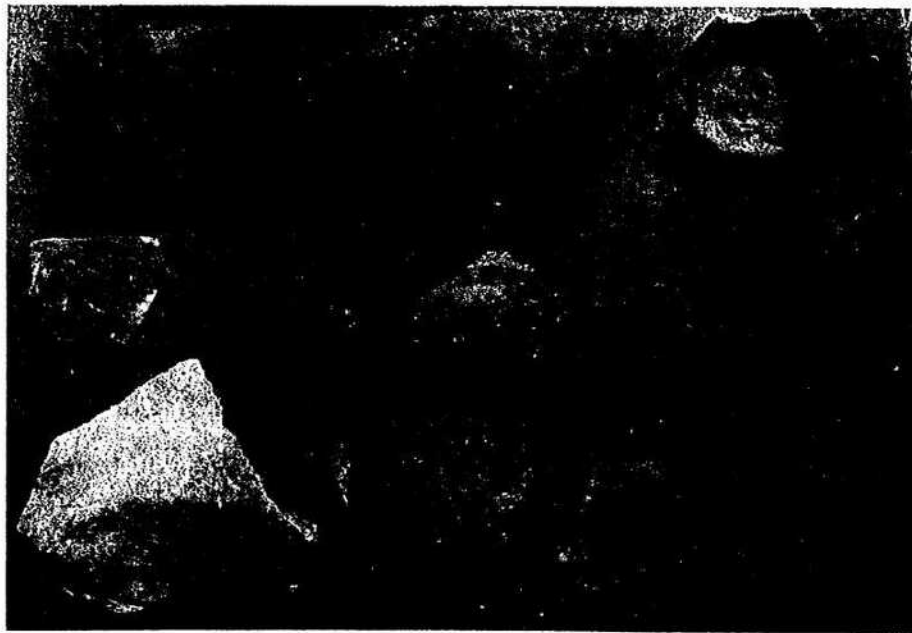


第四一 金海貝塚發見各種土器把手類

裏面白紙



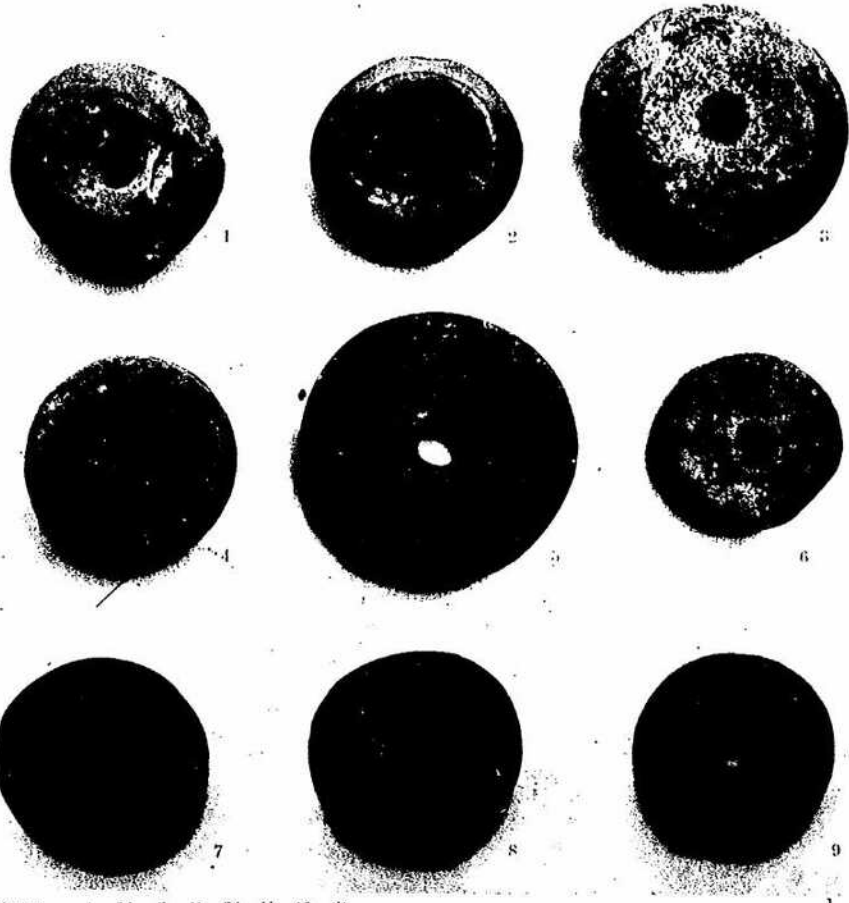
第四二 南方岸部發見土器片 (其一)



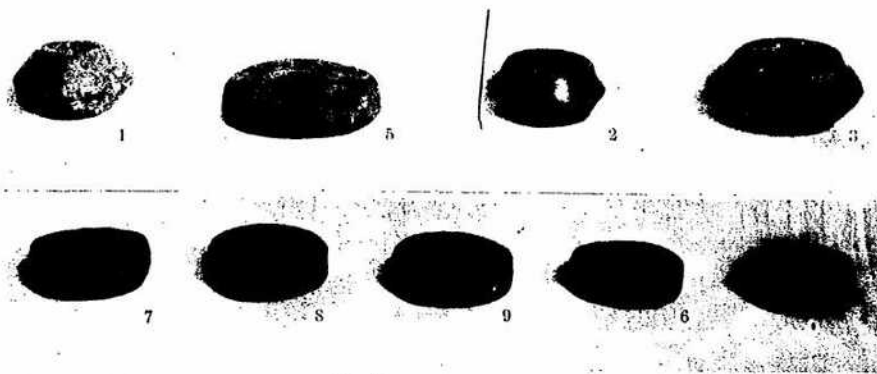
第四三 同 上 (其二)

裏面白紙

圖版第二五



第四四 土製及管製紡錘車

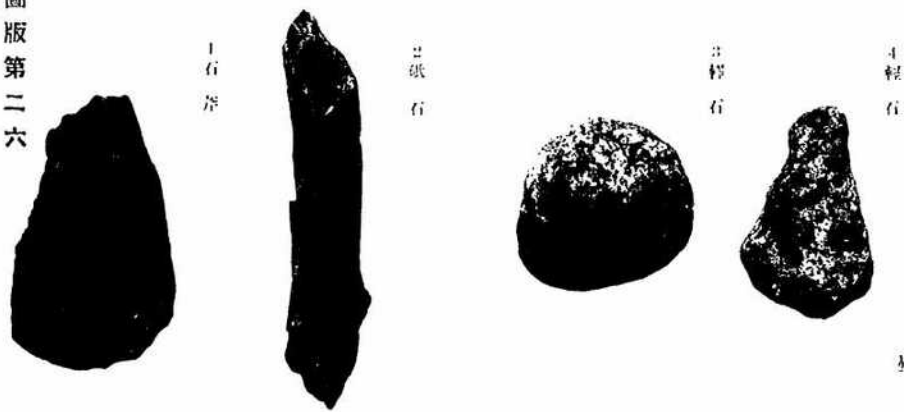


第四五 同上 (側面)

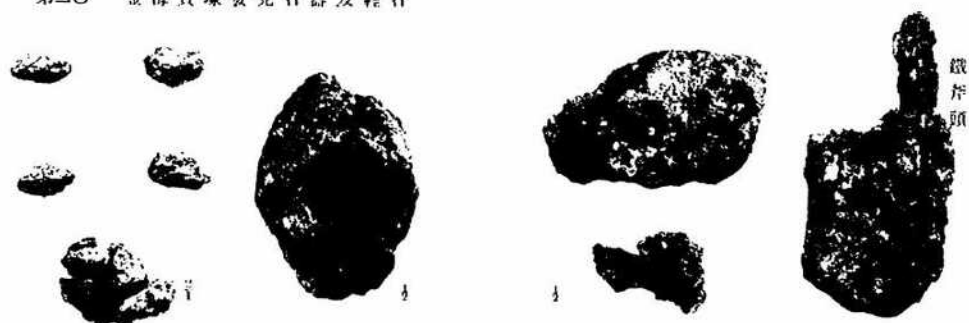
裏面白紙



圖版第二六



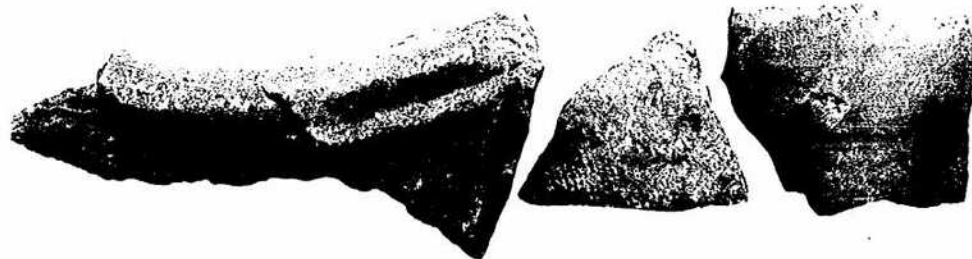
第二〇 金海具塚發見石器及礮石



第四九 同上米粒塊

第四六 同鐵斧頭及鐵片

第五〇 金海具塚發見木棒



第五一 同上發見古瓦片

裏面白紙

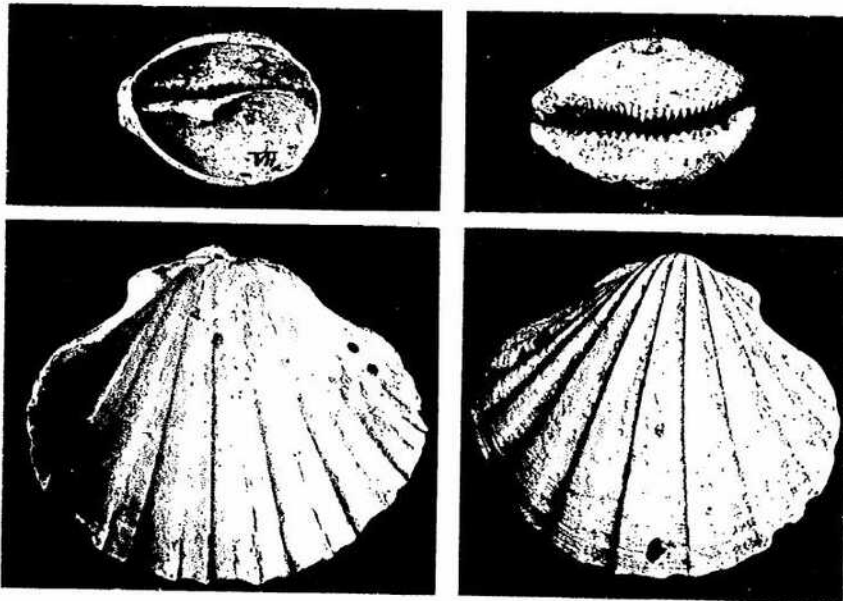
圖版第二七



第四七 玻璃製珠玉



第四八 背泉寫黃及拓影



第五三 金海貝塚發見貝加工品

裏面白紙

圖版第二七



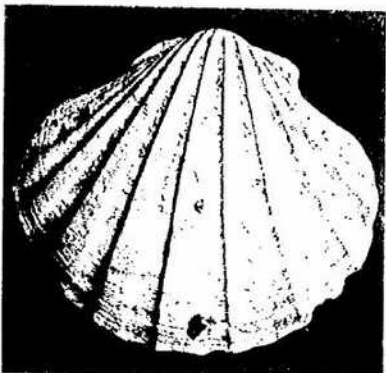
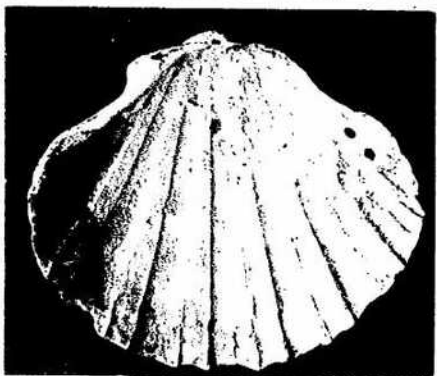
第四七 玻璃製珠玉



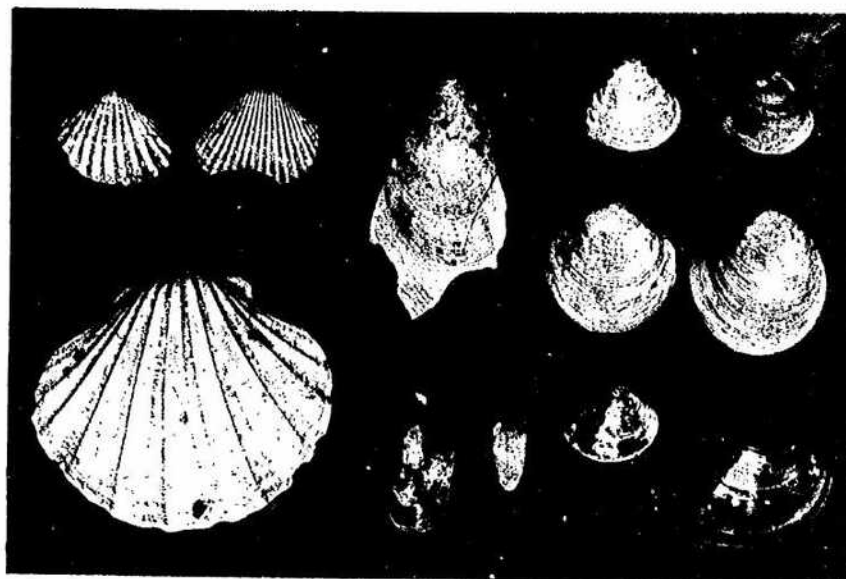
第四八 貨泉寫真及拓影



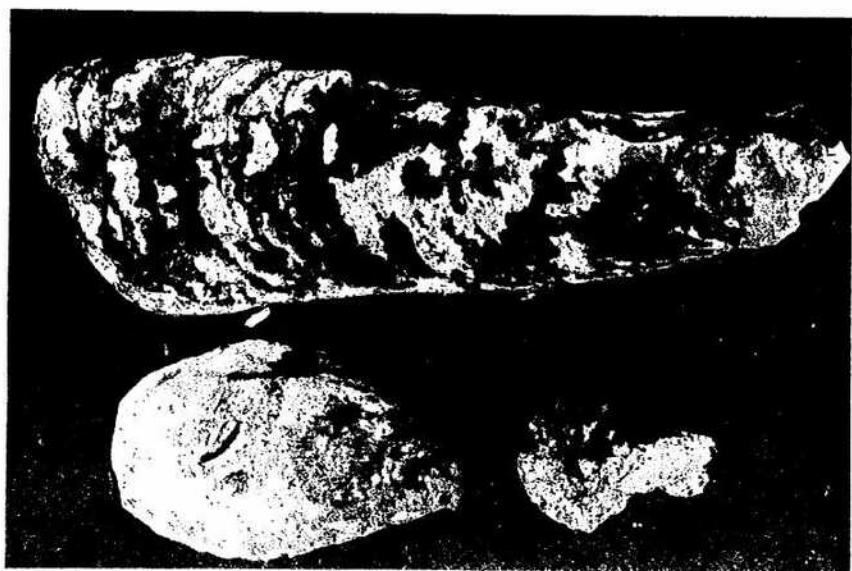
第五二 金海貝塚發見貝加工品



裏面白紙

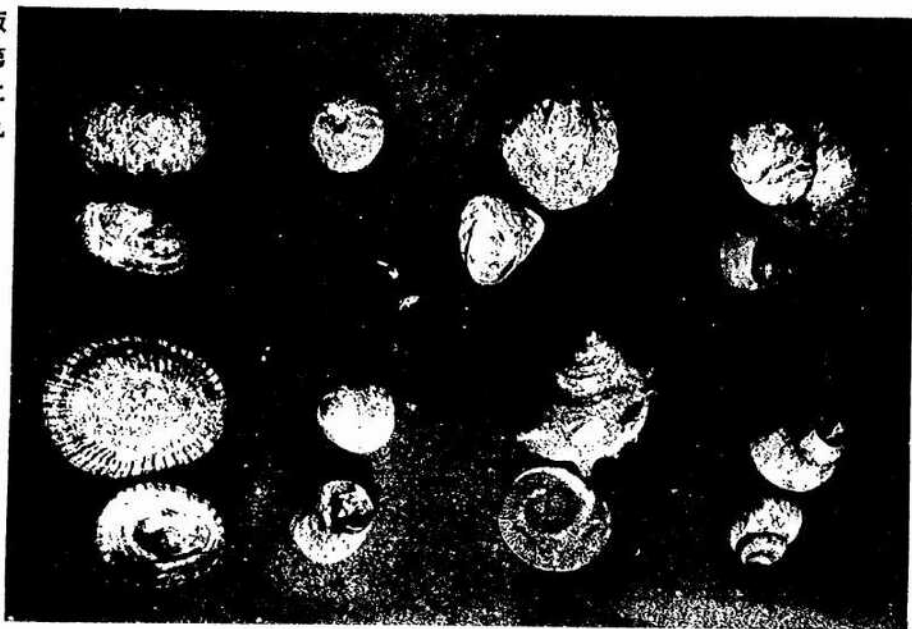


第五三 金海貝塚採集貝類 (其二)



(約三分ノ二)

裏面白紙



第五回全海貝塚成貝類 (其ノ二)



(其ノ一)

裏面白紙



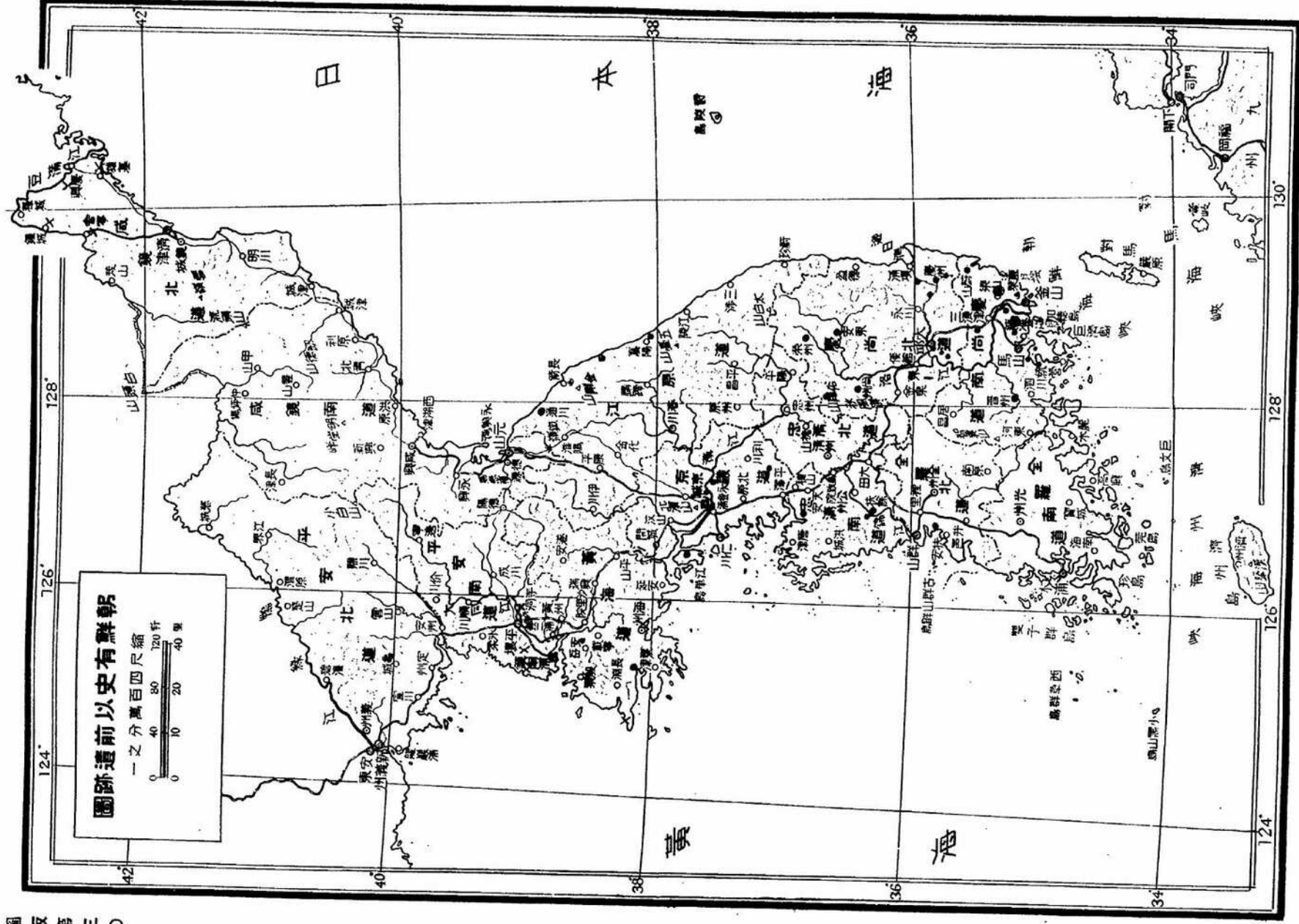


圖 版第三〇

不示ノ跡道ノ器土紋線様ハ X

跡道ノ器土紋線様ハ ● 【考証】

裏面白紙

大正十二年三月十日印刷  
大正十二年三月二十八日發行

朝鮮總督府

印刷者 京都 株式會社似玉堂